

川柳塔

平成二十九年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇八〇号



日川協加盟

🌸 第5回 春の川柳塔まつり誌上大会 🌸

No.1080

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 五月二〇日

川柳塔社

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

柳友は百二歳

小島 蘭 幸

デイサービスセンター、ハートフル竹原中央は、平成16年に開所されました。先日、ボランティア活動をされている約30の教室、クラブの講師を招待して初めての感謝会が開催されました。出席者は60名、私も川柳教室の講師として出席させて頂きました。

川柳教室は、川柳塔同人の石原淑子さんと誌友の土井輝恵さんを中心に、ハートフル川柳として、平成17年7月に第1回が開催されました。私は退職の年の平成19年3月から出席しています。

ハートフル川柳の内容は、席題を出して、出席者の皆様に一句ずつ添削をして全員の作品を披露、選評を致します。約1時間、出席者の皆さまは、キラキラとした瞳でとても熱心に聞いて下さいます。席題にしたのは、課題が出ると瞬時に集中して、過去、現在、未来をイメージして作句されますので脳の活性化には、一番だと思ったからです。講師になって10年、多くの皆さまが文芸としての川柳に挑戦

していただいていることを嬉しく思っています。

いつも来るコオロギがなぜ来ない

喜美子

映画にしてみたい終戦後のわたし

豊子

癌手術五年越えたり梅見会

恵美子

毎月開催しているハートフル川柳には、現在10数名の方が出席されています。その中に満百二歳の辻岡末雄さんがおられます。末雄さんは97歳の時に初出席されていますので、川柳歴は5年です。約60句の中から私の好きな作品を4句選ばせていただきました。

ひまわりはこの暑さにも負けないな

末雄

獅子舞が表紙を飾る雪が舞う

〃

紅葉狩り展望台は無理でした

〃

竹に節あり難題を解いてきた

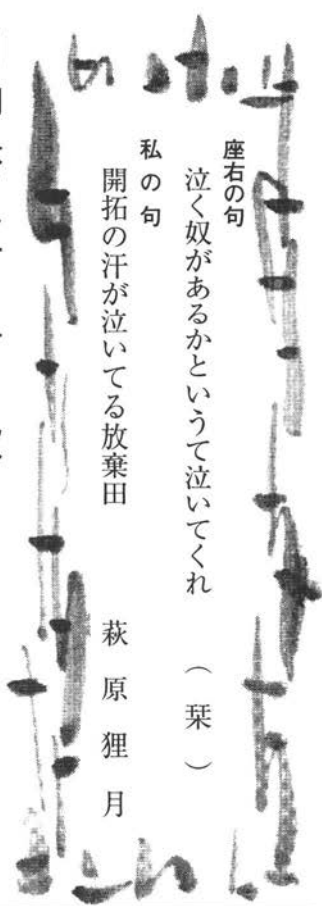
〃

竹原川柳会会員の末雄さんは、百五歳まで、すでに会費を納入されています。

百二歳東京五輪視野に置く

蘭 幸

ハートフル川柳出席者の平均年齢は、約90歳、私は出席する度に元気をいただいています。



座右の句

泣く奴があるかというて泣いてくれ

(葉)

私の句

開拓の汗が泣いてる放棄田

萩原狸月

川柳塔 五月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「高槻芥川鯉のぼり」

■巻頭言 柳友は百二歳

小島 蘭 幸 …… (1)

義母・西出一栄

西 出 楓 楽 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

小島 蘭 幸 選 …… (4)

自選集

水野 黒 兎 …… (46)

句集の森

木津 川 計 …… (48)

■ショートエッセイ 俊平となあ

麻生 路 郎 …… (49)

温故知新

西出 楓 楽 選 …… (50)

川柳塔の川柳讃歌 (149)

吉村 侑 久 代 …… (71)

新川柳鑑賞 (63)

吉村 侑 久 代 …… (72)

水煙抄

吉村 侑 久 代 …… (72)

英語 de Senryu (65)

吉村 侑 久 代 …… (72)

俳風柳多留一二篇研究 47

吉村 侑 久 代 …… (72)

愛染帖

吉村 侑 久 代 …… (72)

檸檬抄「適」当

吉村 侑 久 代 …… (72)

義母・西出一栄

西 出 楓 楽

久し振りに義母の川柳句集『ねつくれす』を紐解いてみました。

昭和四十六年十月十日、義母の六九歳の誕生日に上梓されたもので麻生葭乃先生の助言を得、金井文秋氏・当時川柳塔編集長だった不二田一三夫氏のお力添えを得ました。赤い表紙に淡いブルーの箱、デザイン・題字は川柳塔随一の能筆家・中川滋雀氏。私も及ばずながら清記などでお手伝いをしました。

肩に力を入れず、身のまわりの出来事や思ったことを一七音字に纏めた四百数十句です。これまでに何回か読み返していますが、そのたび七人の家族と住み込みの従業員数名で、賑やかに過ごした日々が懐かしく蘇ってきます。

女なるかや猪首にも首飾り

仮縫いへ時間がかかる肥満体

義母が衣裳道楽で装飾品が好きだったことが詠まれています。

橘高薫風句抄

一路集〔主 張〕

初歩教室「あなた」

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

せんりゅう飛行船 ⑦

インスピレーション・ナビ 印象吟

追悼 町紅さんを偲ぶ

追悼 瑞枝さん さようなら

第五回 春の川柳塔まつり誌上大会

四月本社句会

句会燦爛

各地柳壇（佳句地十選／浅田隆樹・古久保和子）

五月各地句会案内

柳界展望

■編集後記（ひとこと／磯部良雄）

両川洋々選 …… (81)

太田扶美代選 …… (82)

居谷真理子 …… (83)

川本 畔 …… (84)

中原比呂志 …… (86)

新家完司 …… (88)

大西泰世 …… (89)

竹治ちかし …… (90)

八木千代 …… (92)

岩崎眞里子 …… (93)

岩崎眞里子 …… (94)

岩崎眞里子 …… (116)

岩崎眞里子 …… (120)

岩崎眞里子 …… (121)

岩崎眞里子 …… (124)

岩崎眞里子 …… (136)

岩崎眞里子 …… (138)

座右の句

口笛を吹いて老人会に行く

私の句

巣立つまでこの子をぎゅつと抱きしめる 内田 志津子

(保 州)

普段はとても仲のいい両親でしたが、何分義父は明治男で遊び好き。病弱で外出がままならなかった義母は、よく焼き餅を茹いていたものです。

若き日の嫉妬さめさめ泣いただけ針に糸通らぬ齢で妬いており夫婦喧嘩犬も喰わぬは若いうち三人の孫たちもよく登場します。

一日がこんなに長い孫の留守風の子の群れに見つけたうちの孫市場籠孫ひきずって持ちたがりもちろん私も顔を出します。

嫁が来て献立替わる台所嫁のセンスおしやれな姑にしてくれるシクラメン赤を並べて嫁若し

あれからもう四十六年経ったというのに、つい昨日のように当時が思い出されるのは歳のせいでしょうか。

その後幾度かの入退院ののち、昭和五四年二月二十七日、享年七七歳で義母は旅立ちました。「徳相院柳篠榮照大姉」と、生き甲斐だった川柳の「柳」を戒名に入れてもらっていますから、きっと天国で川柳三昧の日を送っている事でしょう。



小島 蘭 幸 選

大阪市 谷 口 義

お静かに桜が咲いているのです

八十歳まだまだ中途半端です

一気飲みいってもお薬のこと

むつかしい転け方しはりましたなあ

サクラドロップ好物のひとつです

ええやんかおばあさん同士の話

弘前市 福 士 慕 情

故郷に鬼伝説の山がある

一筋の途を歩いて鬼になる

職場には鬼も仏もいて平和

飢えを知る昭和の鬼の奮闘記

鬼に金棒 わたしに何がある

弔詞読む鬼の涙を見てしまふ

弘前市 高 瀬 霜 石

外された梯子を念力で戻す

ホットな意見クールな眉につぶされる

家庭内別居ができる広い家

胸襟をひらくお銚子三本目

天地あめつちも泣く大量の食べ残し

悪友のなれの果てなり好々爺

和歌山市 木 本 朱 夏

音もなくドアがひらいて始まった

すり切れた指紋と春の入口に

遠くから誰かが呼んでいるような

生き方を問う楷書から草書体

モノクロに磨り減ってゆくわたしの時間

手袋が落ちてる春の交差点

榎原市 居 谷 真理子

草でなく木でなく竹として生きる

私の深いところで春嵐

正直に咲けば血潮の色になる

泣く笑う飯の世なんてものはない

あるんだね愛した罰というものが

品格が欠け百均の棚に居る

三田市 村田 博

噓しか存在感のない私

さて誰と握手しようか手を洗う

オンとオフ昼と夜とが入れ替わる

クリオネのダンス見たさにオホーック

死ぬ生きるそんな修羅場はもう来ない

腰痛の姿恋人には内緒

犬山市 金子 美千代

一瞬のひらめき一瞬にして忘れ

おはようと鏡に作り笑いする

時々顔を出す昭和の価値観

バーゲンを待っている間に気が変わり

年取るのもいいかあんまり腹立たず

復興は遅遅とフクシマ七回忌

鳥取市 岸 本 宏 章

気配りの手本女将の靴すべり

老人に特にやさしい路線バス

四季咲いて菊が花屋で胸を張る

故障した時計を直す店がない

廃止する最後の汽車が混んでいる

空港の監視カメラに喝采を

鳥取市 森 山 盛 桜

マドラーで消せるくらいの蟬り

反芻をして幸せを思い出す

邪なカラスが乱す春の景

桜にも七つボタンの暗い過去

異星人だろうブランド買い漁る

言い方もあるうに素首落としとは

大阪市 古今堂 蕉 子

思いつきやつぱり根無し草でした

ハンドメイドぬくもり感と粗雑感

時価という寿司に心臓つぶされた

馴染むってこういうことや古い靴

しみしわが消えるとテレビから呪文

賑やかな街を歩いている孤独

河内長野市 山 岡 富美子

日溜りが自浄作用をオンにする

ケアハウスばかりが増える春の冷え

自打球の疼きに処方箋はない

黄昏ないように喇叭もたまに吹く

ありがとうと言えば筈はよく響く

老いをゆく哀も喜劇も織りまぜて

堺市 澤 井 敏 治

百句集支えてくれた没千句

背中押す刺激はやはり飲み仲間

忘れたらアカンとマグマ揺れ動く

風邪三度治りようやく爺の春

笑い袋ついでに本音吐いている

美しく老い美しく日向ぼこ

松江市 石橋芳山

モモ缶の中でいちゃいちゃするでない

因習の街に点在する化石

まだ期待しているリング落ちないか

一本二本森が裸にされていく

べったりと嘘だと顔に書いてある

埋めるもの決まらず海に穴を掘る

吹田市 太田昭

辞書を見るゆとりもあつて老いの坂

身の丈のプライド包む紙オムツ

望みなら昨日でつかい切りました

雑踏の中に揉まれている安堵

陽だまりの春は饒舌ほろ苦し

香水に汗の価値などわかるまい

岡山市 工藤千代子

悔しさがバネにならない背は曲がる

涙がまだ残っていた梅が散る

昨日なら一緒に泣いてあげたのに

息をすることもしんどいなー弥生

味方にもならぬ鏡を捨てました

遣り切れぬ心 朝陽に干している

枚方市 海老池洋

水仙を活けて心を春にする

新花金いいが小遣い増えぬまま

雪の日は雪を相手にして詩人

鶏鳴に元気をもらう冬の朝

喧嘩する相手が欲しくなる独居

よく笑う人幸せと限らない

大阪市 川端一步

廃線の駅にも咲いている桜

徳利の絵手紙届く花だより

言わぬ手もあつたと後で悔いている

そのうちに八十路は若い言われそう

伸びしろがもう無くなった無理しない

寝転べば句が二つ三ついいベッド

四條畷市 吉岡修

今日のこと開いたままの日記帳

田植には帰った家も今はない

志みんなネオンにくれちゃった

俺の背を見て育つたらそんなところ

大河ドラマ一緒に見えて無害なり

赤字でも誰もリストラ無い我が家

三田市 北野哲男

六感にもう一感を母が持つ

お水取り火の粉と風邪を頂いた

時々聞き間違える天の声

お元氣ねお歳の割りは触れずおく

丸い石だけで石垣築けない

藁の屋根終いの栖に猫と住む

鳥取市 池澤 大 鯰

食糧難戦後を思い山菜を

筍もそれぞれ旬を持っている

山鎧うとけこむ元氣まんだある

独活を採る独活と言われぬために採る

ツチノコの出現期待散歩する

鳥取市 加藤 茶 人

安楽死認めて欲しいほどに生き

そこまでは言うな男の値が下がる

漫才のネタなら愚妻にもなれる

してやった事は覚えている左脳

血糖値下げる薬は寄席通い

鳥取市 岸 本 孝 子

テレビから覚えた料理嫁が誉め

もたもたとしても猫よりましである

ふきのとう欲しくて庭をかき分ける

我が家では足の落ちてる松葉蟹

記念樹の紅梅咲いて庭が春

鳥取市 倉 益 一 瑤

雪女に拉致されたのか鬼桜さん(鬼桜さん逝く)

豪雪に摸一匹とひきこもる

この橋を渡れば傷は深くなる

何時か来る睡魔恐れることはない

雪 雪 雪とじこめられる恐怖知り

鳥取市 坂 本 とも 湖

ロボットが神の予言を聞き入れぬ

どうせなら百まで生きて句と遊ば

母子手帳やつと親子になれました

皇居だと知らぬ桜が咲き誇り

九回裏のドラマへ神がそっぽ向く

鳥取市 棚 田 大

ハラスメントどんどん増えてハラハラだ

大雪もほしいやだと勝手よな

メンタルテスト意識し過ぎてやつれはて

難題は明日解くよと今日も言う

暖房しアイスクリーム食べている

鳥取市 谷 口 回 春 子

語り合う友の存在長寿の薬

目的がわからぬままに暮らす老い

戯言の中に真実ピカツと光る

浅知恵は次から次と湧いてくる

忘れてた雪国でした鳥取も

鳥取市 永 原 昌 鼓

春霞身近な人がまたも逝く

歳下の恩師会えるは黄泉の国

賢いと言われ育った頃もある

年の功今日も生きてる恙無く

リフォームの利かぬ脳ミソ持て余す

鳥取市 中村金祥

意地という勲章つけて土俵入り
老々介護メンタル強くなる絆
揺れている疑惑根っこが朽ちていく
戦争へ進みかねない愛と憎
弥陀の手に乗っても迷う何故なのか

鳥取市 夏目一粹

ドカ雪の除去はお日さま任せです
新聞を切りとる癖も役立たず
零細に花金なんか夢の夢
慎太郎不利をボカシて百合子斬る
ほんとうを言われて腹も立たぬ歳

鳥取市 西川和子

老人会それぞれ皆花ざかり
先輩の背で世渡り術学ぶ
先輩の心配りが有りがたい
先輩の早い仕事について見惚れ
後輩に任せゆったり茶を啜る

鳥取市 平尾菜美

うしろ立てない紙つぶて的もない
旅立ちの断捨離どうぞお手軽に
晩学の気力やる気に望みかけ
衣きせぬ友の忠告身に染みる
あこがれの未来めざして突っ走る

鳥取市 福西茶子

メンタルは達者 記憶力疑問
遺言書書くほど金も物もない
テコンドーやっぱり私には向かぬ
オハヨウとオヤスミだけは欠かさない
脳回路壊れて苦惱なくなった

鳥取市 前田楓花

嫁ぐ日を花屋の花は待っている
幸せの貯金なかなか貯まらない
南風やさしい顔でチョイ悪だ
哀しみの底から希望だけ掬う
深いとこ見ている君の優しい目

鳥取市 山下凱柳

荒れていく故郷守る人も無し
スマフォよりやっぱり手帳手放せぬ
善悪を丸め込んで世を渡る
思いの丈全部吐きだしすとした
古希過ぎてゆったり生きる当て外れ

鳥取市 吉田弘子

亡母の齢まだ十年へふと不安
責任ある顔になったか傘寿越え
思ひ出の景色いつでも傍に夫
簡単に筒抜けしてる一大事
過疎のバス時計代りの野良仕事

倉吉市 猪川 由美子

安倍一強野党よもつとしつかりな
総理殿妻もからんでピンチかな
小池知事色んな敵へパワフルだ
雅子さまいよいよ覚悟よろしいか
墓建ては川柳モチーフにしよう

倉吉市 牧野 芳光

昨日まで風に吹かれる砂でした
ポテトチップスみんな食べねば治まらぬ
前期高齢誰も頼みに来なくなる
雑念がよぎった時に誤嚥する
友達ならきつとわかってくれるはず

倉吉市 山中 康子

治したい大きな山があるのです
この山を越えたらきつと泣くでしょう
年金を命の綱に空財布
何も彼も知らぬ振りして千里眼
その昔卵一ヶを四等分

米子市 後藤 宏之

さあ帰ろうあの人の歌はじまった
ありがとうラッキーゾーンあればこそ
米びつが落語そっくり空になる
問題は解決青になってます
平仮名も漢字も読めぬ書道展

米子市 後藤 美恵子

子育てにどんなサインも見落とせぬ
背の高い子らと目線が合いにくい
ダイエット敵はよく鳴く腹の虫
脳の錯落とすバズルにはまってる
福の神居着かない訳省みる

米子市 竹村 紀の治

スマホ溢れて脳味噌は枯れてゆく
お誘いの声を朝から待っている
あぐらも正座もよく似合う短足
身のほどを知れと座骨神経痛
だらだらと続く私の宵まつり

米子市 中原 章子

八十路坂どんと構えて楽しもう
長寿姉妹失敗談を笑い合う
寒ゆるみやつと散歩を取り戻す
これからが晩成だよと暗示かけ
就職と結婚までは甲斐性だ

米子市 成田 雨奇

私の出しているのも自選句だ
句誌が来て自分の名前だけ探す
これからもぼくは暗殺されません
あの時のあれがラッキーだったんだ
子の暮し支える親のこの暮し

米子市 吉田陽子

雨くもり雨を楽しむのも大人
さようなら冬試練を一つ乗り越えた
ツイッター自己主張にはこと欠かぬ
故里をふるさとするこぶし咲く
割烹着母ほど使いこなせない

鳥取県 石谷美恵子

メンタルテスト歳相応で異常なし
ブランドの皿へビびっている団子
五体健康脳味噌だけがシャンとせぬ
増えるのは我慢しましょう笑い皺
賢さを表に出さぬいい女

鳥取県 斉尾くにこ

親切の循環血液のように
キャベツの葉外は鎧になっている
考える楽しさ読み解く楽しさ
真冬日も冷やして癒やす冷蔵庫
蝶になる練習帳とらくがき帳

鳥取県 竹信照彦

無意識に無難探している自分
無難には済まされぬ趣味二つ三つ
趣味一つ難癖付ける文句言う
締切りをぎりぎりクリアして安堵
春の陽に無難に無縁吾が日頃

鳥取県 西谷悦子

過去形にすればみな美しくなる
まだ好奇心のスイッチ持っている
ゆとりゆとりと心の窓に言い聞かす
亡き父母に受けた愛情子へ還す
街角に葬儀看板いつも有る

鳥取県 松川行男

惑星の生物見るまで死にやせん
昨日までオリンピックを的にした
惑星の続報早く寝ておれん
ペンよりも重たい春の一步出す
春ですよ入試発表誰と行く

鳥取県 山下節子

日本の伝統絞り染め着物
三人の知恵を絞った名案だ
賢いと言われる度に気が重い
嘘少し潜め言い訳すぐばれる
あの時の悔いを潜めたまま生きる

松江市 小川注湖

十月十日抱いたこの子の重さ知る
喜寿祝いあなたと呼んで盛りあがる
美容院その後溜まった噂聞く
棟梁の背が教えてるのみの音
学ぶ気は国語辞典が知っている

松江市 川本 畔

独り鍋ひとりの顔に煮えてきた
時に撫でまた磨いたりする命
古民家よなぜか来たことあるような
行方不明残る鱗の二三枚
リズムカル君の言葉は憎めない

松江市 藤井 寿代

菜の花に誘われスクワット5回
黄緑に囲まれ心までみどり
アデイシユナルタイム5年をどう生きる
銃口に私の余命狙われる
春雪にアッパーパーパンチ喰らつて

松江市 松本文子

月を見る窓だ綺麗に拭いておく
雪は消えたよ魂よ起きなさい
溜息ふわふわ宇宙ごみの様に
川柳です袖の下など効きません
国会答弁拷問受けているように

出雲市 伊藤 玲子

春の雪湯舟を覗く鳩を呼ぶ
ひらめきも失せつみ残された春のバス
巣立つ子を祝うが如し辛夷咲く
友が逝き肌着剥がれる身のふるえ
安全な水をいただき長居する

出雲市 岸 桂子

掌の凹みに春がのっている
足音の揃わぬままに春が来る
飛ぶように流れるように逝く月日
日めくりの一枚にある哀の記憶
相槌を打たぬ遺影とふと気づく

出雲市 小白金 房子

才女にはなれず農婦で来たモンベ
五百羅漢心の憂い去って行く
仏飯の下がり頂く老いの箸
登校の顔が輝く春の道
ひい孫を祝う掛軸春を買う

出雲市 多久和 敬子

ゆつくりと歩けば草木語りかけ
孫の絵にパパとママとが何時も居る
物置きでひな人形が音を立て
百歳の子供八十歳になり
たこ焼きが好きな百歳おばあちゃん

雲南市 菅田 かつ子

窓辺にも隣の紅梅咲き初め
意識してちよつぴりお洒落して出かけ
忙しいうちが花よと励まされ
おしゃべりな雀はとても社交的
お互いに薬見せ合う旅の朝

雲南市 松本 昌

平々凡々それでいいのさ八十路

直実は語らず政治家引退す

数は力小池新党動き出す

凶と出たみくじに一年無事にすみ

認知症近いぞメガネ置き忘れ

島根県 伊藤 寿美

頑張った過去が時々喋り出す

筆頭に書かれおんな城主は墓の守り

風見鶏リバーシブルの服を着る

津波跡今年も咲いた黄水仙

物言わぬ遺構が語り継ぐあの日

島根県 松本 はるみ

その人は昔語りを生き甲斐に

とおい日の別れはいくつ風の彩

花吹雪遊ぶ相手が見つからぬ

別れの日それでも春は優しくて

そのときの愛は戦に消えました

岡山市 丹下 凱夫

梅一輪一輪老いに責められる

鶯宿梅の下に弁当ひろげている

足腰は冷える頭はのぼせている

股関節コキコキ三寒四温なり

幸せな話のようにミモザ咲く

岡山市 永見 心咲

難解な数式やつかいな偽善

からくりの歯車ずれたのは昨日

絵空事カラスが好きというカラス

翠雨ふる頷くだけの友と居る

太陽は誰のものでもないはずだ

岡山市 藤成 操江

何回も転び自分の道になる

イエスともノーとも言わずついて来る

おこげ飯絶えた生家がふと浮かぶ

なんでもいいが一番困る夜の膳

春がゆく桜の魔法解けぬまま

岡山市 前田 恵美子

三月の声を聞いてもまだ厚着

凡人は見栄などはらず汗流す

庭の梅花良し実良し散るも良し

野菜たちトウの立つ前お嫁入り

一時間得したような春の宵

笠岡市 藤井 智史

満足に笑ってカード使いきる

満潮の愛に溺れてみるゴリラ

わたくしの愛は金券には化けぬ

ガツガツと食わぬ王侯貴族です

天地無用 超合金の愛でした

岡山県 池田 たか子

褒められて鼻唄はずむ八十のブギ
花育てやまい忘れる術とする
生きていて欲しい冬木の芽をさがす
省エネの鍋が重くて使えない
限りある命に拉致が遠くなる

岡山県 高岡 茂子

挨拶はしたが翌日おもいだす名前
昨日の不満汗となげこむ洗濯機
加湿器がわり部屋干しにする孫のシャツ
妖怪が泡とぼして同期会
鴉色の帯揚げちよつとみせる春

岡山県 田中 恵

せせらぎのリズムに乗った膝小僧
縄のれん地酒が唄う子守歌
片棒を担いでみたが重すぎる
新しい風は無口で素っ気ない
節くれた指で命の米を研ぐ

岡山県 山縣 宣子

喧嘩にもバランスとれて半世紀
贅沢を包んで楚楚と生きている
種の壁を越すインフルにある脅威
忙しさとブカブカ遊ぶ仕舞い風呂
夕焼けへ明日の夢を予約する

広島市 岸 本 清

世の中を丸ごと洗濯してみたい
手摺付けちよつと早目の古い支度
手短に話してほしいトイレです
ときめきは満開よりも八分咲き
学びの芽阻む貧困やるせない

竹原市 岩 本 笑子

水仙の揺れて今年も春を呼ぶ
結婚記念日春を花束にして
薬代こんなにも払い生きている
アメリカの娘も冬を越したらし
時々思い出しでる孫の顔

宇部市 平 田 実 男

想定外まさかの坂が増える老い
亡き父がまだ風よけになつてくれ
一日に一句一善ルールとす
年金が出たなと思う市場籠
職業は夢職と書いて川柳を

防府市 坂 本 加代

人の口ワサビ効くほど面白い
ブログでは無口の人もよくしゃべる
愛される言葉を探す全身で
水位線確かめながら避難する
妄想は終わりにしよう朝が来た

東かがわ市 川崎 ひかり

ネットには負けぬ昭和の生き字引

初恋の思いを編んだ古い辞書

晩学の我が師と頼る広辞苑

八十は八十なりの美学持つ

花は律義咲いた順から散ってゆく

松山市 栗田 忠士

鮎売りの声も昭和も遠くなり

年輪を辿れば芯に帰り着く

自分史の余白へ赤をひと滴

氷雨降るひとりぼっちの診断書

のろくても歩ける幸に甘んじる

松山市 宮尾 みのり

一時間ゆつくりを買うティールーム

専業主婦だった世間が狭かった

留守電の声聴いてから取る電話

思春期へ昔話は通じない

正体を暴き過ぎると手が打てず

大洲市 中居 善信

金魚ばくばく言いたいことはたとある

加齢とや背中ばかりが痒くなる

お喋りだった友も寡黙に老いている

さらけ出す友は一人もあればいい

信号機だけが点滅して更ける

西予市 黒田 茂代

トランペットと競い合ってる虎落笛

起きなあかん起きなあかん冷える朝

冬籠りなどしていたら後がない

野菜高救ってくれた自家野菜

元の体に戻る体操日に五回

高知県 小澤 幸泉

届くかもキリスト仏陀わが祈り

教え子と別れる朝の春隣

用意なくいのちの終りやってくる

ゆつたりと過去振り返る老いの椅子

ゆつたりにせっかちとても仲が良い

唐津市 坂本 蜂朗

坐禅する息生臭くなるばかり

親友の危篤を前に失語症

まだ罪を償うことのある傘寿

母介護済んで足腰痛み出す

赤提灯通せんぼする駅のそば

唐津市 山口 高明

望まれておんな冥利の玉の輿

形式と軽く押させる保証印

記念にと賞状を胸に写しとく

酸欠の街に流行の代行屋

花筒に香らぬ花が幅利かす

山の神僕の山なり君の山

熊本市 杉野羅天

子年寄りと言われた頃に釣りや鳩

母の愛夫婦で割れる政治論

日本晴れ飛行機泳ぎ僕の空

アベノミクス年金上がらない事実

熊本県 岩切康子

舞う雪にヒーター持参で句会場

涅槃図のご開帳の列に入る

認知症心得伴に散歩する

口数の多い弟時に邪魔

名物になったプリンを試食する

沖縄県 森山文切

無意識のピアスに無意識のタトゥー

何度も何度も比べた兄の名と

わたくしの名の濁点を消してみる

右折した鳩はもれなく挫折した

色褪せた幕が綺麗に張ってある

札幌市 小沢淳

囚われの白から画布は緑へと

雪の底掘った野菜が贅を張る

売り言葉買わずにおこう長くなる

鹿増えて間引きトキ減り超過保護

ようやくと網締め口は軽くなる

図書館にぼくのもう一つの机

図書館のうつらうつらもいいもんだ

人肌の酒が生国語りだす

春夏秋冬酒と語っている至福

休肝日一日増えた健診日

弘前市 浅田隆樹

雪しんしん少し障子を開けて見る

これで終わりこれが最後と除雪する

春間近かつい早起きをしてしまう

健康に良いこといっぱい知ってはいる

雪とける少女少女合唱団

弘前市 稲見則彦

花吹雪花筏あり酒を酌む

どこでもドア開けてみたいと思う夜

春の陽がどこか優しい七十路

おしゃべりが好きでたまらぬ赤ワイン

ローカル線旅番組の主役張る

弘前市 岡本花匠

日本一さくら剪定春に掛け

剪定枝頂き笑顔さくら好き

さくら祭り百年として大趣向

ふれあいて業の深さを抜くひとひ

級友も少なくなりて哀過ぎる

弘前市 今 愁 女

一日に疊ひと目の日脚伸ぶ
啓蟄に地虫出られぬ雪の嵩
平均寿命百歳間近医の進歩
終活の遺影写真が若過ぎる
弥生三月さくら前線まだ聴かぬ

弘前市 須 郷 井 蛙

干柿がこんなにうまい菌の強さ
犬猿キジ上手に飼って出世する
庭石に大きな税が三代目
人偏になるまで続く長い道
石ころになれず苦勞の日が続く

弘前市 高 橋 洋 子

三・一一あの日的大海をふと思う
脳トレも老いの日課の大仕事
ワンコインランチで集うオフィス街
雪解けにさらりと流すわだかまり
ぼとりぼとり氷柱が萎むよな余生

青森県 松 山 芳 生

ローソクの光に揺れている明日
遠い日の傷を宥めて奈落まで
割れるまでトライしている夜のガラス
ホッチキスがちゃんと鬼の愚を悟す
たましいを揺する吹雪と夜もすがら

さいたま市 星 野 育 子

驚きの言い訳記憶記録なし
喉元過ぎるのが早すぎませんか
独り住めば自由と不自由と
窓口でシニア割引出しそびれ
女子力より目指すのは生活力

東京都 川 本 真理子

世は浮かれ引きこもつてもみるか春
本日より僕をほくから解放する
そう見える訳がようやくみえてくる
青空の先に宇宙を感じた日
お互いに老境に入る五分と五分

八王子市 川 名 洋 子

終活にちらりと欲が顔を出す
ポチよりも隣の犬が愛想いい
好きだからそ知らぬ振りをしてしまう
寝たふりをしている事が意思表示
抱きしめた頃は愛らしかった 毬

横浜市 菊 地 政 勝

人生を桜に重ね仰ぎみる
ゆつくりと渡ってみたい花筏
笑う日がや々と来ました処方箋
疑問符をつけて知識を蓄える
平成に教育勅語学び出す

富山市 島

ひかる

エジプト展絵はがき二枚買いました

ジュニア川柳ニュースと夢で指を折る

若い頃華やかな人家族葬

また眼鏡探す夫へ知らん振り

スーパ一の棚へあれこれ独り言

可見市 板山 まみ子

ボケぶりを笑った後の切実さ

体形が無理と言ってるはやり物

二つ三つチョコさえあればご満悦

春の陽は庭の草取りせよと言う

旨いのは腐りかけてる肉だとか

犬山市 関本 かつ子

あるがまま老いてはおれぬ髪を染め

赤ちゃんを抱かせてくれたレストラン

小中も皆勤賞の孫を誉め

サブリには無縁のままで干物焼き

リハビリもそろそろ終わる手首撫で

愛知県 早川 遯行

万歩計にも笑われる三千歩

ノーマルで行けるとこ迄行つて見る

気持ちよく酔って明日への糧とする

懐かしい友にワインの封を切る

冬越したメダカが動き出す日差し

京都市 清水 英旺

頭さえ下げればすむと言いたげに

ガタピシと五臓六腑に音がする

TVでファッションショーする小池知事

ありがとうと妻に言う日の日本晴

鉛筆の芯とがらせる闇深し

京都市 藤井 文代

百歳の温もり握手から貰う

生温い空気読むにはまず耳で

よいしょの気合だけでは今は立てぬ腰

トイレ入った途端聞こえた発車ベル

気合入れ直すにもまずめがね拭く

京都市 榎本 宏子

回り道したい男が見当たらず

お世辞チップいらぬロボット介護する

お出入り禁止咳止まるまで孫の世話

それなりに美人に育つ祇園街

イチニイサン一度で開かぬビンの蓋

長岡京市 山田 葉子

冬が越せた今年もサクラ見られそう

土筆みつけ視野いっぱい春になる

茹でてからもう筍がうれしい

引き受けてほしくてちよつとよいしよする

立つ坐るドクターの目が追っている

八幡市 今井 万紗子

のどアメがするっと溶けた逢いにゆく

あなたとだから何とかなったこれからも

願わくば三途の川は二人して

雨の日は孫とのんびりクレヨン画

ありがとう ただそれだけで水温む

大阪市 池上 清治

年賀状切手一枚大当たり

稲荷ずし握った友の顔に似て

よいドン孫は両手を握りしめ

嫁ぐ日に遠路の友が祝い文

心静かに話す友人まなびたい

大阪市 井丸 昌紀

いつでも行けるハルカスにまだ行かず

六年も経ちまだ家に帰れぬ人も

春弥生着ぶくれはまだしほまない

てにをはにうるさい人を持て余す

オムライスが売り物ですと純喫茶

大阪市 内田 志津子

美味しいと入った店が無愛想

マニュアルに書いてない事聞かないで

仕上げにはパッと魔法の塩かける

百本のバラに隠した下心

ハイタッチ情報源がここにある

大阪市 宇都 満知子

電話でもメールでもなく逢いに行く

日向ぼこ鳩と野良猫とわたくし

誕生日主婦を休ませてもらおう

春なのにマスク欠かせぬ散歩道

視覚は春なのに体感冬のまま

大阪市 江島谷 勝弘

淋しいなお豆腐が無い鍋でした

爺ちゃんより婆ちゃんすぐお金もち

傘だけはあるあまるほど溜まってる

まだ夢を追っているけど無理だらな

アンタはね詰めが甘いと責める妻

大阪市 榎本 日の出

脳の中かきまぜてるが答出ず

愛あれば何でもかでも我慢する

ゆっくりと煮こめば母の味が出る

町内に百歳が増え背伸びする

順番が狂うと困る次わたし

大阪市 榎本 舞夢

何年振り路の臺が芽吹いている

来年は雛段飾り楽しもう

驚いた地球に似てる星七つ

行けるかな宇宙旅行も夢じゃない

ファミリーの毒殺計るお国柄

大阪市 大川 桃花

古典落語肴に父のひとり酒

きな臭い話日に日に多くなる

感謝状頂き犬も畏まる

こんな風吹く日だったと友偲ぶ

いかなご入荷母のやる気がオンになる

大阪市 大治 重信

長いこと貧乏神とここに住み

思わせて「かしこ」で結び消えた女

妻の味黙って食べて五〇年

結局は妻の意見で落ちついた

蒲公英の絮穂を散らす橋の上

大阪市 奥村 五月

お転婆も優しい顔で雛まつり

肉ジャガを母の味だとほめるシエフ

子供さえ帰らぬ過疎に祖父の墓

無口でも孫には婆もよく喋る

初孫に倉から雛も顔を出す

大阪市 笠嶋 惠美

ハイタッチ元気をくれるカレンダー

神秘かなルビー色出る紅茶飲む

新スリッパちょこんと部屋の顔になり

パリパリとおこうこ噛めてユーモラス

座りたくなる奈良大仏の手の広さ

大阪市 熊代 菜月

母のとし後もう少しがんばろう

エンピツをけずって今日も思案顔

友の顔浮かび私に語りかけ

手の平に覚悟しつかりにぎりしめ

カレンダーめくって明日へ語りかけ

大阪市 小谷 集一

先頭に立って仮面を脱ぎ捨てる

身の丈にあわせて一歩前に出る

弾む日も軋む日もある車椅子

突然の一句深夜にメモ探す

自画自賛自己採点が甘くなる

大阪市 近藤 正

ジュバ派遣早く帰れと祈る母

原始より光り輝くのは女性

全集が書棚を占拠して困る

五重の塔地震に強い心柱

豊洲より豊中が沸く土地疑惑

大阪市 坂 裕之

偉そうに言わない人が穏やかに

爺ちゃんの出番トラブルあったのか

平凡な家で孫だけ走ってる

聞き役で自己反省を教えられ

食べて飲む生きていくのに不足ない

大阪市 田 浦 實

年相応生きる醍醐味分りかけ
鴛鴦の番に逢えた旅の運
国を縁率先される両陛下
寒い朝生駒の日の出老いに喝
どうやら愚痴言える相手はお仏壇

大阪市 津 村 志華子

梅こぶ茶心やさしくしてくれる
卒寿して学び足りない事ばかり
気力七体力三で生きてます
買物も煮炊きも出来て恙無し
ふる里に来ればほんわか亡母の風

大阪市 津 守 なぎさ

退院日近づき元氣くれる友
春一番健気に小花咲き競う
寒に耐え凜と紅梅はればれと
二月堂お水取りにも行つた足
リハビリにゆつたり時間食べている

大阪市 栃 尾 奏 子

美しい緑だ故郷も君も
正解は知らぬが決めてある答え
改札を出よう他人の貌をして
五月雨に流す私の軽い鬱
お見通しなのだなお帰りと笑顔

大阪市 寺 井 弘 子

生きがいにされて居心地よいペット
年金の中でわたしの夢を追う
仮面つけ夫婦円満演じ切る
託された絵馬が叶えた夢いくつ
ピリオドを打つ氣にさせたひとり旅

大阪市 寺 本 実

行間に本心にじむ置き手紙
トランプにゴルフ誘われ有頂天
肩書が邪魔と言うけど譲らない
くどいほど平和の価値を語り継ぐ
助けてと言うのに邪魔な自尊心

大阪市 中 井 萌

欲望で欲望の穴埋められず
小笠原流で夫を掌に
古希にして世間の波にもがいてる
三世代微風を吹かせ和をたもつ
久し振りの温泉の湯はとろとろと

大阪市 原 田 すみ子

欲でがんばって欲で失敗して
ロマン追う男に残る蒙古斑
イメージの大阪一人歩きする
マンション林立沈む日本家屋
せつかちもこの世の旅は急がない

大阪市 平賀 国和

古稀となり人生切符買い直す

如月の満月愛でてなお生きる

残り物集め晩餐妻の留守

山笑い人は笑えぬ被災の地

今声を上げねばいつか悔やみそう

大阪市 藤田 武人

僕色に世界を塗ろう腕捲り

鍵を掛けやつと自分になるトイレ

品定めしている振りで待つ値引き

鯉のぼり秋には虎が天辺だ

あと二年料理洗濯学ぶ僕

大阪市 藤原 千恵子

糸切れて少したじろぐ琵琶奏者

正座して立ち上がれない二年生

私に青い部分が少しある

ヨガの日は何故かスヤスヤ昼寝する

真っ白い雪に触れたいバスの中

大阪市 升成 好

謙遜が過ぎると自慢にも聞こえ

極楽へ続く石段なら登る

若者の一途眩しいことを言う

人はみな勝手私もそのひとり

以下余白斜線は有無を言わせない

松原市 森松 まつお

病院の送迎友へ感謝する

混んでるのもあんまり暇な医者もイヤ

やつとこさ痛みが取れて笑み戻る

カラフルな杖が欲しいと生意気な

妻寝込む何とも主夫は忙しい

大阪市 山本 加お里

いろはでも五十音でも後の姓

真夜中にぱつとひらめき五七五

母に似て何くそだけはたんとなる

近道と教えてもらい元の位置

手を握り好き好き好きと言える歳

大阪市 吉内 タカ子

ごくごくと目覚め一パイ力水

春日和ご無沙汰わびる墓参り

幸せを無駄にはしない昭和の子

カタカナ語チョット脳トレ辞典引く

怖くとも読みたくなるのニュース記事

大阪市 若本 安代

可愛いと言えば可愛い顔になる

芽吹くものみな愛しくて声かける

ひとりひとり送り墓守り私だけ

見る位置をずらし優しくなる心

老人会に誘われショックそうなんだ

堺市奥 時雄

追ひ抜けば平均寿命追ってくる
早く死ぬほど頑張つて生きてない
安楽死無理だろうから尊厳死
酒と癌それで最後は仕方ない
句集出してみて世間の広さ知る

堺市柿花和夫

旅行者に棚田の汗は伝わらぬ
駅なかに邪魔でうれしい立飲み屋
三日目のおでんと妻の愚痴くどい
密談が染みてる料亭の柱
リーダーの決断を待つ風見鶏

堺市加島由一

貧しいがわたし貧乏人じゃない
酔いました両手に花と通り抜け
さくらほめ懶祭に酔い独りぼち
座ってる人を立たせた独り言
横綱らしい相撲になった稀勢の里

堺市源田八千代

似通ったタイプの人が権力者
建前と本音誰しも二枚舌
未来志向元気澆刺小池さん
唱歌うたい原風景が甦る
高齢者の行き場無くなる長寿国

堺市齋藤 さくら

もう彼岸未だコートを手放せず
そのうちに忘れる悩みたんとあり
外出が三日続いてああしんど
日本人やつと横綱お目出度い
紅さして身体の無理を忘れてる

堺市坂上 淳司

逆走を恐れ返した免許証
芋米に替わった亡母さんの和服
飢える民見捨てミサイル撃つ狂気
妻臥して気付く己の厄介度
東電の尻拭き民は腑に落ちぬ

堺市遠山 唯教

若者の生きる勇気が眩しすぎ
古雛を母子でかざる雛まつり
新横綱を祝うなにわの触れ太鼓
春のよい居心地のいいピアノソロ
長湯の妻案じて風呂の戸をたたく

堺市内藤 憲彦

雛まつり妻も乙女の輪に入り
茶柱がもうひと花とそそのかす
世のために大輪となれ新社員
大逆転ねらって赤字決算書
お早うの声かけあつて三世代

堺市 村上 玄也

風も水も冷たく光だけが春
ジョーカーが世界に火種まき散らす
洗脳をされたかイエスマンになった
肩書を嵩に老害まき散らす
肩書にしがみついてる老い哀れ

堺市 矢倉 五月

いい年と言われてよけい胸を張る
好きな事好きにしますと傘寿とか
掛かり付け医者も傘寿でお元気で
鉢植えの置き場所換えて花が拗ね
家事テレビうたたね聞き合う疲れ

池田市 栗田 久子

マイナンバー背負うわたしも亀になる
二度までも死の淵のぞき立ち戻る
骨折予防今日も歩いた三千歩
一言が通じた友になれそうだ
散歩道迷わぬように辻地蔵

和泉市 横山 捷也

八十近し甘え上手になってみる
言い負ける事も幸せ孫巢立つ
四月馬鹿落としどころを探してる
温もりが欲しい誰か電話くれないか
千本でも一本でも良い梅見酒

茨木市 島田 誠一

白黒をつけた境を情が埋め
言い訳はしない男の不器用
反応が無くて留守電まだ苦手
孝行のつもりか孫を預けられ
その話三回目ですとも言えず

茨木市 藤井 正雄

隣からリングを連れて戻る皿
ちぐはぐなおしゃれで里の母が来る
手掴みで目刺しを焦がす妻の留守
時勢には染まり切れない老いの愚痴
マイペース守る切札持つ自信

貝塚市 石田 ひろ子

老いという敵を上手に手懐ける
淋しさをやんわり解かす文庫本
字余りの一字が川を堰き止める
崖っ縁の恐さも知らず若かった
ばあちゃんのパワー職業欄は主婦

河内長野市 大島 ともこ

人生の終わりの風に向かい立つ
諦めかゆとりかデンと座したまま
当たり前の事が出来てる幸せ度
人生を楽しむテクは無尽蔵
昨日とは違う自分にハッとする

河内長野市 梶原弘光

第三者委員会また立ち上がる
自転車保険いくら掛けよか迷ってる
プレミアムフライデーとは無縁です
盛り付けに自称グルメの一家言
減多に怒らない教師怖かった

河内長野市 木見谷孝代

妖精がスキップしてるランドセル
温泉を巡りほぐれていく心
梅を見た余韻夫婦で鍋うどん
悪友の誘い優先する手帳
節約もほどほど余生楽しもう

河内長野市 黒岩靖博

嫁姑四苦八苦するヤジロベイ
童心に返りデイズニー共白髪
冗談が本当になり玉の輿
さし芽して柿実らすと白寿もえ
終焉まぎわ未だ煩惱捨てきれず

河内長野市 谷久美子

鍵穴から漏れる明かりと笑い声
母が居るだけで嬉しい留守居の子
悔しさをバネにひたすら石を積む
余計なもの減らして暮らす老いの日
素っぴんで暮らす私の有りの儘

河内長野市 辻村ヒロ

泣き疲れ寝た子の頬にママのキス
ふるさとの町並変わり深呼吸
句読点打ち常識に風通す
冗談に包み本心解き放す
他人めく孫の成長目を細め

河内長野市 藤塚克三

メシフロと怖怖亭主演してる
口下手も皆が信じるいい笑顔
還付金で掴んだ諭吉すぐ家出
派手なシャツ買う気ないのに試着室
小遣いが前置きなしに減らされる

河内長野市 村上直樹

触れ太鼓浪花にぱっと春が来る
青雲の沸き立つ孫の鹿島立ち
亡き朋友の秘話を肴に三回忌
衣食住足りてこころの飢餓地獄
ご厄介でしょうが妻よあとすこし

河内長野市 山室光弘

この齢で貢ぐ相手はもみじの手
眉間のしわ野心無くせば消えている
省けない下拵えが創る味
飛んできた異国の匂いエアメール
鶴いない堂々巡り会議室

岸和田市 岩佐ダン吉

言いたいこと言わず空気のせいにする

本当に道真つすぐに来ましたか

一滴が緑の園にする棚田

瞬間にまた大勢を読んではる

とりあえず立とうそれから決める腹

岸和田市 宮野みつ江

友の死に死ぬということ近くなる

行き詰まる叫びたくなる吠えてみる

干からびた私に優し春の雨

虎の皮まとい弱さをひた隠し

お薬師にすぎるひしゃげた心抱き

岸和田市 雪本珠子

忘年の友とチャレンジ英会話

今になり友の言葉が身にしみる

いつからか心のギャップ埋まらない

自立心猫の親子に教えられ

夫婦間つかず離れず距離保つ

吹田市 木下敏子

損得は考えなくて夢を見る

嬉しいな梅も咲いたし内の庭

にこにことラジオ体操背伸びする

カラオケに誘う鶯の喉仏

すばらしい明日にしたい西の空

吹田市 須磨活恵

いろいろな痛みに耐えた人間味

風当り何度も躲したあばら骨

蹟いてなお蹟いてまた信じ

人が他人を信じることの難しく

有情無情春の嵐にゆめ破れ

吹田市 野下之男

世界からにらまれているダテ男

見付けたが第二の地球遠いなあ

父さんの弁当運ぶ月の道

銀盤からさつと綺麗なコマシヤル

三面は見たくないけど少し見る

吹田市 山本希久子

無にはなれぬがひたすら句を作る

遊びごろ次々ころげ出す春だ

似たような歳だあなたもどっこいしょ

傘寿なおやりたいこととやれぬこと

やる気起こさせるアクセサリーの赤

高石市 浅野房子

吹く風にふつと昔がよみがえる

電話ベル身がまえたのに切れちゃった

わたくしはまだまだ正座出来ますよ

年寄りには早朝に目がさめるのだ

好き嫌いはげしい人がご近所に

高槻市 井上 照子

おしゃべりの始めも後もありがとう
天職と思う仕事に就いた春
クロスした脚のポーズに魅せられる
夢の中楽しくワルツ踊ってる
働いて子育て終えた達成感

高槻市 指宿 千枝子

未だ傘寿飛行機雲に夢満たす
卓上に小さな独楽と遊ぶ八十
前向きに楽しむと書く日記帳
過ぎし日を行ったり来たり懐かしむ
ありがとう今日も元気に過ごせました

高槻市 片山 かずお

往年の身軽さ消えて蹶蹶く
好き好きと君に言ってるボクが好き
想い出の欠片並べて午後のお茶
不思議だな遊びの時はない痛み
飲もうかの「の」でもう腰を上げている

高槻市 島田 千鶴子

火のうねり春へ訪う二月堂
啓蟄のニュースに草木まで騒ぐ
空青くひばりは高く麦畑
ゆとりある時は許してあげたのに
風みどり山が笑った気配する

高槻市 初代 正彦

伸び切ったような輪ゴムにまだ余力
春うらら余計マスクが外せない
萎んでる夢も目覚める春の音
本腰を入れると骨の軋む音
胃袋にいだだら食いを叱られる

高槻市 杉本 義昭

いい人と云われ横には振れぬ首
逆転へ闘志を燃やすロスタイム
遺産分け知らぬ枝葉が寄って来る
長男は縛る次男は放し飼い
蓄えた筈の知識が出て来ない

高槻市 富田 美義

穏やかな汗を濾過するコップ酒
これも運オベ終え子等と栓を抜く
生きるため妻の自慢もグチも聞き
手術終え残る命に欲が咲き
目指すこと色々有って老い多忙

高槻市 富田 保子

病床へ十指が祈る子等と孫
聞き流す太さ必要亭主には
春を呼ぶ猫の額に梅が咲き
今に咲く可憐な花の息づかい
合格祈願お札を結ぶ手が寒い

高槻市 原 洋 志

手さぐりの明日へ生きる百日紅
サングラス派閥なんかにかわからず
愛という不確かなもの流れ星
行く雲に泣くも笑うもこの町で
過去がまだ残っています千切れ雲

高槻市 松 岡 篤

嫁ぐ朝父の虚勢がきこちなく
風采は上がらないけど小金持ち
気まずさを笑いに変える苦勞人
祈ったが天気は予報通りです
語気強く答弁したが嘘は嘘

高槻市 安 田 忠 子

同期生たまたま逢って盛り上がる
児を遊ばすママの眼差し温かい
露天風呂青空眺め生き返る
ほんやりと海を眺める一人旅
五〇〇円玉溜めてすぐ出す貯金箱

豊中市 藤 井 則 彦

奥の手を出したら僕は僕でない
日に二度が三度になってきたよいしょ
カードより切符で乗った爽やかさ
いらついたらマルを描いては深呼吸
傘寿には傘寿の花が凜と咲く

豊中市 松 尾 美智代

生きてゆく又ひとつ積む老いの石
秘密だと言われて持たされた重荷
スイッチバック楽しんでる冬景色
好奇心強く時時空回り
もうすぐ終り上手に炊けた牡蠣ご飯

豊中市 水 野 黒 兎

未完成と呼んで完璧シューベルト
アルバムの八の字ヒゲが怖い祖父
山道で甘いと知った水の味
オブラートに苦い思い出包み込む
方程式解けたが解けぬ君の謎

富田林市 片 岡 智恵子

この季節猿も花粉に悩まされ
根を下しすぎて見えなくなる世間
飼い主の心まで診る獣医さん
初場所の横綱に神宿る綱
横綱二人初日に負けて荒れる初春

富田林市 関 よしみ

計画が仕切り直して狼狽える
号泣の私なだめてひとり旅
襖絵の雀が姿消したきり
今更を解いて遣る気を押すダツシュ
たつぷりと愚痴吐いた捻子締め直す

富田林市 中井アキ

お誘いが続き笑顔を磨いてる
トランプが嵐を起こす世界地図
ちぐはぐな会話も良いね孫曾孫
鍋キユーブ色々試す老いの膳
カット野菜重宝してる指の怪我

富田林市 中崎深雪

まだら惚けもええやん天の匙かげん
医療難民主治医は吾と気がついた
西や東の名医たずねる旅だった
無駄な検査にムダな薬に待ち時間
たんぽぽの黄が弱気を叱りつけ

富田林市 中村恵

何も彼も捨てて一途に狂えたら
再度挑戦労りの手を振り払い
またしても高嶺の花に恋してる
損得が絡むと恋も味気ない
潔癖が過ぎてなんにも残らない

富田林市 肥山一文

クラス会喋りでしたらとまらない
まっ白な幼いころが懐かしい
栄転と言われ座った堅い椅子
天辺にやっと座った心地よさ
職場には上下に見えぬ線がある

富田林市 山野寿之

丸ボスト昭和へ手紙届きそう
治らない病気がない日近未来
海外へ鉄砲玉になる娘
温室は秀節外れが狂い咲く
自分史に白いページを追加する

寝屋川市 伊達郁夫

春なのに寒い言葉が降ってくる
思うことあつて背伸びをする蛙
善行も写して欲しいカメラアイ
ゆるやかに父に似てくる老いてくる
恋文に往復ハガキ買いくに行く

寝屋川市 籠島恵子

愚痴言えは幸せネエと言う答え
山菜黄が咲いて毎日遠回り
いいとこ取りさせて貰った日向ぼこ
母が来たようだ輪ゴムが落ちている
スケジュール孫を預かるスケジュール

寝屋川市 富山ルイ子

相談され出さぬわけにはいかぬ金
今はまだ貼り薬だけ元気です
今夏もう猛暑の予報氣を付ける
横になる時間が長くなっている
ありがたい感謝の心忘れない

寝屋川市 平松 かすみ

何時までも母にかなわぬものは無い

うっかりと私だつてする誤嚥

ドクターが駄目と言うても手が伸びる

閑あれば背骨の為にぶら下がり

赤信号 整骨院でセミヌード

寝屋川市 森 茜

アナウンサー昔の声で深夜便

祖母ゆずりの薬草煎じる風邪封じ

やわらかに風夕焼けの包む路地

ちぐはぐな知恵でぐるぐる回る櫓

桃活けて賀状届かぬひと想う

羽曳野市 安芸田 泰子

嫌いだとすんなり言えず重い箸

春風にけしかけられて試歩の杖

渡り鳥つもる話があるだろう

許す気があるらしい目が笑ってる

見え見えのお世辞もうれし孫のこと

羽曳野市 宇都宮 ちづる

ストープのやかん沸沸母ひとり

春近し今夜最後の鍋にする

インフルで今年の誌上出しそびる

散歩中浮かんだ三句皆忘れ

留守録に要領得ない話する

羽曳野市 徳山 みつこ

節電に努めて偲ぶ震災忌

再会の友から春のエネルギ―

免許返上短足を撫でている

投函の音に達成感がある

飢え知らぬお人が政治わやにする

羽曳野市 中川 ひろ介

流水に抗う鷗虎落笛

カタクリの花老嫗の曲がる腰

点描の風景画なる黄砂霏

六年目放置の汚水冬景色

焼けこげた葉書老母の宝物

羽曳野市 永田 章司

慎太郎歩く姿に自分見る

便利だが楽しくないねネットの世

生真面目が過ぎて女房居着かない

探し物要らなくなると出てくるの

名刺入れ診察券で膨らませ

羽曳野市 仲谷

百二歳たくさん趣味をもっている

大正の生まれの人は母がわり

昭和のひとケタ生まれごうじようだ

戦前の生まれの人は節約家

私が一番若い入居者だ

(真一改め)
真 まこと

羽曳野市 藤原 大子

東大阪市 佐々木 満作

いい顔の親子に出合うシャボン玉

善意だと取れば節介気にならず

強がりの中に弱さが見え隠れ

上司より若い世代に気を遣い

受験する孫に茶断ちの三ヶ月

羽曳野市 三好 専平

笑うのに鏡の前で稽古つけ

突つぱりも蹴たぐりもまたうまくなり

アホというかわりに大統領という

目も耳も鼻もきかない私です

殺されることは承知です意見

羽曳野市 吉村 久仁雄

許された気になる妻の恵比須願

リーダーになって兎の目が大人ぶる

西行の影と座してる花の下

実力のなさが運まで突き放す

妻にまで気配り愛想笑います

東大阪市 北村 賢子

このご時世普通に生かされる感謝

黒梓の友の笑顔がこぼれてる

もう二度と一緒に桜見れないね

気のおけぬ親友失った孤独

ひよ鳥がわが家の花を食べに来る

右向け右似た者同士仲が良い
ぱっと見は無愛想だが好好爺
秘密裏に事が運んで行く怖さ
言い訳のブログに本心が見えぬ
無事帰宅ご先祖さまに手を合わせ

枚方市 小林 わこ

わだかまりそろそろ流す春が来る

癖一つそれがあなたの魅力です

チョイ悪の父さん今は懐かしい

言い勝つても嬉しくはない一人ぼち

約束はないがきつとあなたに逢える橋

枚方市 丹後屋 肇

地震速報非常袋を確かめる

昭和一桁スピード感がありません

作業終了お疲れさまと謂うビール

早春賦鼻むずむずと目が痒い

持ち株が脅えるトランプツイッター

枚方市 寺川 弘一

初期化をしても思い出は過去のまま

アンドロイドは何度でも初期化する

始発バス最終バスで出会う人

定規が無いと正しい線が引かれない

幸運が続くと神さま信じます

枚方市 二宮 山久

藤井寺市 伊藤 アヤ子

日溜まりのベンチぬくめる老夫婦

盆栽の芽咲きに元氣もらう朝

おとなりと話が弾む春の風

玄関に水仙活けて友来る

うさ晴らし一氣飲みしてケセラセラ

枚方市 二宮 紫鳳

旅プランあれこれ練つて春うらら

吉報を待つてほころぶ寒桜

合格へ夢への一歩歩み出す

縁側に日射し集めてひな人形

手作りのケーキで溶けるわだかまり

枚方市 藤村 亜成

闇深くなるほど光増す教え

もう許そう雨上がりにも光る露

雑音に紛れた叫び声を聞く

弱弱し火が炎となれる風よ吹け

はっきりと浮かんで沈む水平線の船

枚方市 山口 弘委智

ハンカチの折り目にも見る母の愛

受験絵馬隠れて恋の絵馬ポツン

老境で人恋う氣持初め知る

咲く花は駆け引きもせず散る命

無遠慮なことは時に人を切る

手作りの春の香りのよもぎ餅

足早に街行く人も春の色

太陽が昇ると勇氣湧いてくる

生きているそれだけで今幸せです

桜咲く日を待つているランドセル

藤井寺市 太田 扶美代

愛情宣言野菜ジュースを押しつける

れんぎょうチラホラ母の忌やつてきた

約束を守つてくれた福寿草

恋してた頃の瑞瑞しい動悸

橋の向こう女の知らぬ事ばかり

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

花鉢持つとぴりつとする背筋

黙つてはいるけど想う人がいる

注文の春風が来る本屋から

からだ徐徐にほぐれはじめて痒くなる

生い立ちは世間の風に喋らせる

藤井寺市 鈴木 いさお

啓蟄へ私もコート脱ぐとする

春が過ぎたら心を少し開きます

校正へ広辞苑派と明鏡派

風当たり強いが筋道は通す

休診日主治医の釣りへお供する

藤井寺市 田付絹枝

箕面市 大浦初音

純真な園児巻き込む金亡者
梅だより鼻腔むずむず腰も伸び
姉見舞バラバートーク大笑い

十八歳はり切る孫の初選挙
ローカル線ゆつくりのんびり夢果てず

藤井寺市 増井ヨシ枝

箕面市 酒井紀華

ひ孫ヨチヨチ孫はやさしい母の顔
デイサービス九十歳以上が八割も

イチローのごましお頭もまた素敵
気苦労は人一倍だがよく耐えた

藤井寺市 吉田喜代子

箕面市 出口セツ子

縁側に主の居ない椅子一つ
菜の花のごま和え旨し雛祭り

バタバタと寝たり起きたりもう四月
百歳も夢ではないと笑い合う

隣国が笑う狂気の闇の底

藤井寺市 若松雅枝

箕面市 広島巴子

春風に乗って行きたい靴リユツク
春の靴同じサイズで娘のお古

下駄箱の亡夫の靴が捨てられぬ
税ばかり増えて年金また減った

期待外れの人に見出した妥協点

反抗期にくまれ口も成長だ

ライバルと最後の競い命較べ

ヘルベスに負けてこころで一休み

暇だとして良い句が出来るわけじゃない

泣きながら生まれ笑うために生きる

傷口をなめてはくれぬ昼の酒

雑踏に妻に似た人失わず

青い雲転び上手の怪我もせず

老いらくの恋ばつと散ります春風

笑顔美人いつか幸せとんでくる

口先と涙で姉は生き上手

脳活性酒席で楽しく喋る下戸

プロ並みの男の手ぎわ見る料理

是か否か料理上手な他人の夫

桜愛でる心は老いることは無い

寂しいな何時も元気な友が病む

ルノワール透明感に吸い込まれ

潮風とたわむれ伊良湖船の旅

水平線丸くて私地球人
菜の花の迷路ふわふわ蝶になる

八尾市 内海 幸生

葉忌や温顔に吹く風みどり
西行は派手好きらしい花の下
良い天気決めたのは誰雨の愚痴
喘息の肩身が狭いインフル期
裏切りは絶対しない花のDNA

八尾市 高杉 千歩

ステイ呆けガスの付け方まで迷い
バラバラの記憶スマホに任せきり
むかし話大好き独り喋ってる
真実はひとつの途辿るやら
わたくしを貫くための絵具筆

八尾市 寺川 はじむ

決め玉が無くて勝ち切れない喧嘩
我慢の稀勢が弟子に抱かせた夢数多
髪を梳く一本までも整える
持ち駒の次の一手に迷う老い
治ってるのに残り呑んでる几帳面

八尾市 宮崎 シマ子

今日のテーマ今日こなさぬと明日がない
いい事は明日にのばして生きてゆく
菜の花の上にはいつも蝶がいる
明日は歯医者に行く決心
逢う度に方言が出る姉いもと

八尾市 村上 ミツ子

東北へ黙祷 テレビに合わせて
非常食たべ新しく買っておく
偶にからしよっちゅうになるもの忘れ
丸を描くいつもいびつになっている
この時間未だ暗かった昨日朝

八尾市 山根 妙子

マネキンは初夏の装い氷雨降る
鴛鴦の恋かもしれぬ波の紋
嫁ぐ娘に大きなリボンかける親
整形で似ても似つかぬ親子です
ひそひその声が邪魔するいい場面

大阪府 桑田 ゆきの

霞中大阪城に掌を合わす
農魂の逞しい夫が畦を焼く
春風に髪なびかせてペダル踏む
牙え返る夜空の星座子に教え
梅咲いて今日も鶯鳴きに来て

大阪府 米澤 俣子

どの顔もほほ笑み消えた流し雛
開花予報にストレス溜まるだろっ蓄
結びめをちよつと緩めて生きのびる
いつからか妻の元気が先を行く
朝市のお肌自慢の茄子トマト

神戸市 上田 和宏

啓蟄過ぎ雑用どんと押し寄せる

祝傘寿金のマドラー贈られる

猪が懐いた顔で町に来る

つるつるの指が落としてばかりいる

祭礼が老人会になって来た

神戸市 奥澤 洋次郎

今日もまた何処かで税が喰われてる

まーるくになる気がなくて喜寿をこえ

貧乏が嫌で離婚かそれもよし

母に似た大根の花そこに咲く

不恰好な枝に一輪花がつく

神戸市 富永 恭子

丸木橋無理して渡ることはない

何もかも嫌になっても木は芽吹く

泣きながら大笑いする句を作る

いかなごはあるかスーパ―はしごする

準備完了あとはいかなごとれるだけ

神戸市 能勢 利子

桜の蕾チェックしたくて途中下車

入学式遅くて桜待ちきれず

しばらくはちやほやされる一年生

転んでも泣かぬと決めたランドセル

家ではまだまだ甘える手がかかる

神戸市 細川 花門

沖繩の陸海空に星条旗

恋猫に留守を頼んで来たけれど

神様を画けと謂うなら連れて来い

杖よりも孫に縋って生きている

春の風邪思考回路がつながらぬ

神戸市 松井 文香

手はじめに自分褒めれば湧くやる気

褒めましたにつこり若い芽が伸びる

愛込めてきつちり果たします介護

ライバルという役割のある私

ペン冴えてスラスラと詩歌など

神戸市 山口 光久

パパになった息子と馬が合ってきた

肩書きが通用しない裏通り

椅子取りゲーム鈍な自分がいやになる

内気なわたしソーゲームには弱い

夫婦ゲーム泣いて笑って半世紀

神戸市 山口 美穂

お地蔵さまも眠たそうです春うらら

重い脚気象予報の役もする

古雛と白酒交わしひとり居る

家出した猫のチラシが貼ってある

春だよとすーっと伸びる葱坊主

明石市 梶谷和郎

まずいことあるな視線が外れてる
老いて子に同じ台詞を返される
臥してなお囃子に合わす父の指
優しい人だ土の匂いがいつもする
真つさらな朝日踏み出す歩が軽い

芦屋市 黒田能子

無事願う母の祈りが長くなる
距離埋めるじつくり今日は話し合う
一年の早さ老人らしくなる
急かされて思わずハイと返事する
前世は猫だったかも猫が好き

芦屋市 竹山千賀子

心地好い風味方とは限らない
エピソードでんこ盛りして供養する
人の価値定規などでは計れない
深みある言葉に会えた七回忌
仮免許妻にもらった割烹着

尼崎市 市坪武臣

さあ乾杯くどい挨拶抜きにして
坂道も地図に載せてよ老いの夢
流す汗きつと明日はむくわれる
結局は妻のおかげと思ひ知る
亡き母の最後の葉書宝物

尼崎市 加川靖鬼

おほろ月式部納言も観た世界
拗ねてみて猫もときどき人試す
タンポポの綿毛が乗った春の風
健気にも花をつけてるこほれ種
開店で並び閉店でもならぶ

尼崎市 藤井宏造

「頭上に注意」と頭上に書いてある
百均で百円以下は売ってない
自販機でホッと一息買ってみる
ようやくと背筋が伸びて春うらら
我が家の経理透明性に欠けている

尼崎市 藤岡りこ

お水取り後から春が追いかける
ボランティアにばつさり長い髪を切る
失言は言い直す程悪くなる
嘘ばれて素直にごめん言えぬ人
子の自立母は子離れまだ出来ず

尼崎市 山田耕治

言い訳と気付かずと言ひ訳を言う
母さんと同じだ踵割れてきた
西暦で答えヘルパー驚かす
似ていないつもり安心しておれぬ
十二月公民館で遊んでる

加西市 金川 宣子

他愛ない話ばかりで温くなる
試着室入ればおんな咲き始め
電車内マスク忘れて咳が出る
許します嘘がまあなくなった頃
まだおんな特価品です如何かな

川西市 大坪 一徳

定年後残り時間が永すぎる
趣味だけで生きて行くのも物足りず
とりあえずカンマの如きバースデー
個人情報知られて困ることも無い
極楽へ行けるのなら直ぐで良い

川西市 山口 不動

検査値を妻に云うまで孤独なり
共通語笑顔を詰めて出かけます
弥生入り発ってしまった鴨八羽
ひなまつり好きだったなあ隣の子
耳すます郵便バイク止まらない

篠山市 北澤 稠民

長い冬ストレス溜まり野良に出る
発想を変えると答みえてくる
逢いたくて古いアルバム繰っている
いやなことメール通じて言ってくる
来て欲しい帰って欲しい孫二人

篠山市 酒井 健二

富貴みな望む私もその一人
清貧の他に生き様術がない
臆病であつたがゆえにまだ生きる
爺ちゃんが大好きだった最中食う
幸せの岬に七度足運ぶ

篠山市 酒井 真由

自分史のところどころにちひろの絵
喝采を浴びて炎上するさくら
ぬくもりを辿れば父の肩車
幸せといえど幸せ白日傘
お借りした傘のぬくもり人の世の

三田市 足立 つな子

老春の生き様みせる陽が昇る
人間像ふつつ解る定年後
話し下手それでは恋もうまれない
身仕度は家族のために紅もさす
外湯めぐりカニの城崎晴れ女

三田市 上垣 キヨミ

人間をにんげんにする灌仏会
長生きのヒント笑顔の中にある
チョコよりもお酒が良いと言う遺影
大安の日を確かめるのし袋
むつかしい事には貸さぬ両の耳

三田市 上田 ひとみ

この辺り一番好きな場所だから
あの頃の母だけ知っていた涙
少しづつ優しくなっていく私
縁側のひとり芝居のヒロインは
ふるさとを持たぬわたしの影法師

三田市 石原 歳子

気にしてる花粉症にはまだならず
眼がねかけマスクしてから外へ出る
夕暮れの空をいつでも二羽で飛ぶ
丸い背で歩いています影法師
桜の樹毎日眺め春を待つ

三田市 尾崎 一子

転ぶなよ氣遣う孫におこづかい
合格の笑み天使のように美しい
回覧板持って春日の立話
通学路元氣な声が春を呼ぶ
春の雪ようやく溶けて墓参り

三田市 久保田 千代

飲み込んでしまえば済んだ今朝の愚痴
飼犬の希望鎖のない自由
春風が噂話をコピーする
丸い背に習うこの世の歩き方
お腹蹴る生命と語る誕生日

三田市 多田 雅尚

最初はグー次に出す手がよく迷う
三分で出来る体操続かない
楽しみにしてたイカナゴ届かない
締切日迫り初めてやる氣でる
一日に一度は自分褒めてみる

三田市 谷口 修平

巨体でも箸でつまめるお骨揚げ
お守りの消費期限が切れていた
男氣を出して難問任される
当てになどしない学者の地震予知
生え替わるポチを羨むアデランス

三田市 野口 晶子

まだ独り未練心につまずいて
さりげなく言訳にする老や翁
神仏鬼も座れと花見酒
いざと言う肝のすえかた教えます
終わったと拍手が笑う主賓の辞

三田市 福田 好文

天氣予報美人の方が当たりそう
道聞いてくれぬハイカースマホ見る
女性には甘い人だと叱られる
お迎えは順番無視でやって来る
古い鏡が私の顔に染み付ける

三田市 堀 正和

握手して確かめている敵味方
還付金申請終えて大ジョッキ
飲み放題老いもついつい羽目外す
お茶の間がこんなに広い妻は留守
新聞も明るいニュース書きたかろ

高砂市 松尾 柳右子

五月晴庭の草にも蝶が来る
良い季節遠出して見て深呼吸
遠足の子等の笑顔にはほほ笑みを
病室に孫子寄り合い笑顔満つ
お出掛けの楽しさ増して服選び

宝塚市 田中 章子

お母ちゃんもそのうちわかると言っていた
心配を丸投げこころ軽くする
何もかも話せる友が二三人
今はもう夫もベストフレンドに
二三時間桜の見える喫茶店

西宮市 秋元 てる

あみだくじ予期せぬ道も又楽し
予定通り長命電池使い切る
人生を彩るコツを知った旅
立っているだけの案山子も疲れ見せ
「だとしても」堂々巡りの夜の長さ

西宮市 緒方 美津子

失言しそうだ下を向いておこう
いい日です警察犬も寝ています
百段で足りぬ階長寿国
雪平も播こ木もあるばあちゃん家
本物や涙流して笑ろてはる

西宮市 亀岡 哲子

クリスマスローズ開いてやつと春
ふるさとの古地図に先祖生きた井戸
嬢だと言葉選んで孫叱る
入試問題国語は少し解けた祖母
除草剤に負けたタンポポつくしんぼ

西宮市 福島 弘子

迷つてたショッキングピンク今は好き
腐らずに継続せよと子には言う
のんびりもせかせかもあり春陽さす
名ばかりの反省会もまずビール
三歳がもういっぱしの自己主張

西脇市 七反田 順子

劣れる相手があつて努力する
青い空初音聞いたと一筆箋
ピカピカは脳内までも冴えてくる
人情の厚い人なら響き合う
雛祭り八寸盛りの美食会

姫路市 古川 奮 水

春場所だ邦人横綱トップ記事
朝食へ今日のリズムが動き出す
玉子割り大根おろし朝の音
宝石に想い出がある妻は逝く
春になる松明走る二月堂

南あわじ市 萩原 狸 月

無農薬でも虫喰いは売れません
同窓会会いたい人は二三人
黒星が続いて長い十五日
AIに頼る未来に抱く不安
みどりからビタミンCが吹いてくる

奈良市 阿部 紀 子

念願の蟹食べに行く賀露港
蟹鍋を皆熱心にさせるのみ
駱駝の目悟り開いた僧の様
突風の砂丘に負けず駈ける子ら
一刀彫の鍾馗年中睨んでる

奈良市 大久保 眞 澄

二時間も並びフツの味だった
五感みな緩み頭は硬くなる
一言居士生まれながらの文句たれ
マスクにも滲み出る嘴の黄色
頬被りのネズミが巣くう豊洲地下

奈良市 加門 萌 子

春の風忘れてならぬ震災禍
我が町は空屋が目立つ淋しい図
咲いてます貴方の居なくなつた庭
世界にも誇る東京揉め続く
人間の営み獣より怖い

奈良市 辻内 げんえい

平成はおまけ昭和を生きてきた
古稀になつたのに高齢者外される
文句など言わぬが勝ちと黙りこむ
同じ愚痴相槌打って聞き流す
四十路の姪の結婚式で知る秘密

奈良市 山本 昌 代

ホツとしたところへコーヒー運ばれる
春なのね愉快になつてくるころ
春うらら恋を奏でる金魚たち
足とめて春のこえきく遊歩道
今日もまた2回あつたね置き忘れ

奈良市 米田 恭 昌

俺お前ときめきあつていた昔
見舞客の下手な嘘にも癒される
ホスピスの窓際カラス動かない
精霊舟たどれば父母に逢えそうで
休火山妻に文句は言わぬこと

生駒市 飛 永 ぶりこ

ふつくらと桜の芽から春開く

一面の菜の花畑から生氣

「ララランド」貫く意志が花咲かす

春うららルージユスカーフ旅支度

せせらぎの芹の清さに灰汁も抜け

香芝市 大 内 朝 子

臍の緒と御目文字してる誕生日

疎開して拾った命永らえる

エンディングノートのペンが進まない

独り身を生きた鎧をそとと脱ぐ

我が背にも翼生えそう木の芽時

桜井市 安 土 理 恵

ひとつだけ買って帰ったさくら餅

春にしよう電球ひとつ取り替えて

おぼろ月子どもを一人産みたいな

ずっと前から縋れたまんまの覚え書き

長女です叱られたって泣けないの

奈良県 安 福 和 夫

春なのにシャッター街に過疎の風

駄菓子屋の跡にノッポの雑居ビル

伝統をリニユール付きで継承

地車で太鼓叩く若者頼もしい

次世代に託す心のよりどころ

奈良県 谷 川 憲

サクラサク待った母子に春が来た

入社式リストラなんて予期もせず

外国人スマホがガイド古都の旅

酒の香に禁酒の誓い早や崩れ

やっつけとひと言だけの偉い人

奈良県 渡 辺 富 子

伝わらぬ想いを照らすおぼろ月

ずれたまま会話の続く差し向かい

来し方をゆったり話す雨の夜

多数決の波に傾く主義主張

老いてなお自説を通し傷だらけ

和歌山市 磯 部 義 雄

言葉より本音が言える文を書く

肯定も否定もせずに背を向ける

拘泥を捨てて乗ってる車椅子

まだ傘寿湧き出る泉脳騒ぐ

生き生きと新横綱の春場所

和歌山市 上 田 紀 子

オール電化鍋やきうどん作れない

人間の脆さ紙コップの強さ

過去清算する体力を持ち合わせ

ノクターン流れて春の夜の静寂

失ったものから貰う生きる知恵

和歌山市 柏原夕胡

少しだけ弾んで長く弾みたい
誰にでも来るとは限らない明日
今さらが夫婦の中に棲んでいる
望まれて望んで夫婦しています
神神しいと思う白い曼珠沙華

和歌山市 喜田准一

夢よりも結果ひとつを待っている
争いを避けて今日まで生き残る
学歴の光る名刺を渡される
落ち込んだ男演歌に癒される
選力にならない雑魚も数の内

和歌山市 楠見章子

ビリでいいみんな合格絵馬の数
仏壇の母にいつでも教えられ
入学式頭よさそな服探す
通販のカタログ小半日かかり
鏡にはべっぴんさんと貼っておく

和歌山市 坂部紀久子

テレビとベンあるから痴呆遠ざける
突っ掛けで嫁のおでんがやってくる
写真の亡夫に行ってきますとただいまと
歳相応無視のピンクで闊歩する
頼りたい娘も老人の仲間入り

和歌山市 武本 碧

トランプの行方覗き見したい株
コーヒーの冷めぬ間は待つつもり
ファッションも手頃な値から売れていく
あなたにはせめて偽りないラベル
お待たせと待たせた方にある余裕

和歌山市 玉置当代

卓上に椿一輪挿して 春
行く末を椿に話しかけている
体力のあるうち手術せよと言う
終活へまだまだ生きてゆくつもり
エンディングノート買ったがまだ白紙

和歌山市 土屋起世子

春ですね蛇口の水がやわらかい
桜吹雪浴びて背筋が伸びてくる
待ちましよう大器晩成楽しみに
ここだけの話聞かされ気が重い
古里に左回りの時計あり

和歌山市 福井菜摘

どんな彩で咲くのだろうかまだ蕾
結び目が解けて心が軽くなり
反論を謙虚に聞いてバネにする
大丈夫友のひと言葉くれ
人が好きこの世が好きで謳歌する

和歌山市 福本英子

開かぬ方が良かった明日の天気予報

待ジャパンやはり応援したくなる

助手席はもう用の無い車買う

美味しいものと皆んなが寄ってくる

食べて寝るそれで安心する家族

和歌山市 古久保和子

颯爽と銀のたてがみ靡かせて

高速道路村を跨いで行つたまま

若者の笑いのツボが解らない

校門の桜残して閉校に

雨もよし宿には宿の傘がある

和歌山市 堀 富美子

趣味ひとつクリアして行くむつかしさ

マニユアルにない人生だけど又楽し

ふつ切れて笑顔が憂さをチャラにする

生き甲斐の出会いを呉れた友憶う

老木の桜に意地を教えられ

和歌山市 松尾和香

母五十年忌席に連なり涙でる

里の嫁心一杯おもてなし

孫運転寝ている我にも声かける

二月の目標無事クリアする喜びに

川柳に楽しみ書いて生きてゆく

和歌山市 松原寿子

継ぎ足したレールへ生きる日々模索

鮮明な画像がひとつ胸にある

花々に涙を拭けと諭される

行間に居座っているヒストリー

頑固さも仕草もまるで瓜ふたつ

岩出市 藤原ほのか

精一杯生きて階段昇り切る

階段を踏み締め登る余生です

階段を上がればきつと答見えてくる

満足度足りていないが幸せだ

今さらとあせることなく研いてる

海南市 小谷小雪

新人はやたら張り切るから怖い

比較級子供胸になじまない

梅の香が疲れ知らずの顔にする

おみくじ箱じゃらじゃら回し再起動

まるごとのあくび平行移動する

海南市 堂上泰女

当直が待つプレミアムフライデー

紅白梅咲いて朗報連れてくる

夕陽へと照準合わすスニーカー

子の昇任何より光る早春賦

散歩する諸行無常を思いつつ

紀の川市 宇野幹子

立ち食いのうどん男の味になる
廃村をやがては覆う蔦かずら
雪平を焦がして柳誌読みふける
選り抜いた切手で心伝えたい
ターミナル鎖解かれた兵士達

紀の川市 北山絹子

包装紙いつも老舗の顔でいる
この女と巡り合わせの花の寺
学舎の想い出遠く茜雲
道草のお陰とやらで友が出来
ブライドを捨てた男の荷が軽い

紀の川市 楠原富香

ブライドを積みば出来ない後戻り
今日の鬱手持ちぶさたな休刊日
青信号信じて渡る人ばかり
ダイエット恋をしたのか本気です
お互いに耐えたからこそ金婚譜

紀の川市 辻内次根

春の土手てんとう虫が横切った
嫌なこと忘れるように布団干す
回覧板ホツトな風と共に来る
贅沢はたまに風呂の湯溢れさす
電柱のカラスと顔が合った朝

紀の川市 山東日出男

歳も歳だから時時休肝日
控え目な口にストレス溜めている
手書きではとんと漢字が出てこない
責任の所在が宙に浮いている
行儀良い耳は悪口など聞かぬ

田辺市 岡本昇

おいしいねと言える相手が居る夕餉
いらぬ物捨てる修行をしています
まだ女合わせ鏡を離さない
人生の終い仕度の預金帳
ちやほよとされて自分を見失う

橋本市 石田隆彦

じゃんけんは子どもが選ぶ民主主義
虫食いも鮮度抜群自家野菜
うわべのことばに動かされた不覚
秘め事を石の地蔵にだけ漏らす
水のアートはかなきものは美しい

第160回 大阪川柳の会

日時 6月7日(水) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「喝」 吉田 節城 △「しぶい」 吉川 哲矢
△「浮く」 古今堂薫子 △「ちぐはぐ」 森中恵美子
会費 1000円 欠席投句 6月6日まで 会員に限る
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田智彦宛

自選集

小島蘭幸

斉藤 効

昨日今日臘になつてきた日記
生放送等身大の僕がいる
観音様と句碑のお山の風に立つ
百の句碑百のエールをいただいた
色紙百枚書いたら朝になつていた

川上大輪

新家完司

組板の魚涙は流さない
どの色を溶いてもやがて黒になる
生きてるか今日も覗きに来るカラス
逆立ちをしてもなんにも出てこない
遠回りしよう涙が乾くまで

小西雄々

津守柳伸

温みだけ残して消えた春の虹
半開きして神様も美酒を見る
腹立てぬから政治家になれそうだ
相槌を打てど温度差ある返事
咆哮をする飼犬を信じきる

切れ味を鋸に聞きつつ鋸を研ぐ
人間に逢いたくなつて出た土筆
株分けた花あちこちで蕾つけ
穂の芽を摘んでいのちをふと思う
さくら前線ゆつたり旅を楽しもう
うまい酒あふれるうまい水の里
離婚せぬ辛抱強い友ばかり
情熱は尽きずまたもや片想い
残高はまだある酒はまだ飲める
散骨はタケノコ掘った竹藪へ
復興のあかしカフェに人が寄る
庄力は賞味期限という魔物
雑用に追われ小皺に気がつかぬ
盆梅も昔むかしの物語り
働ける幸は病いを知ってから

都 倉 求 芽

意気込みもあきらめもありまた明日
新聞をじっくり呆けそうで呆けそうで
この冬の寒さ正直な電気代
三寒四温毎年のことというものの
保育所が大学よりも狭き門

土 橋 螢

新しい花芽をつけた長寿梅
健やかに米寿迎えるお爺さん
歳月をふり返り見て剪定する
天長節に結婚をしたふたり
横着を認める白紙委任状

西 出 楓 楽

辛いことあれど春には春の服
傘寿そこいつまで続く立ち泳ぎ
戦中戦後生きた証の座り胼胝
忘れた字思い出してはまた忘れ
聖五月ものみな天に手を伸ばす

仁 部 四 郎

八十路きて青菜若葉の陽の恵み
メーデーの歌も記憶に八十路かな
お世辞をくれるお医者と行く八十路
八十路きて今更に美味青魚
御指名とあらば一言ある八十路

前 たもつ

夢にまで薫風先生一句提げ
何を恐れる今も地球が動いている
川柳の整理はちゃんと出来ている
万歩計地球一周歩き切る
母に勝る条件なしの愛もある

三 宅 保 州

一身上の都合に渦を巻く不満
ゼニカネじゃねえと悟った振りをする
編み物がうまい息子は独り者
役割の重さに走れない絵馬よ
頭ひとつ抜き出たことが致命傷

宮 西 弥 生

華やかな春へメニエルわるさする
口笛もウソも男は春誘う
花へ舞う紋白蝶の罪と罰
雑草の鉢植え話すことばかり
侍ジャパン大きく舞うている夜空

八 木 千 代

春なのに低体温の木の机
閉ざされたまま深呼吸のペンケース
ハガキ一枚書かぬは死んだのも同じ
眼を上げてごらんと招く母の雲
トンネルを抜けましたねと木の机

第18回 生駒市民川柳大会

日時 7月15日(土) 12時開場
会場 生駒市コミュニティーセンター
(セイセイビル内)近鉄生駒駅より南へ3分
〒630-0257 生駒市元町1-6-12

電話 0743-73-0500

事前投句「結ぶ」 松本 梶子 選
ハガキで1句 6月20日(火)消印有効
(出席者に限る)

宿題 「引く」 安土 理恵 選
「星」 井上 洋三 選
「壁」 久保田 半蔵門 選
「本気」 柴田 園江 選
「好き」 西 美和子 選

出句 各題2句(出席者に限る)

締切 13時

会費 1500円(発表誌呈)

事前投句先 専用ハガキまたは普通ハガキにて下記まで
〒630-0222 生駒市壱分町1487-30

小金澤 寛一 宛

問合せ先 小金澤 寛一 TEL 0743-77-6793
主催 生駒番傘川柳会

汗腺があるから僕も哺乳類
ついて行くだけでも影は息が切れ
走れメロス友を裏切ったりできぬ
領海の危機を深海魚は知らぬ
政界の灰汁へ漂白剤を撒く

春一番きげんのわるい若牛夢
殴られたら殴り返せという聖書
じゃがいもの気持がわかる蒔萩草
長生きをするなど父は云って逝く
美しいひと逢えたらじゃんけんぽん

板尾岳人

両川洋々

句集の森



無双

定金 冬二

駈けつけてくれたは金のない身内
逆境のてのひら秋の陽をすくう
こんな美しい貧乏をさげすむか
少年人を刺し 体育館は雨がもる
序文もなく後書きもなく豆腐をくらう
おんなとは哀しいときも何か提げ
さあ妻よきょうの活字をひろおうよ
穴は掘れた死体を一つ創らねば
てのひらに掬うと米に貌がある
火柱は天に届かず弱者の死
にんげんのことばで折れている芒
折り鶴が翔ぶ青空が痛くなる
父として真冬のたてがみを洗う
木を削るわたしを削る冬銀河
かくて大地に人間のめし犬のめし

(昭和59年12月発行)

川柳を始めてまだ間もない頃、豊中駅前のあるホテルから薫風先生のご自宅までタクシーでお送りしたことがあります。その10分足らずのタクシーの間に「俊平となあ、新子がなあ」と昔話を語っていただいたことがあります。

週刊朝日や文春で川柳欄の選者だった新子については投稿していたので、少しは知識を持っておりましたが、俊平についてはほとんど何も知りませんでした。しかし薫風先生の口調から永年の親しい仲間の一人だと理解できました。

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

薫 風

この句について薫風先生は「笛は瘦せた私、太鼓は太っちの俊平さん」であると述べておられることが乗原道夫さんの労作「橘高薫風川柳句集」全句索引の中で紹介されております。

俊平さんの逝去を悼んだ薫風先生の句を紹介します。

十三夜俊平杉の子になった

薫 風

俊平に柩は狭しあわれ哉

除夜の鐘俊平星を磨いとる

俊平は大正十五年生れ、平成十一年逝去

薫風は大正十五年生れ、平成十七年逝去

二人は同時代の巨星であつた。俊平にどんな句があるのかについて、私の知識は皆無であり、この小文のために、調べて見つけた句を拾い出してみます。これらが代表作か否かは分かりません。

淋しい日一人の敵を仮想する

俊 平

川はゆつくり拒絶をせずに凍らずに

逆転がはじまっている砂時計

川柳に太鼓どんどん笛ひやり

黒 兎

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

メガネかけてめがねを探す秋の宵
葬式の鳩を結婚にも翔ばし

このごろの大人こどもに気を遣い
好きやねんそれは素顔でいう台詞

父さんの真似をするなど父がいう
激辛のカレーライスを食う平和

長生きはいいが重荷にならぬよう
残ったら下さい古い札でいい

ハトの絵のうしろにタカがいる平和
日の丸を振る出発はもう嫌だ

またしても夫の明日に騙される
忘れるな第五福竜丸の事故

利息では孫のお菓子を買うくらい
円空仏笑いの底にある気合い

退社ベル帰り支度はできている
絵の中に時代おくれのぼくがいる

ふところの中を他人に計られる
父よ子に語ることばを忘れたか

川柳塔の

川柳讃歌

(149)

上方芸能評論家 木津川 計

とうとう来た切手貼らずに出すなんて

増井 ヨシ枝

記憶力抜群、もの知りの上に訳知りだった桂米朝さんも晩年認知症になった。先に逝かれた奥さんの葬式で車椅子に乗った米朝さんは事態を飲み込めず、ボーッとしておいでが痛々しかった。その米朝さんが健在だったあの高座でこんな小咄を。「もの忘れによう効く薬があるね、わたし、それのんでえろう良くなったんや」さよか、そらええなあ、なんちゅう薬や? 「ええと……」。ヨシ枝さん、その薬を米朝さんが覚えててくれたらなあ。

順調に老いて来たのにまだ呆けぬ

中井 アキ

なまじっか順調な老いもよしわるしで、いつそ呆けきった方が幸せかもしれない。しかし皆さん、と永六輔さんが『無名人語録』に書かれた。「知らない町に行ったら、知らない老人に親しげに挨拶するんですよ、そう

するとその老人は、今挨拶したのは誰だったかなあ、と考える。考えるからボケなくなる。これでやりましょう」と。アキさん、知らん人からいっぱい声を掛けられてるのでしょう。誰かしらと思わなんだらボケられますよ。

桃の花咲いたら着たい服がある

太田 扶美代

「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめては新しき背広を着て／気ままなる旅にいでてみん／汽車が山道をゆくとき／みづいろの窓によりかかりて／われひとりうれしきことをおもはむ／五月の朝のしの、め／うら若草のもえいづる心まかせに」。萩原朔太郎の「旅上」である。新しき背広を着て朔太郎は汽車に乗ったのだ。扶美代さんにも着たい服がある。それを着て桃の花咲く山道を汽車でゆく豪華な春の日だ。

触診で病名あてるのは名医

藤井 宏造

やぶ医者には落語の格好の標的だったから桂枝雀さんはマクラでよく爆笑させた。金目の物を盗んで出ていこうとする出刃包丁を持った泥棒に医者の亭主が匙一つで立ちふさがると、泥棒はまっ青になり素手で逃げていった。嫁さんが驚いて問うと、「この匙でどれだけの病人が死んだか」。大昔は医者が匙で薬を

盛った。宏造さん、いま絶滅危惧種の触診の名医を大事にしよう。今号で水野黒鬼さん「八十歳の町医確かな聴診器」と称える。

寝て起きてみればささいな事ばかり

倉益 一瑤

昨日はあれほど腹が立ち、大喧嘩したことも一夜明ければ些細なことだったと省りみたのが一つ。「果報は寝て待て」だから期待して起きたら些細なことばかりで二つ。三年も寝ていた「三年寝太郎」は村が水飢饉に喘いでいたから山の頂上から巨岩を落して川を堰き止め、水の流れを変えて村を救った。それを見做おうとしたのだが世の中は平穩で出番もなくが三つ。さて一瑤さん、正解はどれ?

新聞紙に限るやきいものぬくぬく

安土 理恵

ラジオ放送劇の人気番組が花菱アチャコのお父さんはお人好しだった。この放送を待ち侘び、僕は田舎の国立療養所の固いベッドの上で聴いて笑った。お父さんは焼き芋屋で十二人の子供を育てた。生活の苦労はうかがえず、ノーテンキなお父さんを支え、子育てに明け暮れた浪花千栄子のお母さんが偉かったなあ。理恵さんの言う通り焼き芋は新聞紙で包むに限る。きれいな包装紙に包まれたら「そらムチャクチャでござりまするがな」

新川柳鑑賞

(63)

麻生 路郎

手ぶらとはかくもたのしきものなるか

(村諷子)

何でもない表現ではあるが、この句一読すると、何となく朗らかで愉快になる。いつも、なんかかんか持って歩いている人が、たまたま何一つ持たずに、ブラブラ歩いたとしたら、斯うした思いがするのに違いない。

じゃあ僕も云うがと敵意あらわなり

(一瓢)

机を並べてのライバルと仮定してもいい。自分のミスをようしやなく、攻めるのでいささか弁解に窮したが、窮したままではおさまらない。そこで「じゃあ僕も言うが」となったのである。斯うなると二人の間の溝は大きくなるばかりである。ライバルの心理を巧みにつかんだ句である。

浪曲の人情論さと取りあわず

(あきら)

「あいつも心からの悪人ではありません。永いことわすろうた女房に死なれ、赤ん坊を抱えて、困った拳句なんです。決してだ

ます気ではなかったのです。」「だます気でも、結果が良かったです。」「なるの。」「サツサと立退いてもいい。」「あんなことにかかわっている必要もないだろう。」「それでは人情がかけます。」「そんな人情が浪曲の人情だよ。私の世界では通用しないから。私は法の力ででも立退かせて見せるよ」と言うようなところを詠んだもので、複雑な内容をうまくまとめている。浪曲の人情論と言う辞餉も適切にいい。

御援助の賜物ですをもつ忘れ

(万古)

この句を読むと微笑を禁じ得ない。いろと世話焼かせて、どうにか一人歩きが出来ようになり、これも「御援助の賜物です」などと言っていたのに、今では、あと足で砂をかけているのを見て詠んだのである。皮肉な穿ち句である。

恩愛にそむく反旗はためかず

(潮花)

若さにムリはつきものである。長年、自分をはぐくみ育ててくれた人に、反旗をひるがえしたところが、そうした旗は決してためくものではないということを詠んだのである。世間にそんな男がちよいちよいあらわれるが、いつの日には旗をまいて姿を消すことを思わされて淋しい句である。

それも一理と云ったのが気に障り

(一晃)

サシではかったように、これは斯うだと、さかんにまくしたてる人がいる。

ところが、その説を静かに聴いていたのが、「それも一理はありますが、斯ういう観方もあると思いますが」と言ったので、とうとうと喋っていた相手方の御機嫌を損じたと言のである。皮肉な句である。

生きてゆくための四三の手を案じ

(没食子)

この句の場合、人生をホントに生きてゆくと意味よりも、どうにか生活してゆくと意味らしいが、そのどうにか食ってゆくのに今の世はそうラクではないのである。そこで四三の手を考えると詠んだのである。五目ならば四三の手でなければ勝てないのであるが、生活をしてゆくのにも、生活にきつと可能な四三の手を考えると言うのである。

定刻に行けば反対派ばかり

(宗太郎)

いろいろな会合に出る人達にとってはこうした場面におつつかることは往々にしてあることである。反対派の連中が、阿々大笑したり、ごうぜんと語り合ったりしている隅に、ひとり淋しく週刊誌などを見ている姿を思わせられる句である。



西 出 楓 楽 選

宝塚市 太田 としお

お借りした命はいつか返さねば

トランプは敵か味方が分からない

義理人情これを失くせば人じゃない

後期高齢死刑宣告されたよう

明日有ると信じベッドに潜り込む

身にしみていますお金の有り難さ

佐渡市 高野 不二

七人の敵を仲間に今日は呑む

去年の日記同じ事がかいてある

再放送見て満足の日曜日

賽銭箱一円玉の使い道

銀行に使い道まで調べられ

スマホ使うに孫の手を借りる

倉吉市 岡崎 美知江

海ゆかば帰らぬ人を想う歌

やさしさが誤解招いて板ばさみ

叩いても胸の扉は錆びている

散る花の命の重さ噛みしめる

本当の事は裏面に書いておく

につこりと笑った裏で野心抱く

米子市 伊塚 美枝子

もつれてもちゃんと繋がる赤い糸

春休み会話がはずむ菓子作り

若者の会話ババには外国語

面の皮年月重ね厚くなる

別腹にケーキ詰め込む女子の会

他人事と笑えぬ老いが牙を剥く

鳥取県 戸田 真理子

春風のノックで大地目を覚ます

春一番花粉を連れて大あばれ

しくじりを肥やしに変えて返り咲く

冗談を言ったつもりがあら囃星

愛と憎越えて感謝の共白髪

今月も諭吉はしゃいで出て行った

大阪市 磯 島 福貴子

陽だまりで井戸端会議鳩の群れ
コート脱ぎ春の息吹に深呼吸吸
身を処してそろそろ準備終活を
バトンリレーお雛様から鯉のぼり
ヘヤカラー止め時さぐり髪を梳く
籠松明火の粉蹴散らし春を呼ぶ

堺市 松 永 庄 三

もうかりまつかぼつばつでんなよろしおま
爺ちゃんと呼ばれ振り向く歳となり
おしゃべりがしたくて今日も診察へ
猫欠伸するも涙が出ぬ不思議
電線に音符のごとき雀群

豊中市 荒 木 郁 子

負の遺産なくて幸せありがとう
残された着物の処分胸いたむ
残り物並べつましい主婦の昼
譲られた席に甘えてウトウトと
ベストセラー本音炸裂小気味良い
日記帳本音綴って少し癒え

米子市 池 田 美 穂

回覧板世間話もプラスして
オブラートしてある言葉じわり効く
糸通し箱根の関所より難所

介護ロボ退職金で買っておく
神も仏も表だつては動かない
早春を待ったボールが弾け飛ぶ

静岡市 渡 辺 芳 子

就職の曾孫二人を祝う春
戦争のない人生を願う春
長生きをしてよかつたと思う日々
寒い日が続くと気力失せてゆく
地震なし雪なしの県感謝のみ
老いの日はピンシャンコロリ願います

京都市 櫻 崎 篤 子

カタカナと英語ローマ字日本どこ
結局は持つて死ねない物ばかり
お昼呑む薬夕方思い出し
マラソンの日は遠回りさせられる
城下町だんごは昔のままの味
長生きもむつかしおすなあ呆けが出る

吹田市 岩 口 のぞみ

春近し桜の前に花粉症
合格通知喜ぶ間なく振込みへ
我家では昔も今も女城主
宴会芸酔ってなければただの馬鹿
晩酌で今日をリセットお疲れさん
春場所も家の番付け変らない

横浜市 巖田 かず枝

大阪市 高杉 力

山や谷なくて平らな日々祈る

ことわざを間違えたまま五十年

達者でね前頭葉よ頼みます

勝ち負けを決めないことも思いやり

ゴミ漁るカラス子育てだったかも

横浜市 川島 良子

大阪市 田中 ゆみ子

一本の杖でありたい介護の手

頑張れる今がわたしの絶頂期

深入りはしない背骨がずれてくる

効能を信じせつせと飲んでいる

聞く耳は持たぬふたりは熱愛中

豊橋市 小松 くみ子

大阪市 平井 美智子

運命にそむきたがっている手相

ウィッグで変身できる悪女にも

人生の岐路となるかもにわか雨

喜びと覚悟をもって孫の世話

ここだけの話が多い喫茶店

大阪市 柴本 ばっは

大阪市 松田 聡

禅堂の前でバロックコンサート

そっとお支えしたい瘦身百済仏

ほほえみの御仏ばかり斑鳩路

世の乱れ結婚しない症候群

逆らう理由解ってほしいお母ちゃん

嫁ぐ娘を優しく包むブルメリア

娘挙式大きな木陰見つけたか

日本語が通じ物足りない気分

アロハポーズ慣れた頃にはもう帰国

日本では着る機会ないアロハシャツ

ひよつとことおかめ飽きない味になる

人を恋い陽を恋い開く春の窓

こんな日は歩くべきです春うらら

花の下昔話を繰り返す

わたくしの事情知ってる顔の皴

不意の雨悪い予感良く当たる

余命宣告愛したりないことばかり

泣くたびに綺麗な色になる涙

ありがとだけで心が動きます

さくらさくら急いで咲けよ母が臥す

耳慣れぬカタカナ文字でごまかされ

行く逃げるよそ見してたらもう弥生

プレミアム変な横文字金曜日

プレ金で恩恵受ける人もいる

海外援助ばらまき続け二兆円

大阪市 宮村 満寿恵

春がきた財布の中に諭吉こず

気の重い定期健診無事通過

また見れる只ありがたく仰ぐ花

友は今黄泉の花見でカラオケか

寒暖差マフラスカーフ迷わされ

大阪市 森 廣子

おだやかに流れる雲に嫉妬抱く

覚悟が無いと自分の影に笑われる

その内と大人は上手い事を言う

黄色いリボン褪せたあの日の夏帽子

花影で抱きしめられて五十年

大阪市 横山 里子

おやつどき鴨にもみかんお裾分け

あほかいなタイマー止めてガス消さず

ヒヨウ柄もビーズもラメももう飽きた

献立を考えている写経中

アブラカタブラ木の葉お札になあれ

池田市 上山 堅坊

家電製品あつて翔く老い独り

しげしげと趣味に出掛けてボケ防ぐ

どっこいしょ椅子に呪文をかけている

スイスイと自転車避けて歩くボク

寝酒ごくり王の気分で床につく

池田市 太田 省三

温泉のサルも極楽目をつぶる

すんなりと勝たしてくれぬ敵も意地

絶叫を空へ噴き出す遊園地

ほんわかと門灯だけが待っている

ゆつくりと団扇をつかい聞き上手

貝塚市 吉道 あかね

老々介護ギツクリ腰でリハーサル

ハイハイの目線汚れを見てしまう

コンビニの弁当箱が溜まり出す

シップ貼る猫の手よりも夫の手

平均寿命まではと誓う古稀の坂

河内長野市 中島 一彌

春風に乗ってころころ空き袋

菜の花を芥子で和えて春を食う

野心など無縁の母の笑い皺

野心とは譲歩重ねた間柄

白内障手術をしたら小皺増え

河内長野市 原熊 知津子

ボケットに入る幸せ心地いい

経験が語る言葉の奥深さ

うつろえる光捉えた画家の筆

異変の兆し生きものの耳ピンと立つ

どこまでも追いかけてくるお月さま

河内長野市 穂口 正子

子には子の人生あつて親離れ
嫌なことぐるぐる巡りエンドレス
捜し物すがた暗ます意地悪い
穏やかに且つ確実に花は枯れ
黙祷を町にサイレン早や六年

河内長野市 森田 旅人

待つ母の受話器にまずは笑い声
照れる孫の思いがけない声変わり
来てみれば楽しいところ老いの坂
土俵入り怒涛の拍手鳴り止まぬ
ドラマ見るように見ている正男氏

堺市 梅木 澄空

返信にハートマークの絵文字入り
好い加減にやつてる趣味が続いてる
レジの前おごる奢ると揉めている
五十回忌なんとか務め荷を下ろす
安請け合いそれから胃痛肩のこり

堺市 小林 若芽

どんな杭打てばよいのかこの節目
強がつてみても流れに添う覚悟
良い友に恵まれ老いも苦にならず
過ぎ去った風の匂いのする夕べ
見送った日の丸罪な過去を持ち

堺市 羽田野 洋介

形式にこだわることはもう止めた
尖り過ぎた鉛筆の芯すぐ折れる
カラオケも懐メロばかりクラス会
わざとらしい素振りの裏に何かある
隠してもすぐ顔に出る内緒事

堺市 大和 峯二

ほどほどの幸せくれる朝ごはん
女房の機嫌がもどる夕の膳
暗い世に笑えることは貴重品
心眼でこの国見れば矛盾満ち
感謝して生きる生活楽園だ

高槻市 三谷 白黒

漢字にはあつてもいい男偏
川柳は日々の生活そのものだ
爺婆は四人居るのに孫一人
毎日が金は無いけどプレミアム
この齢で老後の為に貯蓄する

豊中市 上出 修

大向こう声で舞台にサビ利かす
天の声たまには出ます変な声
バツと来てサツと散り行く一発屋
ブロックサイン付いていけないプロもいる
ホーホケキョひと鳴きごとに水ぬるむ

寝屋川市 岡本 勲

脇役を生きて世間が見えてくる
意識する相手がおった時が花
さからわず軽い笑顔で従わず
少年の心にもどる竹トシボ
しあわせの今を大事に竹を踏む

大阪府 畑中 節子

淋しそう満月の夜の街路灯
カロリーを気にし乍らもグルメ旅
鍬担ぎ畑に出れば若返り
道端で春だ春よと土筆坊
春畑に定年は無し種子を買う

大阪府 小栢 こずえ

免許証返納急かす事故を見る
リハビリに行けばみんなが顔馴染み
マスクしてマスクの人と話す
愚痴不満書いた日記は隠しとこ
闘志もつ雑草春を我がものと

神戸市 玄 番 美恵子

ドクターの冴える手信じ手術台
光みな集めて温い春の土
とりどりの花色づいて春語る
窓を打つ雨が決意を鈍らせる
美酒とろり人恋う唄に酔うもよし

神戸市 近藤 勝正

梅桜つなぎほんのり雛の花
甲子園はくと故郷つなぐ春
マイホーム時が移ってお荷物に
うぐいすの初鳴きうれし雨戸繰る
初鳴きが恥ずかしいのかそつと鳴く

尼崎市 清水 久美子

確実に春は来ている芽吹いてる
雨天ならよっしゃと叫ぶ花粉症
自信あるのか手の内をもろに出す
箴言を繕き明日の糧にする
田楽に落味噌酒量アップする

尼崎市 永田 紀恵

老人に席譲られて立つ瀬なし
税上がり年金下がり福祉減る
親子して下手物食いのDNA
拉致家族青いリボンも色あせて
黒と白混ぜてグレーになる裁き

伊丹市 延寿庵 野鶴

生きるためしつかり虹を食べている
墨痕が跳ねて躍動する命
朱を溶いて話の中へ溶けてみる
目を洗うまだまだ明日が見たいから
もういいと神がいうまで生きてやる

川西市 日野岡 和之

多事多難多忙多用の苦勞人

喜寿迎えどつしり坐る優先席

ギリギリもセーフはセーフ残り福

オープン戦までは強いぞタイガース

過ぎ去れば悔し涙も温かい

篠山市 藤井 美智子

四季の花自然の合図を待つて咲く

老いの日々趣味と仲良く手をつなぐ

寄つといで切磋琢磨の傘の下

次々と不穏なニュース多すぎる

六年も仮設暮らしに胸痛む

三田市 九村 義徳

逆境を越えて至福の時を待つ

美しく平和な日本待つてます

異議なしの一言待つてゐる会議

ゆるキャラがずらりと並ぶ国平和

お若いに乗せられ幹事引き受けた

三田市 馬場 貴美江

梅の紋願ひ届かず喝入れる

雛あられ五人囃子も手を延ばす

雛飾り昔夢みる八十路です

迷信は邪道であると言ひ難い

マンションに鬼門等々あるのかな

三田市 松本 ゆかり

夫婦でも密に過ぎると息苦し

ひそやかに持つていきます向こう岸

貴女なら宝の息子托します

スカートのプリーツ揺らし春が来た

城下町更地の土の色新た

宝塚市 丸山 孔一

ようしゃべる割に印象薄い人

古家売り僅かな金に譲渡税

墓だけが遠い故郷で俺を待つ

一番でなくて良いけどビリはイヤ

マイナンバー段々攻めて来始めた

西宮市 福田 正彦

奥の手は未熟な腕についてない

一言の謝罪が言えぬ意地っ張り

思いやりバリアフリーを心にも

一杯で酒席はにわか評論家

清貧で華美を求めず足りる日々

箕面市 中山 春代

春の歌子供サイズのキーボード

さわやかな声だオレオレかも知れぬ

その他おおぜい私の好きな役どころ

らくらくの読みが外れる発車ベル

亡き祖母の口調をまねて民話読む

奈良市 尾 畑 なを江

春めきと共にヤル氣が湧いて来た
取り越しの苦勞追いやる大笑い
雪化粧日本の美觀改めて
あるときは負けず嫌いに助けられ
ひそと咲く庭の片すみ黃水仙

奈良市 森 中 博 一

ガラクタも絶對捨てぬ妻元氣
拾うよりはるかに難し捨てること
のんびりと暮したいのに急かされる
恥を知る文化のなんと奥深さ
獣道置いた人いる石地藏

和歌山市 北 原 昭 枝

花に声かけて元氣を貰う四季
日溜りでいい夢をみるかたつむり
陰ながらそれからのこと案じてる
人情がここに染みる路地の風
何にもない一日だったありがたい

鳥取市 田 中 天 翔

川柳の奥の深さを思い知る
恥ずかしい四カ月もの狡休み
無投句の川柳塔誌に色がない
無投句と登校拒否は似ています
何事も目立たないのがベストです

鳥取市 山 野 すみれ

消えぬ間に冬を楽しむ雪だるま
絡みつく切れない糸を引っこ抜く
脇腹の辺りを鬼が出入りする
ペン先に砂糖まぶして文を書く
感謝して暮らす場所から陽は当たる

倉吉市 大 羽 雄 大

ケセラセラとはゆかぬ老いにはけじめ
物忘れスカスカ進む脳回路
貧乏神それがなんだと豆つぶて
猫の手も欲しい復興の屋根屋根
雨と風とっても怖い屋根シート

倉吉市 中 村 毅

腑に落ちぬニュース何度も読み返す
もううんざり天を仰いで雪を搔く
ドキドキもワクワクもなく今日も暮れ
叱ると怒る違いは愛があるかです
返納は脳と手足に聞いてから

倉吉市 宮 田 風 露

過ぎし日も来る日もみんな大事な日
人の世話出来て嬉しや今日もマル
少し病み生きる元氣が湧いて来る
眠れない夜は羊がやって来る
無病息災平凡な日のありがたさ

米子市 生田 和之

鳥取県 児玉 規雄

手を出さぬように大声だけを出す

肩凝りを葛根湯で溶いてゆく

七草も露もわらびも買いに行く

歩行者も他車も信用せず走る

登校の列に斥候隊が要る

米子市 川本 美津子

抱っこして猫に悩みを打ち明ける

春一番鳥に旅立ち告げて行く

論吉さん美人好みか逃げて行く

今年また岩場海苔取る春が来た

お前誰ボケた振りして妻試す

米子市 田村 周子

孫たちも羽ばたく時がやって来た

春が来た夢と希望を我が家にも

今頃はどの子もうまいハイポーズ

卒業式弁当作り終わったな

八十路坂病の友も多くなる

米子市 見山 温子

雛まつり婆もなかまの散らしずし

嫁と孫にまじりほのぼの雛祭り

豪雪に厨房悲鳴物価高

外食の支払い決めるアミダクジ

甘酒を作り配るも趣味のうち

象に見る仏の慈悲の眼差しを(動物園5句)

ヒヨウの眼はヒヨウ柄の服追いかける

行進のスペシャリストはフラミンゴ

百獣の王はいつでも昼寝中

人間を見飽きた河馬の大欠伸

鳥取県 橋本 整

長寿国四人に一人認知症

ともかくも一緒に行こう黄泉まで

老いたいま一步身を引く心がけ

金運が変わらないかと宝くじ

夕焼けに明日の運を聞いてみる

松江市 山根 邦代

このままの平和みんなの宝です

介護する友は笑顔を忘れない

つましさも豪華もまぜて日々楽し

誉められた言葉は心地良い宝

諦めぬ心やる気が勝ってる

出雲市 黒目 英男

思い出が僕の暮らしを勇気づけ

夢を追う自信が少し湧いてきた

風変わり夢がゆっくり動き出す

自らを鼓舞して励むリストアート

腹黒い人に生き方学んでる

瀬戸内市 東 横 ますみ

まだ夢の途中ガラスの靴捜す

逆風を上手にかわすしゃぼん玉

春の日を浴びたフトンがよく笑う

ボンコツ車なれど元気なふりをする

目も耳も脳も加齢と医者が言う

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

いい返事ありそう梅もほころんで

カラオケも昭和集えばお富さん

メールの世拝啓敬具も消えてゆく

食べたいも見たい着たいも今の中

巡り来る桜に今年も逢える幸

尾道市 小 畑 宣 之

良い夫婦夫唱婦随の逆多し

打診せず顔見ず医者はデータ見る

あれやこれあるから楽し人生は

五種類ののど飴嘗めて風邪予防

馬鹿話嫌な空気を吹き飛ばし

竹原市 若 年 幸 子

ゼロ歳が不思議そうに見る百歳

春の慈雨咲けよ咲け咲けチューリップ

お花見を待つセーターはピンク彩

一枝を手折れば罪となる桜

古寺巡り石段毎にある祈り

三原市 鴨 田 昭 紀

黄昏れて記憶がひとつずつ消える

七転びデコボコ道がまだ続く

仏壇と話して今日を締め括る

コーヒーが苦いナンセンスな議論

モノクロで蘇る昭和の記憶

広島県 日 谷 寛

あつさりと脱いだ兜の硬い紐

なるようになれとはゆかぬ後始末

憂さばらしすればするほど重い枷

美しい言葉に笑顔までおまけ

ありがたい話に紐が付けてある

山口市 中 前 幸 子

因習の壁を破ってきた系図

星空へギリシャ神話を追いかける

夜の底掃除しているホーキ星

シラノの声が聞こえる夜のバルコニー

森に入ると昔ばなしが待っていた

宇部市 高 山 清 子

爪はじき承知で頑固老いの意地

寝て待てど果報は来ない新時代

飾らない言葉車座温かい

ネクタイをはずしすんなり人間味

頂点の椅子軋まぬか安倍総理

松山市 近藤修二

満月が折れたところに優しすぎ
叱つても親の遺伝子変わらない
我輩はトランプだマイルール押す
花冷えの好天花粉撒き散らす
現状を破れ破れと風が吹く

松山市 柳田 かつおる

北風のノックで春が湧きあがる
くるこない花占いに聞いてみる
はじらいの蕾少女は孵化をする
春だなあミニスカートが闊歩する
上りより下りの方が厳しそう

佐賀県 真島 久美子

滑稽な形で朝を迎えよう
花を摘むように疑問符消去する
ワタクシの胸に不時着していいよ
小銭入れまでもSOSを出す
人として微妙な歌詞を抱いている

山鹿市 前田 幸子

温暖化ふところだけはまだ寒い
ドクターによしよし言われ元気づく
写経して愚痴を晴らした筆に礼
無調法も見逃しくれる傘寿です
動くたびよいしょかけ声苦笑い

沖縄県 島尻 卓

一緒だねその一言が温かい
近視だが人の美点はよく見える
気の弱さいざ鎌倉で後ずさり
変人を個性豊かと言いつた
悪かったひとこと言えず遠い仲

シドニー 坂上 のり子

ゆつたりと大海めざし去るシドニー
海風に吹かれカクテル揺れている
ニューギニア原始の山にかかる雲
影絵の様に霞む山並み茜雲
葉っぱで飾る現地の子らのフラダンス

塩竈市 木田 比呂朗

年金にずしりと重い五連休
逆走の記事にゆれだす免許証
朝ドラの話題で過ぎる小半日
老眼鏡いつも額で息ひそめ
親族の無沙汰行き交う通夜の席

白河市 鈴木 たけし

七回忌錆びた時計が動き出す
避難指示解除歯科医も帰還する
風評を残して消える仮設の灯
草取りの隙を見て咲く草もある
老いの指オーブナーなど欲しくなり

神戸市 興 水 弘

金も無い才も無いだが夢はある
よくもまあ中身のないこと喋るわね
八十路坂マイペースならすぐ白寿
メタボなどどこ吹く風よメシ旨い

尼崎市 藤 田 雪 菜

円陣を組んで闘志をかきたてる
ボスターに招かれ宿を予約する
好きな色身につけ笑顔冴えている
土の中根っこ伸ばして春支度

伊丹市 平 井 富 夫

大掃除ハラハラしてるヘソクリが
コマーシャル褒めて気付いた物の質
いつの間にスマホ頼りの生活に
古希米寿想定外と息子達

小野市 田 中 辰 夫

流星に見せて掃除の宇宙ゴミ
難聴になって家内の愚痴聞こえ
舌打ちのうぐいす山に春を呼ぶ
はっこりと金銀はしご有馬の湯

加西市 山 端 なつみ

モンゴルのお蔭今ある相撲界
稀勢の里だけの応援狭量だ
一夜漬け度胸笑顔の手話ソング
労働も裁量という不思議色

篠山市 永 井 かほる

バラソルをさしてはとじる雨やどり
日向ぼこ世間話になごまされ
日暮時散歩の犬もコート着て
仲よし会笑い袋もはじけ出し

篠山市 長 澤 喜 弘

虹見えるよ物干し場から妻が呼ぶ
倦怠期孫の電話にさす晴れ間
デイサービスおめかしをして行きだした
怖そうな客騒いでも見ないふり

篠山市 長谷川 善 輔

猫そわそわお前もか今日は啓蟄
春きたよこたつを出よう猫が言う
黙々とスマホの中が参考書
イチローの引退まではがんばるぞ

三田市 幸 田 厚 子

気にせずにお越し下さい諭吉祥
防災用期限のチェックカップ麺
年金日バーマをかけてあす旅行
茶柱は入試の朝の贈り物

三田市 宗 福 清 司

とんとん拍子で纏まるともの足りぬ
私の行動遊びではなく余裕です
古希過ぎれば欲しいものが減ってきた
我が夫婦ヒントは不要ツアーよ

三田市 辻 開子

暖房費高くついたが元気です
弥生月卒入学が小走りで
生の花一輪だけどホッとさせ
老いの足梅桃桜癒やされる

和歌山市 倉橋 悦子

幸せはほんの少しの譲り合い
美術館わたしのあったかい時間
定時刻今日が元気に発車する
爽やかに鼻歌が出る風みどり

三田市 東内 美智子

病状に陽差し柔らかかも早春
年賀状今年最後と二通増え
化粧品きれいな肌でコマーシャル
きらめきは小さいけれど芽吹いてる

和歌山市 鍋嶋 澄子

あがり症ちよいと褒められ紅潮す
アイホンで毎夜きみまろ笑い転け
雪降るをながめ熱かん炉端焼
いなびかりビツクリ雨を逃げ惑う

宝塚市 井上 風花

和歌山市 平田 元三

紅梅の咲いて心にわらべ歌
いい絵だねさんざんほめて買わぬ客
運命の出会いじゃないが添いとげる
君の名は真知子と答え恥をかく

一本の見舞メールが温かい
一行の記録で記憶よみがえる
体力を気力がリードする余生
寝た切りにテレビはミニのスクリーン

三木市 山口 久子

岩出市 村中 悦男

われ九〇今もはたちの化粧する
九〇でも迎えるまで頑張るよ
じいちゃんの昔話がたのしいよ
つまみぐいひ孫に見られ味しらべ

あれこれと思う夜中の豆電球
父母を越えての日々を模索する
卒寿来てかけがえのない日々生きる
弟逝った知らずに苺熟れている

奈良市 高橋 敬子

和歌山県 森下 よりこ

ない角を持つてる振りにもう疲れ
アピールの角を切られる奈良の鹿
損しても誰か得して世は回り
寒行の太鼓トントン祖母の音

コンビ二弁当くらしに変化つけている
親切にされ年寄りの悪くない
雑談の中でヒントを貰ってくる
三猿でくらす生活とても無理

鳥取市 大前 安子

おめでとう苦勞一度に過去になり
翼つけ君春の野へまっしぐら
籠の中あなた好み春を盛る
ホップステップ春の靴を揃えます

鳥取市 奥田 由美

豪雪も新聞とどく有難さ
五種類の薬いただき得た生命
来年もバレンタインが検査の日
無遅刻が後押しくれた内定書

鳥取市 高原 かおる

日本酒を呑んできたのが寝てしまふ
椀子ソバ高く重ねて食べすぎる
あちこちに激しい寒波そして春
寒隠居しゃべって飲んで食べている

鳥取市 津村 律子

待ジャパン幸先いいぞ神ってる
春場所の土俵の鬼が楽しみだ
小池知事急ぐ豊洲の道しるべ
締切りに焦る五七五まだ白紙

倉吉市 田中 紀美恵

ネギの根っこ切り植えての再利用
脳味噌を出しおしんだら惚けて来た
ムクムクと太った猪里あらす
やばな事早く帰れと言いませぬ

倉吉市 田中 けいこ

出かける前話の長い人がくる
適当な性格のちに加速する
緑茶炒る部屋の臭いを消す為
順序踏み話すのはむづかしい

倉吉市 堀 かずこ

つらい時心で泣いて笑顔する
満月が私見ている母の顔
夕暮れの散歩に誘う影ばうし
親不孝会に行こうか墓参り

境港市 中井 虎尾

梅の香にはげまされつつ遠歩き
春なのはるを知らない我が財布
いい景色目をうばわれて句が出来ず
トバクダメカジノヲクニガツクリマス

米子市 永井 美津子

あつと言う間トイレに消えた愛車キー
止まぬ雪無事を祈って鍋を待つ
軒水柱春はまだだと日毎伸び
干涸びた脳振り絞り句を作る

米子市 野川 宣子

いい知らせ十五の孫に春が来る
気を抜くと老いの姿になつて
一つずつ捨てて身軽く羽ばたこう
別天地のぞくメガネは高く付き

鳥取県 飯野 菖子

雲流れ父母恋し遠い空

スランプが教えてくれる老いの道

耕して牛が支えた国土です

産声は両手に未来握り締め

鳥取県 門村 幸子

近場では一箇所だけの映画館

昼間から宴会できる定年後

遺言書必須だろうか独り住む

暮らしのリズム少し乱して日々元気

鳥取県 下田 茂登子

断捨離か血縁までも捨てている

最後には妻に骨抜きされていた

宝くじ買っていないから当たらない

除草剤草は枯れぬが樹が枯れた

松江市 相見 柳歩

迷惑をかけたあの世で恩返し

踊ろうよリズムに乗った者の勝ち

あたたかい日差しで地球生かされる

飛ぶ鳥も自由なようにで苦勞人

松江市 中筋 弘充

もう二度と乗らぬぞジェットコースター

負け惜しみ絶対言えぬ勝った人

中流になった気がする年金日

頑なに性善説で生きている

雲南市 永見 安子

頼まれもせぬ心配に胃が痛む

三代時々話食い違い

まっぴいかな下手な一句も呆け防止

加齢です言われて返事あまいに

安来市 原 煩惱児

止めたら終り老いの挑戦免許証

冷静に選抜見れる甲子園

二ヶ月に及ぶ入院只感謝

退院を喜んでくれ山や川

鳥根県 福岡 芳枝

剛氣湧く悔しさ嘔んだ腹の底

嘔みしめてあしたへ生かす今日の悔い

滝の音響いてくるぞ水墨画

踏みしめて生きたわたしの脚の跡

瀬戸内市 片島 秀月

若竹の如く子孫は吾を越す

一行の手紙に秘めた妻の愛

歳老いて仮面を捨てて今を生き

針の穴から世界が良く見える

玉野市 片岡 富子

静寂の中で予期せぬ咳が出る

「晴れますよ」信じて帰り裏切られ

言い訳をしないで采配待つとする

生き甲斐と加齢のグラフ右上がり

広島市 松尾信彦

春風にふたりの歩調リズムカル
茹で玉子だけに許さる塩を振る
三猿を嘲笑って来る噂
何もせず何もなかった日を悔いる

竹原市 土井輝恵

二年分会費前納百二歳
老いぬればごめんなさいとありがとう
嗚呼青春ムッシユかまやつ風になる
入選を共に喜ぶ夫と居る

府中市 岸田武

よろこんで履きます孫のスニーカー
とりあえず頭を下げておく空気
お元気ですね恩師の提げたレジ袋
妻の嫌う帽子は僕のお気に入り

三原市 笹重耕三

背の高い人の隣で背伸びする
自販機と立ち話する無人駅
ストレスを赤提灯に診てもらう
投票へ行った顔して言う理屈

三次市 伊藤寿子

体調をくずしと主治医入院し
神さまの次に主治医を頼ってた
先生も人間だった無理のつけ
点滴はして上げるへは重い腰

山口市 青木隆子

三月に雪降る今日が底と言う
母元氣幸せ過ぎて怖い明日
消防団撫子氣張る過疎の町
地域興し若い力が躍動す

下松市 有海静枝

壁向きで妙に落ち着くひとり飯
目に見えぬ壁を作っている自分
壁ひとつ越えたところに高い壁
防波堤だったと知った父の壁

松山市 郷田みや

あの人に出す絵葉書は沈丁花
どんよりの空が机に向かわせる
泣きながらしつかりご飯食べている
打ち明ける前に塩抜きしておこう

今治市 渡邊伊津志

白桃を落とさぬように洗う孫
のたりのたり海は充電するところ
口開けて歩く烏や日の盛り
盛塩を大きくよけて蟻の列

大洲市 花岡順子

優先是子供の意見マイホーム
適当に話合わせる認知症
縁側の猫にのどかな昼下がり
片思いフオークダンスの手が触れる

西予市 西田 美恵子

妻の味噌汁母の味噌汁僕の駅
あの時のあの日の雨を忘れない
灯り消すもう迷わない迷わない
老いるとはこういう事が覚悟する

高知市 三谷 松太郎

一日一善 一日一句

ハイタツチばあさん同士この元氣
会席の女尊男卑の賑やかさ

ウソじゃない正直じゃないこの自伝

北九州市 小松 紀子

ケンケンバー楽しかったわ友おもう

うかんだ句メモらず寝て消えた朝

雪景色ながめる分は良いのだが

愛犬も老いて心配寝息きく

福岡県 本田 さくら

体に良いテレビが言えは真似をする

好奇心噂聞きたい耳がある

障子のさくら二歳の孫の爪のあと

自衛隊無事に帰れと家族待つ

唐津市 岩崎 實

まぎらわす酒におぼれもした父で

数え年九十煙草の味も知らぬまま

年とったお悔み欄に目が走り

春を知る足音風とゆきもどり

唐津市 吉富 節子

身は病むが熱き心で友包む
桃咲きて亡夫との旅を思い出す
医者は言うこれ位なら歳だから
亡夫アイバンク私もありますアイバンク

山鹿市 中山 好汰

意氣盛ん希望にもえて巢立ちゆく
外孫もあつという間に育ちゆく
妻とゆく残りし日々を考えり
スポーツも春のいぶきと咲き始め

山鹿市 柳田 白沙

補聴器においておいでと誘われる
人が言う人生変わる補聴器で
サービスをしないのも又サービスです
あなたとのつむいだ糸の完成度

那覇市 前川 真

笑う目で肩たたかれて出る元氣
振り返る余裕も出来て記す恥
手を上げて渡るのかしら三途でも
整頓も過ぎると胸に穴が開く

沖縄県 あら さくら

今しかない目いっぱいの時過ごす
ホーホケキョ小枝も揺らすのど自慢
想い出に忘れな草を押し花に
春が来たほっぺも陽気さくら色

春嵐雨足ノック窓ガラス

なんとなく続けた仕事天職に
買わないと当たるはずない宝くじ
愛犬の死に目会わずに心落ち

沖縄県 禰

ももと

沖縄県 島村 つばき

筋トレの休日楽しバイキング

ルーベ掛け裾上げたのに裏表

汚れぬか初マニキュアに手抜き家事

こんには挨拶交わし首かしげ

沖縄県 高良 秀光

すれ違いやつと気づいた南風

老春のスタートライン今ここに

ケーキ前しあわせさけぶ孫二歳

女房の輝きは旦那の器量

沖縄県 宮 すみれ

老蛙春のめざめにビブラート

いけメンのおにあいですね桜ほほ

肥えた土太っちょミミズ9センチ

昼夜と使い分けするメーキャップ

札幌市 斉藤 宏子

蒼空にはじける晴れ着新人生

図書館にひそむ不思議な未知の国

つくしの子大あくびして背を伸ばす

雨だれも優しく軽く踊りだす

札幌市 富永 恵子

めぐり逢う数えきれない情のかず
氷割る春の足音猫柳
稜線を歩けば翼はしくなり
はねる髪少しなだめて急ぎ足

弘前市 高森 一吞

結び目を解いてみたら嘘がみえ

聴診器胸の秘密を悟られる

シナリオは自作自演で生きている

鯨鯨鍋酒がじんじん沁みわたる

男鹿市 伊藤 のぶよし

お隣にコンビ二老いのパラダイス

自慢と言えば取り敢えず無病です

郷の旬ギョツと詰め込む五目飯

とどのつまりは酒という仕舞い方

上尾市 中村 伸子

クリスマスローズ久方ぶりの庭

居心地が悪い観察される側

頭のいい子が育つ本など手遅れで

冗談を真に受けられた悔いメール

松戸市 山下 明子

寒空に心機一転髪を切る

歌い継ぐ世界に一つ花枯れず

化粧して若作り手でバレちゃった

笛鳴れどシニア動けず笑うだけ

東京都 高岡弥生

豊橋市 藤田千休

優しくて打たれ弱いの人さん
床暖の上で静かに犬寝てる
切なさ沁みる日曜明日仕事
独り立ちなかなかしない寂しがり

伊勢原市 小田幸子

ゆとりできふとすきま風ふり返る
立ち止まり連れないのに気がついた
なぜだろうそんなにひたすら介護大
犬見つめ共通の友なつかしむ

沼津市 鳥沢無午

たったそれだけの為にもがいている
ヒトだけが泣けると知って涙する
不完全寛解だからまだ生きる
相性を気にして恋が進まない

江南市 脇田雅美

人間はストレス溜めて病呼ぶ
ペットボトル畑でガラガラ眠られず
三面鏡もつと笑顔で立てと言う
場の空気読めて興味が沸いてくる

豊橋市 西郷紀美代

御馳走はたまに頂くから旨い
朝刊のレシピで防ぐマンネリ化
自分史に孫の句だけは捨てられず
ブランコに童心もらう春日和

ミラクルを夢見て努力しない主義
淫らな目ブルサイドで泳がせる
執拗に過去を引きずる記憶力
慎重居士の回りくどさを持て余す

鈴鹿市 小河柳女

葱刻む春のリズムになるように
パフォーマンスの上手な空で澄んで
昼の月がじつと恥ずかし露天風呂
憎しみの波も静かに引いてゆく

大阪市 木藤こみつ

相合傘好きな人へと傾ける
中国産と書いてあるから戻す棚
傾いているから値うちある斜塔
つぶれた梅干味は同じだ安く買う

大阪市 田中廣子

竹をわる義父の性格たのもし
損得は言わないいつも元気なら
リクエスト庖丁はずむ孫の声
はやとちり急ぎすぎるは怪我の元

大阪市 梅里南天

笛の音が胸の奥から聞こえる
お風呂屋の回数券を友がくれ
燃えつきる身体無理矢理カイロ貼り
女教師が酒を飲み干す送別会

大阪市 前川善之

下がる年金エンゲル上がり生活苦
お爺ちゃん転けたらあかん孫の声

生れたら常に勉強終わり無い
アイマスク付けて生きれば苦は見えぬ

大阪市 吉田知之

腹痛は医者より先に正露丸
名を忘れニツコリ笑いすれ違う

羽根布団余り軽くて頼りない
川柳で世間を見る目広くなり

泉大津市 助川和美

定年のない妻今日も米を研ぐ
無精ヒゲ剃らないままでコンビ二へ

カタカナ用語孫に何度も問い返す
節約妻商品ロスのない我が家

交野市 田岡九好

行く前に行った気になる時刻表
句を練って練って始めにもどりけり

ヤバイ時やごめんと言って逃げまする
こんなにもアリと思うて気を鎮め

河内長野市 渡邊修

爺ちゃんにGPS付き万歩計
期限切れETCがとうせんぼ

会釈した今のあの人の人だれかしら
野心家のあの手この手の詭弁術

堺市 近藤治子

母と娘が揉めると父はいなくなり
揉め事を起こした人は知らんぶり

芽吹くとき乙女が羽化し飛び立った
雨の日は家ででれでれテレビ見て

豊中市 荒巻夢

齡重ね遠い約束覚つかぬ
お世辞まだ通る程度の老け様か

ろう梅に顔寄せ香り思いきり
文明の行き着く先をチャップリン

豊中市 貝塚正子

皆同じもともと借りている一生
杖がわり手をつなぎあう老夫婦

発表会陰で先生タクト振る
和食器にフレンチを盛る憎いシェフ

豊中市 源田啓生

菟弱は罪なき罪を着せられる
足音も立てず戦争忍び寄る

気忙しく粧い始めた桜たち
老妻が居て楽しくも口喧嘩

富田林市 小出修三

高齢者みな持っている知恵袋
懐メロを聞くと眠りに誘われる

ジェラシーも励みになって頑張れる
草むしり明日あしただでせす仕舞い

羽曳野市 磯本洋一

六年の月日が流れ未だ地獄
税食って知らぬ存ぜぬ永田町
模様替えやれど変わらぬ狭い家
予備校と墓地案内がボストイン

羽曳野市 安本美喜

金高騰婚約指輪はめ直し
春や春おしゃれの夫は趣味の会
水鉄砲復興の子等元気づけ
農起業社長になると女の子

枚方市 坂本ミヨノ

人間もなん度も生きてみたいです
椀の中菜の花浮かぶすまし汁
猫の春大声鳴いて仲間呼ぶ
墓参り草もち供えともに食べ

箕面市 寺井柳童

沙羅ちゃんの笑顔さわやかジャンプ台
綱締めて土俵華やぐ稀勢の里
陽春へ予定が埋まるカレンダー
すぐそこに春は選抜甲子園

八尾市 田邊浩三

杖付いて豆撒きをする難しさ
スルメイカまで奪うのか温暖化
根性で傘寿の山を越えてやる
とことんは酒呑み同士の合言葉

八尾市 前田紀雄

娑婆のウツ目途の立たないエンディング
心技体刃毀れしてる喜寿の坂
私の川柳行脚道半ば
春ですネ心の準備する蕾

八尾市 山川寧

孫が来る喜び二乗出費三乗
メモは早いが実行は遅い
レトルトの骨まで食べたブリ大根
同窓会初恋の人影もなし

大阪府 神野千恵子

いつからか三足歩行になっていた
泣き笑いあつて家族の血が通う
人情って何ですかとツイッター
ハチ公を御役御免にしたスマホ

大阪府 高木道子

週一度の体操で老化撃つ心算
斎場に百寿の煙天に伸び
雑草がスクラム組んで春を抱く
苛立ちを隠しきれない北の国

(前月分) 京都市 櫻崎篤子

母にメダル贈る子供で居たかった
大の字が白くくつきり京の朝
乱れ散る雪に水仙立ちつくす
ほめられた手編みベレーが手放せず

英語 de Senryu ⑥

麻生路郎句集 『旅 人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

一票が悲しき支配力を持ち（総選挙）

one vote

has a power

of sorrow (general election)

壁に塗り込められたやう 人動かず

a man stands still

daubing a wall

with mud

vote 投票 *power* 力 *sorrow* 悲しみ *general election* 総選挙、一般選挙
stand still 静かに立っている *daub a wall with mud* 壁に泥を塗りつける

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑤

Djurdja Vukelić Rožić (クロアチア)

2015年5月にポーランドのクラコウで、第2回インターナショナル・ハイク大会が開催され、わたしはクロアチアから参加した *Djurdja Vukelić Rožić* に会いました。彼女はハイク、センリュウ、タンカ、ハイブン、ハイガ、詩、短編や警句もつくる才女です。海外の詩人は、川柳なら川柳だけを創作するのではなく、多様な形式を同時に創作しています。そのためハイクを書く詩人のほとんどがセンリュウの創作に関わっています。彼女はクロアチアで有名なハイク雑誌 *IRIS* の編集長、クロアチアハイク協会 *Three Rivers* (三川) の秘書も務めています。今回はクロアチア語、ドイツ語そして英語の三ヶ国語で書かれた *Whose is this Planet?* (2015) から彼女のセンリュウを紹介しましょう。日本語の直訳に5-7-5を試みてはいかがでしょう。

heads in the grass/ four cows at a free/ village concert

(原っぱに頭 四頭の牝牛 村の無料コンサート)

a young widow/ now walking/ an expensive dog

(若い後家さん 今やお散歩 高価な犬連れて)

letter from the bank/ offering e-banking to/ —a dead man

(銀行から手紙 Eバンクへのお誘い 死んだ男に)

Angelus—/ by the cemetery gates/ a young couple hugging*

(お告げの祈り— 墓地の門扉の傍で 若い二人が抱き合い) *一日3回の祈り

誹風柳多留一二篇研究 47

細井 龍夫・伊吹和男

山田 昭夫・石川道子

小栗清吾

清 博美

384 何ンといふものかと金を子にみせる

細井 普段の生活では思いもよらなかった金ピカの小判を手にして、つい、嬉しさのあまり子供にも見せびらかす。「な、これが小判というものさ。いいだろう」と。富札が大当たりになったのか。

子ほんのふ小判もたせてこまる也 四 13

伊吹 賛。金の効用。

清 入手経路はともかくとして……。

385 入王になつてへんじを書きかゝり

細井 将棋で王将が敵陣に入ることを入王というが、そうすると、なかなか勝負がつかなくなる。そこで、見物していた人は手紙の返

事を書きかかる。将棋指し本人は次なる手を考えねばならないので、手紙どころではないだろう。

入王八前九年ほと手間かとれ 拾一〇 20

入り王に成ルとさかなや助言する 一三 6

清 賛。

386 手にあたるものてきむすめぶつて遊

細井 木娘と言われるように、まだ世間なれしてなくて、堅物で純な少女である内は敏感でもあり、口説かれたりしようものなら、そこらにある物で相手を打つて、悲鳴をあげて逃げる。

木娘へふといゝ出してむごくされ

安二宮 2

生娘をくといてごをさらすなり 一一 21
木娘の尻りをつめれハきじの声 宝日鶴 2
木むすめハ片袖すてゝにげて行 六 32
清 賛。

387 野かけ道あたまへあふぎくゝし付

細井 気晴らしにと郊外へと野掛に出掛けたが、あまりにも日射しが強くて頭が焦げそうなので、とりあえず、持っていた扇子をひろげて、手拭などで頭にくくしつけて、当座の間に合わせに日除けとした。

石川 賛。扇にこんな利用法があつたのですね。

清 賛。

388 三分一土手を残してねだるなり

伊吹 土手八丁の日本堤において、もうあと三分の一で吉原に着くという道ので、四つ手の駕籠舁は、なんだかんだと苦情を言いながら酒手をねだってくる。

もちつとにしてから四ツ手なんのかの

山田 賛。客の心理につけ込む。

おくれ先きだつも酒手次第也

安六満 1

安二板 3

清 賛。さすがはプロ。タイミングを心得ている。

安五亀3

今くれる日にけいせいハか、ハらず

拾六22

389 二二三町出てから夫婦つれになり

伊吹 現代と違い夫婦と一緒に家を出ると世間がうるさかったので、家を出てから二三町歩いてようやく夫婦は肩を並べて歩くようになる。

夫婦つれ女房に先キへ出やといふ 六二

山田 賛。これも又よい風景と思うのですがねえ。

清 賛。

390 そのらはをあとすべいと下女がせな

伊吹 下女がせなは、下女の恋人や兄をあらわす語であるが、この句の場合は下女の兄。下女が妊娠したので、その兄が心配している。

下女のはら心あたりが二三人 二二9

山田 賛。それから一騒動となるのでしようが、兄の苦勞は絶えない。

石川 下女の恋人ではいけないのですか。

細井 礎賛。恋人という立場の者はいないでしょう。

あなたこなたの御なさけで下女はらみ

気のよはい下女あれにさせこれにさせ

末二12

はらんでもおれハしらぬとむごいやつ

末二24

清 賛。妹を心配する兄。

391 ひわハくろにおさまつて金をかし

伊吹 天下泰平をあらわす成句「弓は袋に太刀は鞘」を援用している。座頭や検校などが、それまでの琵琶の演奏をやめ、金貸し專業になるのを詠んでいる。

金をふやすのがびわより妙手也 一四二

清 賛。

392 そこに置キなんせはにくいもらいやう

伊吹 床花などの遊女への贈り物。特に金銭を見るのを嫌うから、直接受け取ったりしない。貰う立場なのに、そこに置いておくと、腹立たしくも立派な貰い方だ。例句の遣りぢからなきは、遣り甲斐がない。

けいせいハ遣りぢからなき貰ひやう 二15

山田 賛。何といつても天女さまだものね。

これも手管。

清 賛。

393 母のるすはなしがわれるやうに出来

伊吹 割れるようは、興奮して大騒ぎするさまのたとえ（『日本国語大辞典』）。母親が他出しているときは、鬼の居ぬ間の洗濯で、自由気ままに大騒ぎで友達と話すことができる。

母のるす通るものごとそ引こみ 二二2

かの娘来たので湯やかわれるやう

明三梅2

清 賛。

394 口へゆびさしてめかけのうわざ也

伊吹 あの内義こ、がわるいと口チへゆび

天三仁1

のように口へ指は、口が軽い・悪口を言うなどといった意味。主題句は、告げ口に気をつけねばと身振りで示しながら、妾の噂話をしている。

人質をもつためかけの口か過

清 賛。

拾二8

愛染帖

新家 完司選

(投句) 300名

田辺市 岡本 昇

とほとほと歩けるうちは健常者

(評) ちよっとと見はフツうだが、耳は遠くて目はシヨボシヨボ、足腰も菌もガタガタ。後期高齢者はみんな「要注意健常」である。

奈良市 加門 萌子

よく食べる夫まだまだ大丈夫

(評) 歩く姿もトボトボ。めつきり年寄り臭くなつてしまつたが飲み食いだけは壮年期と同じ。「まだまだ」と思いたい、信じたい。

沖縄県 島尻 卓

定年後「余生」の字面気に入らず

(評) 「余つた人生」「暇人」というマイナスイメージのある「余生」。二十四時間では足りないほど充実している人には不快な言葉。

横浜市 居谷真理子

五本指靴下じゃんけんバーで履く

(評) 履き難いので敬遠していた五本指靴下。ナルホドそれがコツか！ ついでに頭の体操になるし足裏の筋力アップにもなる。

松戸市 山下 明子

口喧嘩負けてたまるか孫六つ

(評) つい先日まではくつついて離れなかつたのだが…。孫ごときに負けてはおれぬ。口喧嘩も頭の体操、愉快に応戦してやろう。

大阪市 高杉 力

ひとり起きひとりで食べて行くゴルフ

(評) 早朝の出発に「ご飯の用意します」と奥様は言ってくれるが、自分だけの楽しみなのに負担はかけたくない。思い遣り満点！

河内長野市 谷 久美子

ランチして歌つて今日はバラダイス

(評) ファミレスもカラオケも女子会でいっぱい。この世はおばちゃんたちのバラダイス！ おじさんたちはどうしているのだ？

三田市 堀 正和

大雪で食べてしまつた非常食

(評) 買い物に出かけるのも大変なドカ雪。非常事態と言えなくもないが、本番に備えての訓練の趣。補充を忘れないように。

鳥取市 谷口回春子

雪道の足跡歳を暴露する

(評) 大腿で「颯爽！」と歩いているつもりだが、足跡を見ればヨチヨチ。蛇行しているのはフラリとよるめいたところか。

羽曳野市 宇都宮ちづる

通夜に出て自分の時のヒント得る

(評) 何事もキツチリしたい性分。「ああして

こうして」と指示を遺すつもりだろうが…。さて、その通りにやつてくれるかどうか。

松原市 森松まつお

如何ともしがたいばつと見の悪さ

京都市 榎本 宏子

菌列矯正 鼻の低さが気に入らぬ

豊中市 水野 黒兎

絶滅の危惧しとやかで黒髪で

鳥取県 門村 幸子

頑固者にガンコ者だとのたまわれ

宝塚市 太田としお

コンビニがあつたら要らぬお母ちゃん

岸和田市 雪本 珠子

見えないが香りにもある存在感

松江市 石橋 芳山

何となく違うわたしと僕と俺

海田市 小谷 小雪

思うことの半分できて愉快な日

三原市 鴨田 昭紀

透明な紙に包んでいる自慢

大阪府 米澤 俣子

戦力外通告待てど来ない主婦

羽曳野市 中川ひろ介

望郷という食あらば味噌煮込み

大阪市 藤原千恵子

コンコンと二人で咳の二重唱

三田市 北野 哲男

大阪市 平賀 国和
文鳥が真ん中にいる我が家族

富田林市 中井 アキ
ほとんどの欲が小さくなってきた

唐津市 仁部 四郎
血刀のような社説を探してる

大阪市 谷口 義
何があっても平気という顔もでき

茨木市 藤井 正雄
見極める敵か味方が初対面

鳥取市 山野すみれ
曖昧な堅さが好きなゆで玉子

「無料です」痛い所を突いてくる
弘前市 高瀬 霜石

喧嘩には使わなかった肥後守
バカだった君アホだった俺 同期会
板井市 安土 理恵

遺書の話それなりの味夫婦酒
カッパ麺半分こしてシメにする
沖繩県 森山 文切

大人になったけどどうまい棒が好き
恥ずかしそうに踊るくらいはできる
奈良市 大久保眞澄

引力か老いてへの字になった口
どっこいしょごときで腰は上がらない
神戸市 奥澤洋次郎

純愛の話は苦い古い傷
地下鉄の窓に孤独な顔があり

青森市 守田 啓子
リクナビからオフアーぼこぼこふきのとう

長野県 丸山 健三
掘り出したゴミはこの世を見て叫ぶ

東京都 川本真理子
電子とつく全てのものが憎くなる

心に火を付けた無患子^{むくろじ}弾いた目
熊本市 杉野 羅天

粛粛と消えていかれる論吉さま
大阪府 古今堂蕉子

見て見るとスマートフォンに露出する
京都府 清水 英旺

獲物狙うネット社会の女郎蜘蛛
佐賀県 真島久美子

煩惱という絨毯が好きな足
夢ならばお腹いっぱい食べなさい
藤井寺市 鈴木いさお

標準語五分喋ると草臥れる
移植出来そうな臓器は何も無い
倉吉市 田中けいこ

ストープの上でヤカンが根深節
プレミアムフライデー仕事山積
松江市 相見 柳歩

ふる里に飾る錦は命だよ
糸の先ほどの情けを縫っている
八尾市 山根 妙子

来世ではもっと優しくしますから
蔵元のきき酒過ぎた伏見道

和歌山市 古久保和子
川柳の終身刑に紙とペン

青森県 松山 芳生
5Bでは足りぬ10Bで勝負する

神戸市 能勢 利子
よく笑う句会はいつも皆勤賞

競わねば何と楽しい五七五
神戸市 富永 恭子

没嘆く傍でいつかは載ると妻
倉吉市 中村 毅

全没をケーキセットで慰める
貝塚市 石田ひろ子

加齢臭もつと出したい五七五
鳥取市 田中 天翔

河内長野句友健闘愛染帖
紀の川市 辻内 次根

寝て起きて楽しいことをまた探す
奈良市 尾畑なを江

さて今日の楽しみさがす朝が来た
大阪市 平井美智子

一日を楽しく生きるのが仕事
河内長野市 渡邊 修

ロボットと母が茶の間で笑ってる
豊中市 松尾美智代

コンビニのコーヒー友と飲む至福
西宮市 緒方美津子

悪友のおかげ楽しい後期です

鳥取市 倉益 一瑤
免許返納他人の事でなくなつた

三田市 上垣キヨミ

免許証返してボリス怖くない

羽曳野市 吉村久仁雄

道の駅切符代わりの野菜買う

尼崎市 清水久美子

新鮮で安いから好き道の駅

川西市 山口 不動

寒気団股関節から腰に來た

豊橋市 小松くみ子

冷たいがこの雨あつて春が来る

米子市 成田 雨奇

今日も雨三ヶタで終わる万歩計

西子市 黒田 茂代

膝に毛布 足元行火 背に懐炉

富田林市 山野 寿之

輪を嫌いぶらり気楽な立飲み屋

鳥取県 児玉 規雄

ブレ金で立ち寄る飲み屋一つ増え

海南市 堂上 泰女

フェデラーの再起育に酌み交わす

松江市 中筋 弘充

普段より脚力鈍る酔っ払い

八王子市 川名 洋子

桜よりお酒 開花を待っている

堺市 加島 由一

宅配食ひとり晩さん舌鼓

弘前市 稲見 則彦
家飲みにせめてサユリの写真置く

大阪市 若本 安代

花冷えにホットワインであたたまる

枚方市 寺川 弘一

晩酌で毎度初期化をするわたし

大阪市 井丸 昌紀

外で飲んでも湯割り一杯飲んで寝る

三田市 多田 雅尚

料理用の酒はやつぱり不味かつた

松山市 栗田 忠士

消去法酒と川柳だけ残す

沖繩県 高良 秀光

なんとなく一球外すゆとりで

和歌山市 柏原 夕胡

その昔ここがウエストだった位置

三田市 上田ひとみ

誰ひとりやせたらなんて言いません

伊丹市 延寿庵野鶴

半眼を見ひらく悟りまで遙か

米子市 池田 美穂

韓流と韓流の間に仕事する

松山市 柳田かおる

生きるってネジがだんだん緩くなる

奈良市 森中 博一

紙オムツ一度はいたら止められぬ

河内長野市 山岡富美子

鮎ひとつ孫の話はまだつづく

奈良市 米田 恭昌
花粉症巫女も大きなマスクして

枚方市 海老池 洋

人間の都合で嫌う杉花粉

岡山市 藤成 操江

余つたら少し下さいいい話

河内長野市 藤塚 克三

学校の怪しさ 政治の怪しさ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

極楽は此処だと墓園花吹雪

香南市 桑名 孝雄

何がめでたい卒寿の祝いやめにする

奈良県 渡辺 富子

子孫ひ孫みんな揃つて丸い鼻

神戸市 山口 光久

お人好しの仮面を捨てて薬になる

山口市 青木 隆子

いじめ見てひとこと言えた勇氣の子

鳥取市 池澤 大鯨

子どもらに煙草やめると言われている

松山市 郷田 みや

フライパンひとつで作る星三つ

大阪市 宇都満知子

かにかまぼこ主役になって蟹サラダ

今治市 渡邊伊津志

満タンと言えば窓まで拭いてくれ

河内長野市 中島 一彌

葬儀社が社名を変えて匂い消す

尼崎市 山田 耕治
留守番のメモにもハート書いてある

和歌山市 福井 菜摘
晩年になっても好きなハート型

神戸市 細川 花門
温かい妻の言葉に飢えている

三田市 足立つな子
温まるネギと生姜のかけうどん

那覇市 前川 真
勘違い上げた拳でストレッチ

堺市 近藤 治子
はけぬようなんとかしてと神だのみ

藤井寺市 若松 雅枝
ジャラジャラと小銭でアピールお賽銭

奈良県 安福 和夫
愛の巣が今は独居の趣味の部屋

沖縄県 島村つばき
カルチャーを広げすぎたかたためない

米子市 竹村紀の治
ラジオ体操してもう一度眠る

和歌山市 松原 寿子
美しい怪我青春の片想い

枚方市 丹後屋 肇
浮気ごころ牽制球がめっちゃ速い

生駒市 飛永ふりこ
すっとんと君に通じりやめつけもの

鳥取県 竹信 照彦
旅してもゴロ寝をしても日は暮れる

和歌山市 上田 紀子
デジタルの街がキラキラ住みにくい

紀の川市 山東日出男
ハイハイと電子音にも返事する

河内長野市 木見谷孝代
冴えた月私をそっと呼び止める

池田市 太田 省三
新築の門もローンの匂いする

鳥取市 西川 和子
輪の中へ何時も無難に適当に

三田市 福田 好文
立ちしよんの先ふと見れば路の臺

紀の川市 北山 絹子
ブライドの高い男を避けている

富田林市 肥山 一文
山と川間近にあつて老い癒す

鳥取市 永原 昌鼓
そこここに伝い歩きの老い姿

豊橋市 藤田 千休
天気晴朗なれど血压高し

三田市 石原 歳子
大阪へ買い物に行くSサイズ

奈良県 谷川 憲
長い会議目配せで抜け小休止

羽曳野市 徳山みつこ
わたくしの名刺はクスンとも言わず

宇部市 平田 実男
妻の目が恐かった頃なつかしむ

鳥取市 岸本 宏章
「瑞風」が走るとあなたが乗るのやら

岡山県 池田たか子
楽になるCM主婦をそそのかす

三原市 笹重 耕三
ホップステップ中途半端になるジャンプ

東かがわ市 川崎ひかり
ジジババは乗せぬ新車に大乗せる

高槻市 松岡 篤
ニューモデルどうか操作は簡単に

米子市 後藤美恵子
野良猫が花壇にいらぬ肥やしする

府中市 岸田 武
ふる里はいいが長居は出来んなあ

和歌山市 玉置 当代
これからも生き生き弾むローヒール

鳥取市 夏目 一粋
掌をあわせ通り過ぎたが大吠える

大阪市 大川 桃花
乙女座で喜寿と傘寿という姉妹

和歌山市 平田 元三
溜め過ぎた薔癪玉が弾けそう

沖縄県 あらさくら
食べ歩き満杯の胃が悲鳴上げ

瀬戸内市 宮宅比佐恵
口数も笑いも減って食べて寝る

三田市 谷口 修平
もう五分待てばよかった五割引

共選欄

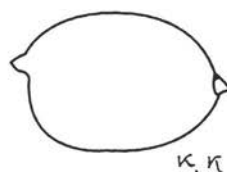
檸檬

檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 386名)



「適当」 北野 哲男 選

センセイと呼んどきや多分大丈夫
適当な結論が出てまず乾杯
酒飲めばチョンチョンチョンで終るはず
反省会をそこにして酒にする
頃合いをみて飲み会を切り上げる
適当にと言えは出てきた時価のトロ
適当にやらせておくと失礼な
適当にあしらわないでカスミ草
小遣いに合わせてくぐる縄のれん
適当に相槌を打つ倦怠期
いつ死ぬか分からないから好き勝手
適当にお召し下され白寿です
じゃじゃ馬の背を適当に捌く婿
適当に生きて卒寿を越えました
適当なあいづちコーヒーが冷める

榎原市 居谷真理子
米子市 成田 雨奇
倉吉市 牧野 芳光
札幌市 三浦 強一
大阪市 近藤 正
堺市 澤井 敏治
西予市 西田美恵子
東大阪市 北村 賢子
八王子市 川名 洋子
大阪市 若本 安代
可児市 板山まみ子
大阪市 榎本 舞夢
西脇市 七反田順子
八尾市 高杉 千歩
大阪市 古今堂蕉子

「適当」 安土 理恵 選

適当な落としどころのない豊洲
新聞を見ながら返事してくれる
適当な車間距離とる嫁姑
A型の血が適当を許さない
適当に笑って済ます物忘れ
適当に刈つていてんか 散髪屋
アバウトに生きてストレス感じない
適当な事は出来ぬと掃除ロボ
適当に遊ばれていたネオン街
長年の勘が働く塩加減
適当に遊んだオトコ削除する
気の張らぬ会ですそこそこのおしゃれ
適当なところで相槌うつっている
適当になんとかなると言った罪
大臣は適当にしか答えない

米子市 生田 和之
和歌山市 倉橋 悦子
枚方市 海老池 洋
高槻市 片山かずお
広島市 岸本 清
三田市 堀 正和
防府市 坂本 加代
高槻市 島田千鶴子
堺市 奥 時雄
和歌山市 磯部 義雄
八幡市 今井万紗子
堺市 矢倉 五月
岡山市 丹下 凱夫
鳥取市 大前 安子
豊中市 藤井 則彦

その辺でおけば笑ってすむ話

A型の夫にB型のわたし

適当で頑張らないを信条に

ちゃらんぼらんだからこんなに長続き

適当にやっているから長続き

適当な距離で二世帯恙無く

甘酒がいい塩梅に仕上がった

板前のお任せ頼む通な客

適当に見えて準備は怠らぬ

適当なお役目らしい汗をかく

適当にやれとは無茶なご命令

適当に聞く損得のない話

適当は好い加減ではありません

適当に階段使い鍛えてる

適当に言った言葉がブーメラン

適当と気楽の界揉めている

適当な広さ畑で流す汗

長年の主婦の勘です目分量

どんぴしゃり秤のような祖母の指

適当を見繕つて旅土産

適当の程が悩ますのしぶくろ

清濁をほどよく飲んで生き上手

ほどほどが判らぬ今のいじめっ子

枚方市 海老池 洋

藤井寺市 太田扶美代

大阪市 長高 俊雄

三田市 谷口 修平

堺市 源田八千代

藤井寺市 鈴木いさお

鳥取市 前田 楓花

南あわじ市 萩原 狸月

豊中市 水野 黒兎

香芝市 大内 朝子

羽曳野市 徳山みつこ

大阪市 升成 好

尾道市 小畑 宣之

シドニー 坂上のり子

神戸市 近藤 勝正

八尾市 前田 紀雄

富田林市 関 よしみ

神戸市 富永 恭子

西宮市 緒方美津子

横浜市 川島 良子

大阪市 津村志華子

高槻市 富田 美義

紀の川市 楠原 富香

適当に見繕うわと言う本気

適当に忘れることも生きる知恵

ほどほどが分らんさかい恨まれる

適当に放し飼いで子を育て

適当に影薄くして生きのびる

バランスを取るため雑魚も入れて置く

適当な距離で二世帯恙無く

やきもちもほどほどに焼きじやれている

適当に相づち打って差し向かい

適当なところで妥協の多数決

チョイチョイとやってしまったツケが来た

適当にやればやったで叱られる

その辺でやめたら太ったりしない

適当に返事してたら町会長

有り合わせ切って炒める男飯

取り敢えず心配すると言っておく

適当に記入しておくアンケート

ママさんはいつもあんじょうしてくれる

じゃじゃ馬の背を適当に捌く婿

適当に家事も遊びもへそくりも

ハイハイとふたつ返事で即却下

適当と言う逃げ口は伏せておく

二者択一に任す哀しい僕の性

大阪市 栃尾 奏子

和歌山市 福井 菜摘

河内長野市 穂口 正子

大阪市 平賀 国和

鳥取県 竹信 照彦

寝屋川市 伊達 郁夫

藤井寺市 鈴木いさお

奈良県 米田 恭昌

奈良県 渡辺 富子

大洲市 花岡 順子

倉吉市 牧野 芳光

弘前市 福士 慕情

奈良市 大久保眞澄

京都市 榊本 宏子

河内長野市 藤塚 克三

大阪市 大治 重信

横浜市 菊地 政勝

奈良市 森中 博一

西脇市 七反田順子

鳥取市 福西 茶子

尾道市 大本 和子

大阪市 津村志華子

男鹿市 伊藤のぶよし

適当に替めて自惚れチェックする

尼崎市 清水久美子

適当に泳いでいない回遊魚

尼崎市 藤井 宏造

気の張らぬ会ですそこそのおしゃれ

堺市 矢倉 五月

適当に三猿こなし丸く住み

和歌山市 福井 菜摘

適当な休み必要キリギリス

高槻市 富田 保子

適当に生きて白寿を目指してる

河内長野市 村上 直樹

私好き便利な言葉適当に

三田市 宗福 清司

好きなのは適当よりもよい加減

奈良市 森中 博一

適当に息抜きしてるシヨッピン

貝塚市 石田ひろ子

適当に見繕うわと言う本気

大阪市 栃尾 奏子

適当にお願いですむ美容室

上尾市 中村 伸子

塩梅がよくてほどよい味になる

和歌山市 北原 昭枝

冷蔵庫整理の時は鍋になる

加西市 金川 宣子

適当な距離でなかよしこよしです

下松市 有海 静枝

アバウトでなんとかうまくやってきた

三田市 上田ひとみ

適当な距離で親子の水入らず

三原市 笹重 耕三

わたし流いい加減ですサシスセソ

松山市 柳田かおる

適当にあしらっておく膳囃り

和歌山市 玉置 当代

アバウトに生きてストレス感しない

防府市 坂本 加代

秀 句

適当にあしらわれてる拉致の壁

鳥取市 永原 昌鼓

炊き出しのサイズまちまち握り飯

河内長野市 中島 一彌

適当な元号数多史記書経

河内長野市 梶原 弘光

適当に要領よくと眼で云われ

唐津市 仁部 四郎

逆らわずわかつた振りして従わず

寝屋川市 岡本 勲

適当にとほけ相づち打っている

和泉市 横山 捷也

処置もせず加齢ですとは殺生な

堺市 坂上 淳司

適当に生きて遣した物がない

紀の川市 楠原 富香

毒舌の毒適当にはぐらかす

島根県 伊藤 寿美

適当な場所にされてる日本基地

鳥取市 中村 金祥

ほどほどに鎧を脱いで駄馬となる

堺市 遠山 唯教

適当もいいな可もなく不可もなく

熊本市 杉野 羅天

貸し借りも無く適当に生きている

米子市 竹村紀の治

日和見で右へ倣えの会議室

神戸市 細川 花門

適当な性格 中庸の徳

八尾市 山川 寧

よくしゃべる私と聞いてないアナタ

佐賀県 真島久美子

適当な護憲政憲アンケート

奈良市 宇賀 史郎

一つヒント掴んだあとは適当に

四條畷市 吉岡 修

適当にされたら困る肝移植

三田市 谷口 修平

センセイと呼んどきや多分大丈夫

橿原市 居谷真理子

適当の基準が違う僕と妻

堺市 澤井 敏治

砂時計の砂は適当では困る

大阪市 木藤こみつ

秀 句

ぴったりの落し所を探り合う

海田市 小谷 小雪

適当に生きて白寿を目指してる

河内長野市 村上 直樹

適当で頑張らないを信条に

大阪市 長高 俊雄

橘高薫風句抄

(橘高薫風川柳句集) 平成十三年発刊

梅の書斎 漱石全集揃えられ

フランス語講座 女優の書架にあり

磊落に笑うて不安かくしとく

東京で遺産が二年とはもたず

東京へ出たら出たらと 若社長

社のホープ オールバックがよく似合い

新生の吸殻もあり 清交社

先代に笑うた写真などはなし

火に熔けぬものなし 五島慶太の計

ことりともさせぬ 数学教授室

三味線も弾ける 大学教授なり

学問の灯は落ち着けり 師走にも

猫の首つかみ 二階を降りてくる

作業衣に折尺さして 隙がなし

級長の欠伸に 教師気がとがり

自衛隊の制服を着て 養子来る

夏祭 男に似合う 豆絞り

一人旅町の祭に行き 合わせ

牧場の柵にもたれている 旅情

木の柵が森に 続いている 牧場

遠泳の雲まで 泳ぐ意気を見せ

海女の墓日は 海に出て 海に没る

囲炉裏での話 来し方ばかりなり

独り身に 魚の骨はさびしすぎ

いい眉に 床屋剃刀 当てずおく

散髪をして 寿司を買う 地下があり

みんな 髭剃ってる 港 近くなり

恐妻家どこか 張子の虎に似る

四人目の 出来るを 晩酌聞かされる

母親を呼んでいる子へ 祖母が来る

「主 張」

(投句 234名)



両 川 洋 々 選

お隣が境界線を譲らない
主張するつもりはないが赤い靴
公海を埋めて領土と言うチャイナ
黙っているのが私の主張です
無記名で主張している投書欄
きっぱりと言いたいことを言ってきた
声高の方へつられて残る悔い
容疑者の主張が激む取調べ
お隣も領土言うてる日本海
老人会まだ走るぞと赤い服
わが国と断固主張の四島だ
もう娑婆へ出たいとママの腹を蹴る
九条は平和の砦守り抜く
薔薇は棘君は無言で主張する
声高な主張の尻が据わらない
口先で主張するから通じない
表情筋が主張しすぎているらしい
追伸にふんわり書いてある主張
主義主張違えど差別ない浪花
全快で豊んだ主張目を覚ます

弘前市	富士	慕情
上尾市	中村	伸子
堺市	坂上	淳司
岡山市	丹下	凱夫
大山市	関本	かつ子
三田市	久保田	千代
大山市	金子	美千代
神戸市	奥澤	洋次郎
豊橋市	藤田	千休
鳥取市	福西	茶子
豊中市	水野	黒兎
高槻市	富田	美義
箕面市	出口	セツ子
熊本県	岩切	康子
岡山市	永見	心咲
生駒市	飛永	ふりこ
沖繩県	森山	文切
高槻市	島田	千鶴子
羽曳野市	中川	ひろ介
那覇市	前川	真

自己主張おやそうかいと聞き流す
ニューハーフの主張も拾うワイドショー
嫉妬とは男偏だと言う都知事
主張は変えないわたしのの中の青
反原発の主張を曲げたことは無い
難民の主張は砲火なき住まい
その主張裏で泣く人居ませんか
主義主張捨てて乱さぬアリの列
人のエゴ地球の主張開き流す
鳥には鳥おれには俺の空がある
靴下の穴から叫ぶ自己主張
主義主張曲げるとオレの影がない
佳 句
匿名でネットを浮遊する主張
本物の背中は何も語らない
遣りあうと人間臭くなる主張
最高裁に市民感覚届かない
嘘も句も七度舌で転がそう
人
天を突く主張青年青かった
地
主張する断頭台が待つキリン
天
反戦と性善説は譲らない
軸
敵は幾万あっても主張曲げられぬ

米子市	成田	雨奇
米子市	生田	和之
三田市	村田	博
藤井寺市	太田	扶美代
鳥取市	岸本	宏章
羽曳野市	徳山	みつこ
高槻市	松岡	篤
三原市	鴨田	昭紀
奈良県	渡辺	富子
三田市	九村	義徳
男鹿市	伊藤	のぶよし
高槻市	原	洋志
下松市	有海	静枝
佐賀県	真島	久美子
鳥取市	夏目	一粋
豊中市	木藤	こみつ
弘前市	高瀬	霜石
青森県	松山	芳生
笠岡市	藤井	智史
羽曳野市	吉村	久仁雄

「あなた」

(投句 232名)

太田 扶美代 選



人いろいろあなたは凛と咲けばいい
 あなたからあなたに変わり色褪せる
 あなたってカメレオンのよう世を泳ぐ
 仲なおあなた好みの肉ジャガで
 君の靴四十四で歩み終え
 返事するまで呼びますよあなた
 生真面目なあなたに合わす微調整
 あなたとの残り時間も後わずか
 血の巡り悪くあなたが震みだす
 私から笑い奪ってあなたが逝く
 天折のあなたの子にも孫五人
 あなたなら分かってくれる同じ傷
 三時にはコーヒーですな供えましょ
 あなたのために光っていたい逝く日まで
 青信号あなた信じていいですか
 あなたならこの難局は越えられる
 信じてるあなたと渡る深い川
 トランプさんあなた一体何者か
 溝埋めてあなたとわたし継続中
 GPSで見つけて降りてきて貴方

池田市 上山 堅坊
 大阪府 米澤 俣子
 生駒市 飛永ふりこ
 宝塚市 田中 章子
 八尾市 山根 妙子
 大阪市 田中ゆみ子
 河内長野市 木見谷孝代
 西予市 黒田 茂代
 高槻市 富田 美義
 和歌山市 土屋起世子
 河内長野市 穂口 正子
 大山市 金子美千代
 堺市 矢倉 五月
 豊中市 松尾美智代
 貝塚市 石田ひろ子
 東大阪市 佐々木満作
 吹田市 須磨 活恵
 宝塚市 太田としお
 大阪市 古今堂蕉子
 羽曳野市 徳山みつこ

値切るにはあなたのかい顔がある
 優しげな声のあなたは要注意
 そして今あなたの視野に浮いている
 平凡と生きたあなたに演技賞
 芽が出たよあなたが蒔いて行った種
 あなたとの暮しに不足ありません
 ホロ酔いのあなたの好きな仕舞風呂
 禁煙が出来たあなたに表彰状
 七色に「あなた」を使い分けて呼ぶ
 母さんはあなた居るから出る度胸
 亡夫より素敵な人に出会わない
 好きでしたあなたのそんな強がり
 佳句
 あなたさえ良ければという妻の拒否
 一円玉あなたの役は超重い
 ゴミ出しはあなたになった定年後
 定年で朝からずっと貴方居る
 おじいさん呼べばふり向くあなた好き
 人
 これからはあなたと呼んでかまへんか
 地
 やさしさはあなたが先にくれました
 天
 果報者私を妻にしたあなた
 軸
 凶と出た人とカレコレ五十年

羽曳野市 吉村久仁雄
 可児市 板山まみ子
 和歌山市 福井 菜摘
 羽曳野市 中川ひろ介
 高槻市 島田千鶴子
 藤井寺市 鈴木いさお
 高槻市 初代 正彦
 米子市 後藤 宏之
 川西市 大坪 一徳
 奈良市 山本 昌代
 下松市 有海 静枝
 大阪市 森 廣子
 米子市 生田 和之
 鳥取市 夏目 一粋
 防府市 坂本 加代
 伊丹市 平井 富夫
 西宮市 緒方美津子
 橿原市 居谷真理子
 倉吉市 岡崎美知江
 奈良市 大久保眞澄

初歩教室

題 — 気楽

居谷 真理子

漢字の誤りが散見されます。大切な作品を世に出すのです、正しい文字で書きましょう。辞書やルーベと仲良くして、知ってるつもり漢字を送り仮名も再度の確認を！

(原は原句 参は参考句です)

原 初歩教室気楽に勉強しています 博一
担当者には嬉しい句ですが、もっとひねってみませんか。

参 気楽だと初歩教室に十五年

原 余生なら気楽にできる途中下車 崇明

参 余生いま気楽にできる途中下車

原 気楽さがとりえの我が家人が来る 治子

参 気楽さがとりえ我が家に人が寄る

原 人任せあんたがええと思うなら 律子

参 任せますあんたがええと思うなら

原 釣り好きの気楽な父も磯で近く 勝治

参 釣り好きの気楽な父は磯で近く

原 ままならぬこの世気楽に乗り切ろう 隆子

参 ままならぬこの世と知れば気は楽に

原 大あくび野良猫主の空き店舗 宏子

参 空き店舗めぐりに猫の大あくび 厚子

原 日めくりの三日遅れも知らん顔

参 日めくりの三日遅れに気付かない

原 預けられ孫は気楽なふりしてる 敬子

参 預かった孫は気楽なふりをする

原 しがらみを捨てた気楽さ今孤独 紀美代

原 気楽さの陰にひそんでいる孤独 正子

気楽で孤独の句は多数。表現に個性を。

参 しがらみを捨てて気楽で淋しくて

参 お気楽に暮らす独りの影引いて

原 年金で暮らす毎日気楽です 英男

参 年金の範囲内なら気楽です

原 太陽と遊び気楽に日向ぼこ 紀美恵

参 お日さんと遊んでいます日向ぼこ

原 気楽です子供は巣立ち趣味暮し ももと

参 気楽です子供は巣立ち趣味もある

原 間もあり自由気儘に生きてても 里子

参 ときに間自由気儘に生きてても

原 お布団はそのままにして宿の部屋 こみつ

参 お布団はそのままでいい宿の朝

原 やめておけ持てたさつかく論吉ゆえ 秀光

言葉を決め込みすぎました。

参 君じゃない持てているのは論吉さん

原 お気楽な旦那が一番幸せよ (高)弥生

参 お気楽でお幸せですダンナ様

原 鼻唄が出て来たきつと気楽顔 くみ子

参 鼻唄が出るほどゆるみきつた顔

原 お気楽に云われて出来ぬ小市民 澄子

参 お気楽にと言われてさらに畏まる

原 三猿と決め気楽な日日と思つたが (大)安子

参 三猿となつても楽な日々は来ず

原 私達極楽とんぼと言われます 義徳

「私達」は夫婦？兄弟？友達同士？

参 夫婦とも極楽とんぼしています

原 助手席で雪の絶景見て気楽 (門)幸子

参 助手席の気楽が褒める雪景色

原 笑顔なら気楽も板に自然つく 開子

参 その笑顔気楽が板についている

原 落ち所決めかね気楽な春の雪 (高)道子

面白い着眼ですね。中八が残念。

参 落ち所決めず春の雪ふわり

原 毎日の日曜飽いて無駄暮打つ

参 毎日が日曜でして無駄暮打つ

原 独り芝居気楽な稼業の婆さん

参 お婆さん気楽な独り芝居して

原 6帖の自室一番気楽です

参 六畳もあつて気楽な私の巢

原 買忘れ気楽に帰り驚いた

参 肝心の物を買忘れて帰り

原 良き妻と母やめてから気楽です

参 良妻と賢母をやめてから気楽

原 老いた今気楽にひ孫相手する

参 毎日の遊び相手はひ孫です

原 我家では妻中心に回つて

参 妻が芯ボクはのんびり回つて

原 貧ですと気楽に言える友がいる

参 貧しさを笑つて言える友がいる

原 くしゃくしゃの涙ふいたらほっとした

参 前半面白いです。下五が弱く感じます。

原 家より気楽な場所はどこも無し

参 どのよりも気楽で家事が待つ我が家

まさる

明子

風露

ミヨノ

知津子

山久子

紀雄

満寿恵

さくら

原 あなたとは気楽に沈黙喜寿の膳

参 喜寿の膳黙つていても通じ合う

原 妻との会話気楽とはいへ疲れます

参 気楽だが妻と話せば疲れます

原 三食昼寝付きまだ夢の夢

参 一つになれば夢の三食昼寝付き

原 気楽です朝から昼寝らしいな

参 楽しいな午前中からする昼寝

原 昼日中一人カラオケ存分に

参 昼日中一人カラオケする身分

原 ワンコイン忍ばせぶらぶら春散歩

参 春の道行くポケットにワンコイン

原 宅配便玄関に付きまどとする

参 玄関に荷物が届くありがたさ

原 口出しやめ気楽な老後至福なり

参 口出しをやめて気楽に年を取り

原 手にうちわ気楽装い火の車

参 左手にうちわと見せて火の車

原 リビングのソファ一独占メロドラマ

参 リビングでソファ一でひとりメロドラマ

原 気楽そに見えて母さん鍾もつ

参 気楽そうに見えても母の持つ鍾

寧

清司

なつみ

廣子

福貴子

勝正

洋一

温子

真

原 ビリオドを打つまで翔んで見る余生

参 ビリオドを打たれるまでは飛ぶつもり

原 気楽だねケセラセラだね風にのる

参 出来上がった句です。「ケセラセラ」は使

い勝手のよい言葉ですが、もうひと工夫。

参 気楽だね今日吹く風に乗つてるね

【佳句】

ブレイム付けて景氣を祈願する

名譽より気楽に生きる道選ぶ

やつと手に入れた気楽が退屈だ

繕うて気楽そうには見せている

子も巢立ち家のローンも終つたし

菜園は出来なくてよし出来てよし

新聞を一日かけて読む暮し

毎日が気楽だなんて冗談

気楽でもないよと金魚ひとり言

飲み仲間いいとこ取りのおつきあい

気楽ではなかったサラリーマン稼業

【今月の推せん句】

高齡期気楽にできるハグ握手

コンビニの弁当で行く花の下

締めつける下着と別れ退職日

梅木 澄空

北原 昭枝

奥田 由美

和之

美枝子

美穂

こずえ

俊雄

前洋子

一彌

恵子

孔一

紀恵

敏昭

紀雄

満寿恵

さくら

原 あなたとは気楽に沈黙喜寿の膳

参 喜寿の膳黙つていても通じ合う

原 妻との会話気楽とはいへ疲れます

参 気楽だが妻と話せば疲れます

原 三食昼寝付きまだ夢の夢

参 一つになれば夢の三食昼寝付き

原 気楽です朝から昼寝らしいな

参 楽しいな午前中からする昼寝

原 昼日中一人カラオケ存分に

参 昼日中一人カラオケする身分

原 ワンコイン忍ばせぶらぶら春散歩

参 春の道行くポケットにワンコイン

原 宅配便玄関に付きまどとする

参 玄関に荷物が届くありがたさ

原 口出しやめ気楽な老後至福なり

参 口出しをやめて気楽に年を取り

原 手にうちわ気楽装い火の車

参 左手にうちわと見せて火の車

原 リビングのソファ一独占メロドラマ

参 リビングでソファ一でひとりメロドラマ

原 気楽そに見えて母さん鍾もつ

参 気楽そうに見えても母の持つ鍾

川柳塔鑑賞

同人吟 川本 畔

— 4月号から

すりガラスとてもずるくてやさしくて

居谷 真理子

はつきりしなくてずるいが、やさしいから憎めない。たまにイライラしてしまいが、やっぱり魅力ある人だ。

西風にふわりと乗って逝った夫

川崎 ひかり

いつも手を振って出ていくのにどうして？涙がとめどなく流れる。あの日は西風だったのね！ああ……。

水たまり飛べるとふんだのは誤算

中居 善信

齢を考えずについていくことね。私、佐渡へ旅をした時、水たまりが跳べなくて当時八十八歳の姑に笑われたのよ。

白線を引き私のテリトリ

川名 洋子

他人にわからぬようにやりましよう。テリトリは、心の中のとつても大切な部分、しっかり守ってね。

すっぴんをさらせばきつと愛される

みんなが愛してくれる。特に貴女をよく知っている人程ね！思い切って脱いでやりなさい。

中井 アキ

子には父孫には爺々の顔になる

鈴木 いさお

二十面相ね、それで威厳が保たれるものね。中々それが難しいから大変なのよね。思い切り挑戦しようね。

病院へ行こうおシャレをして行こう

紫 しめの

思いっきりお医者さんに恋をしよう。それがおシャレの一番近道ね。

追いかけた夢あきらめて降りる駅

三宅 満子

あきらめるなんてしないで……。夢は最後まで抱きしめていて！きつと思いがけぬ好転があると信じている。最後までね。

賑わいて何か足りない同窓会

大治 重信

若さが失われているのね。そして、昔の恋人が欠席？彷彿と湧いてくる昔に酔ってみることね。そして空気をドラマチックにすること。皆が寄ってくることに間違いなし。

春ですねちよつとおしゃれをしませんか

川端 一步

同感！そして一步先生と菜の花の土手を腕を組んで歩きたし。

素直とは心の中の身だしなみ

津村 志華子

とってもいい句ね。少なからず教えられました。すんなりと受け入れられる、しかも上品さもあつて……。

吊るし柿古里ふつと思ひ出す

内藤 憲彦

泣けてきました。平素、多忙に紛れてゆつくりと古里に想いを馳せることのない日常、吊るし柿は好きではないが軒下のその風情が何とも言えぬなつかしい。

つい触れた喪服の妻の手の温さ

村上 直樹

血流が全身へみなぎっている温もりは生きている証し、しかも人間の死という重大な局面、妻の手の温もりがすべてを物語っている。

ポケットに何でもあつたお母さん

岩 佐 ダン吉

母の存在はあまりにも大きい。それをポケットに一まとめにした作者の知恵に驚くばかりだ。

会いたくて会いたくなくて揺れる章

山 本 希久子

複雑な過去がありそう……。いろいろな想像出来て一本の草が次第に輝いてきた。

ちゃんと名前を覚えて貰い好きになる

片 山 かずお

たしかに私も経験がある。それで嫌いになる人、無頓着な者は誰もいない。

磨かないガラスでちょうどいい暮らし

原 洋 志

納得。気楽に暮らしたい。気遣いのある暮らしはもう過ぎ去っていいですね。

役員も家に帰れば妻の部下

肥 山 一 文

賢明なるお父さま。味のある役者と言ふべきですね。

フレッシユな自分作りにまだ夢中

松 井 文 香

若い作者なのね。心身共に……夢中とはうらやましさを通過してうらめしい……

君をみた時から止まぬ不整脈

穂 谷 和 郎

よくわかります。寝ても起きてもちらく君、正常になるのはいつかしら？

付き合いても人肌ほどが丁度よい

谷 口 修 平

人肌とは憎い表現、それが又現実には難問ね。

隕石は原発避けて落ちるはず

福 田 好 文

そのはずだと私も思う。どうか神様そへはすずすね。

雪が舞う淡い思い出などのせて

西 口 いわゑ

春の淡雪かもね。いい感じ……私の庭の亡母の句碑にもチラチラと思ひ出が舞う。

貫禄はあるが貧乏揺すりする

柏 原 夕 胡

良いか悪い癖かは判らない。良いとすれば自分の気持を人に納得してもらいたい形、揺するたび積もりつもって益々貫録を大にする。

立ち話影がゆつくり伸びていく

楠 見 章 子

立ち話もホドホドに。夕暮れ時、豆腐一丁手に乗せて立ち話、その奥さんの姿を見ると私は遠回りして急ぎ足で帰ったわ。

沈丁花遠い国から母が来る

宮 崎 シマ子

巡りくる季節、毎年母を忘れることはない。沈丁花の香、個性的で上品で香りは無言の言葉となる。

逃げはせぬ私はずっと此所にいる

松 本 文 子

真実、この句のとおり賢明で強い人だ。この強さはどこからきているのだろう。私はこの強さを川柳界で目標にして生きてきている。

芽吹くもの皆美しい春の風

津 守 なぎさ

よく見れば狭庭の枝に芽生えるものがある。道ですれ違ふ子等も芽吹き香を風に撒き散らしている。自然界に生きる万物の命すべてが、嬉しい美しさを提供してくれている。

さりげなく世辞をまぶして受けがいい

吉 村 久仁雄

自身のこと？他人の様子を詠んだとしても中々巧妙な表現「世辞をまぶす」に魅せられる句だ。

又、自然体の雰囲気もよくわかる。世順れた人の様子が写し出された一句である。

水煙抄鑑賞

— 4月号から

中原 比呂志

いつもとは違う道行くこれも旅

中村 伸子

いつもの内回り電車を外回りで行けば
行先は同じでも景色が逆になります。人
生の旅も違う道を行くことによつて新発
見があること間違いないでしょう。

春はあけぼの今日も予定がたとある

田中 ゆみ子

三寒四温のリズムが狂わされて越した
この冬。春を待ちかねて予定表が埋まり
ます。句会、福祉会、ボランティアなど
頑張っている高齢者が多くおられます。

堂々と嘘言えるのも武器と知る

高橋 敬子

自分の不利を隠し、嘘でも相手の弱点を
攻撃するのが論争や喧嘩で身を守るテク
ニクスのひとつです。国有地安価払い下げ
問題は誰かが嘘の武器を使っています。

てにをはを変えたら謎がとけました

岡崎 美知江

一字違いが大違いとよく言われます。
この句の場合、漢字の「解け」が良かつ
たように私は思いました。平仮名表記か
漢字表記かでイメージも変わります。

てにをはのあはぬ 悔みとなりにつけり
路郎先生の句があります。

変わる世に変わらぬ味のおでん炊く

畑中 節子

まさかコンビニでおでんを売るとは思
いもよらなかつた変化の激しい時代です。
でも、じっくり煮込んだ母の味はやはり
ありがたく美味しいものです。

すつきりと片付けすぎてさがし物

近藤 治子

断捨離で整理したとの句がよくありま
すが、整理しすぎて物捜しをするサザエ
さんのような奥さんの姿を連想しました。

吾が神器入歯補聴器老眼鏡

永田 紀恵

これもユーモアの句ですね。三種の神
器とは森友幼稚園以外の若者は知らない
でしょう。あえて「吾が」の旧文字を使
用されているのだろうと感心しました。

めんどりにノルマは重い日に一個

森 廣子

狭いケージに声を出さぬよう声帯を切
除された鶏に与えられたノルマです。過
労死を世界共通語にした恥ずかしい日本
の労働条件を痛烈に批判した句と拝見し
ました。もうケツコーと声を上げねば。

聴こつかな黙つてよかな迷い箸

川島 良子

気にかかる相手の行動を聞きだした
いのだが口火が切れないひと時です。悶々
としながら無口の食事が続きます。

真ん中はどうも落ち着かないわたし

柳田 かおる

写真撮影の前列、真ん中あたりでしよ
うか。それともアンケートの賛成・反対、
どちらともいえない、の宙ぶらりんの立
ち位置なのでしょうか。信念を持てばど
の位置であっても恥ずかしくありません。

俳人が詩人が窓を開け放つ

真島 久美子

思考中の部屋は灰色で空気の圧迫感が
強く感じます。開け放った窓際で思い切
り春の息吹を深呼吸すれば気分一新、よ
いアイデアが閃くことでしよう。



買い物詠う (2)

百円均一ショップが現れたのは三十数年前ですが、今では大手4社である「ダイソー」「セリア」「ワッツ」「キャンドウ」の店舗だけでも五千五百を超えているとのこと。

その品揃えは目移りがするほど豊富で「これが百円！」と驚かされるものが沢山あります。人件費の安い海外で製造しているのですが、ボールペンなどはすぐに書けなくなったりします。やはり高度な技術が要るものなどは、外見だけで「安い！」と飛びつかないほうが良さそうです。

ダイソーもセリアも孫の百貨店

百均の器に百円のみ

百円だ花もパンツも大根も

百均へパンツのゴムを買いに行く

我が茶碗犬とおなじ百円で

百円の眼鏡もレンズ二枚ある

百均のうちに貰う亡母の風

百均のひとつ買うにも迷ってる

親にねだらなくても自分のお小遣いで買える物が出来るので「百円ショップ」は子供たちにとってデパートや遊園地のような感覚でしょうか。しかし、安いからと言って浪費癖がついたら大変です。しっかり手綱を締めてやりましょう。

器が百円ならツマミも百円。パンツもパンツのゴムも、お茶碗も眼鏡もウチワも百円。だが、昔から身に付いた「節約精神」は、百円玉ひとつでも慎重になつてしまします。

バソコンの前に坐つてお買い物
クリックボんしたら届いた衝動買い

通販のカタログ美人多すぎる

通販で似合うつもり服を買う

通販で靴は買わない慎重派

通販の「なんと」と「更に」にのせられた

最近ぐんぐん売り上げを伸ばしているのが、テレビやインターネット、そしてカタログを通じての通信販売です。宅配業者が悲鳴を上げて、遂に値上げに踏み切ったとのこと。

お茶の間でくつろぎながら買える物が出来るのも通販の魅力ですが、現物を試着できないのが難点です。衣服の着心地や靴の履き心地などの微妙な感覚は身に付けないと分かりませんので、避けたほうが賢明かもしれません。

自販機で抵抗もなく水を買う

自販機のスーが主婦の味方する

自販機でさえも御礼を言っている

自販機がしゃべる見事な日本語

自販機は不便な押し間違える

返品はできない自販販売機

自動販売機が一番多いのはアメリカですが、人口や国土面積などを勘案した普及率では日本がトップです、その主な要因は「治安が良い」「都市の人口密度」「優れた技術」等々。無機質な機械に金を入れるだけの行為を「買い物」の範疇に入れるには抵抗がありますが、最近では「ありがとうございます！」や「まいどおきに！」と言ってくれるものもあり。そのうちに交換や返品にも応じてくれるようになる？かも？

木藤 明子

宇都宮うつる

渡辺 富子

橋田 滝

興津 幸代

鈴木登久子

牧野 芳光

米田 恭昌

福士 慕情

竹村紀の治

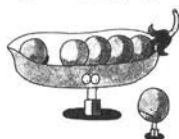
市坪 武臣

山本 修



(投句222名)

世間はお花見に浮かれています季節ですが、近隣の国のキナ臭いニュースが流れてもいます。



桜前線は今どこか、などという和やかな話題がトッブニュースで扱われるような平和が続くことを祈るばかりです。

どのような時代にあつても川柳と向き合ってきた先人達に習つて、今回もナビ、生きましよう。

では、よろしくお願い致します。

山頂へ駆けるか海へ転げるか

(評)二つしか方法が無いとすれば、どちらを選ぶべきなのでしょう。山も海も何だか厳しそう。

待望のスーパーマンはまだ来ない

(評)今の世の中に蔓延する巨悪をやつつ

篠山市 酒井 真由

けてくれる、そんなスーパーマンを待ち望んでいる人はきつと多いはず。

忘れましたか爆弾も原発も

(評)日本人は戦争などでひどい目にあつても、すぐに忘れてしまう民族らしいのです。とんでもないことです。

春詰めて女子会ひらく花の下

(評)賑やかで華やかな笑い声が聞こえて来るようですね。女子会の平均年齢はですって、聞かないで下さい。

ぬるま湯を抜けたら僕の新世界

(評)自分を慈しんでくれた家族や、環境から離れて知る現実。でも、若者のパワーは怖いもの無し。

有り余る資産を隠しお友達

(評)お友達は生活レベルなどの釣り合いが大事なのでしょう。意外と関係無かつたりして。

ゴメンナサイひとり遊びがしたくつて

(評)ついつい、群れから離れて単独行動がとりたくなってしまうのですね。でも、誰だつてありますよ、そんな時が。

貸し借りは茶飯事仲の良い長屋

(評)昔、長屋は大きな一つの家族のよう

青森県 松山 芳生

大阪府 石橋 直子

大阪府 花岡 順子

大阪市 坂 裕之

奈良市 山本 昌代

明石市 桃谷 和郎

だったそうですね。米を借りたり味噌を借りたり、余所の子だつて叱りました。

デザートと並べ女の骨を抜く

(評)うーん、これは痛いところを突かれました。季節限定、なんてデザートに女はチョー弱いですからねえ。

途中下車やはりあの子に会いたくて

(評)あの子、という言い方、可愛いくていいですね。会いたくなる理由が少しだけ分かるように思えます。

うきうきと春の音符が弾み出す

テーマパーク新種の遊具あるらしい

お使いに出た子 wait っている夕餉

家を出て気付く家族のあたたかみ

難民に紛れて潜むテロリスト

どこも満員プレミアムフライデー

三手先読んだイモ虫生き残る

人間は勝手奇数にこだわって

八尾市 前田 紀雄

神戸市 能勢 利子

大阪市 岩本 安代

宝塚市 田中 章子

堺市 矢倉 五月

香芝市 大内 朝子

三田市 村田 博

堺市 内藤 憲彦

高瀬 霜石

石谷美恵子

奈良市 大久保真澄

穴埋めに来ましたボクでよろしいか

米子市 八木 千代

肩寄せて春のコーパス始まった

尾崎市 清水久美子

戦力外通告に泣く木の芽時

鳥取市 夏目 一粹

神さまを想い純粹無垢になる

西宮市 亀岡 哲子

やっとこさ保育所ひとつ空きました

大阪市 藤田 武人

オシャレしてそよ風待っている私

札幌市 三浦 強一

虫食いもあるがわが家の無農薬

三田市 尾崎 一子

デザートをつまみ食いしたおばあちゃん

鳥取県 竹信 照彦

縁の下に鶏飼っていた昭和

神戸市 上田 和宏

物言いの結果をじっと待っている

八尾市 山川 寧

泣かないできつと見つかる王子様

大阪市 柴本はつは

どんぶらこ浮いて見たいな春だもの

尾崎市 藤岡 りこ

母のこと心配せずにさあお行き

河内長野市 山岡富美子

方舟が満席ですと囁いた

枚方市 小林 わこ

足りないわたった一円どうしよう

熊本市 杉野 羅天

隠すに隠せない前歯抜けました

鳥取県 斉尾くにこ

どちら様ですかと訊いたダイア婚

和歌山市 楠見 章子

鮮やかなラインダンスの足さばき

高槻市 初代 正彦

タコ焼き君洒落たお皿に上機嫌

羽曳野市 吉村久仁雄

豆ごはん旬の元気を噛みしめる

貝塚市 石田ひろ子

スマップの後僕達の出番です

箕面市 出口セツ子

デザートのように愛されたいナスビ

大阪市 大治 重信

ほんとうはこのまま寝たい三次会

鳥取市 土橋 螢

健やかに米寿迎えることにする

八王子市 川名 洋子

早朝の鼻歌も出る露天風呂

佐賀市 真島久美子

他所の子もおいで十七音の春

三原市 笹重 耕三

轍から外れてストレスが細る

松江市 石橋 芳山

枝折れてしまった俺の進化の木

和歌山市 磯部 義雄

難民の船よ何とか辿り着け

岡山市 永見 心咲

方舟もセウオル号にも乗りとこない

青森市 守田 啓子

春だものぽこんぽこんと弾けます

唐津市 山口 高明

おれ独り居ずとも地球自転する

奈良市 谷川 憲

フォアグラも食べ飽きたのでお新香

江南市 脇田 雅美

熱すぎる温泉たまご剥きにくい

東京都 川本真理子

はみだしたのではないとびだしたのだ

男鹿市 伊藤のぶよし

何処だつて一人は居るさ天邪鬼

河内長野市 梶原 弘光

盛り付けは上手いですねとほめられる

四条畷市 吉岡 修

また一人トランプ陣を降りてゆく

神戸市 山口 光久

参観日晴れ着のママが目立ちすぎ

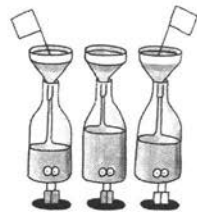
三田市 堀 正和

自分用先ずは一個を確保する

豊中市 松尾美智代

ブローチからひとつ零れた真珠玉

7月号発表
(5月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句



追悼

叮紅さんを偲ぶ

竹 治 ちかし

「いずも川柳」の新年号の諸家近詠欄に、先生が載っていなかったことで、私はお叱りを受けていました。実は先生が年末に入院されていて連絡はしたのですが、なかなか句を送って頂けず三月号には必ず載せなくてはと思い、電話を致しました。ところが電話が一向に通じず、どうしたものかと案じていた矢先、突然先生の訃報の連絡が入り、とても驚きました。

思い返せば昭和四十三年九月、今まで休眠していた「まつえ川柳会」を、七人の侍と自ら称し、また呼ばれていた七人の仲間（岡崎祥月、吉岡通児、中川晃男、舟木与根一、小林狐呂二、柳楽鶴丸、恒松叮紅）と共に興し復刊されました。

私の手元にある島根県川柳史（山根梟人著）の一節には、「七人の侍」と自らが称するだけあって、少人数ではあるけれどもスクラムは堅く、その七人により「巻

頭を斬る」と題して連載した「川柳塔」の巻頭作家に対する合評は、異色の企画として、多くの人の関心と呼んだ、と記載されています。

そしてある時の川柳塔まつりには、七人の侍が揃いの法被を着て、大阪へ乗り込んだという話はあまりにも有名で、今でも武勇伝として語り草になって居ると聞いています。揃いのユニフォームを着ることは今ではごく普通の事ですが、その当時では驚きの眼で見られたことでしょう。そんなに元気の良かった七人も、その後、時の経過と共に一人消え一人亡くなりとなりましたが、最後まで残って常に中心となり守り続けて来られました。その間には県川柳界におきましても、重鎮として、また生き字引として尽くされ、その功績は偉大なものでした。私も時折ご自宅へお邪魔させて頂き、御教示を仰

いでいました。先生は私に「川柳は色紙に書いて玄関に飾っておけるような句を作れ」とも教えてくれました。また一人、島根の偉大な先生が亡くなられたということは、とても残念で淋しく思います。ご冥福をお祈り致します。

合掌

二月十四日逝去 享年九十三

ここに叮紅句画集「愛たしか」よりいくつかの句を載せまして、在りし日の先生を偲びたいと思います。

愛たしか湯吞みが二つ置いてある
肉食と菜食別居して平和
庭石にすえると見える裏表
恙なき幸せ朝へ出す急須
ぐうたらとこまめで丁度いい夫婦
美しく老いるつもりの方が曲がり
宍道湖の夕日他国で自慢する
どこからかカレーが匂う青い空
しきたりを言うから男嫌われる
酔いざめの水幸せが喉へ来る
休肝日空念仏ののど仏
大学を出てから継ぐ気のない田圃
正直な夫婦でいつも残がない
酒一合やたら電話がしたくなる



追悼

瑞枝さん さようなら

八木千代

街を閉ざすほど降りに降った大雪が氷雨に変わった一月三十日の午前十一時四分、林瑞枝さんは永眠されました。享年九十一でした。

その日の夕方、大雨の中を迎えに来て下さった政岡日枝子さんに庇われるようにして、お別れに向かいました。震えながらお香を供え、その手で瑞枝さんの頬を擦りながら、私には悲しみよりも羨ましい思いがこみ上げてきました。

確かに指先からは凍りつくような冷気が伝わってくるのですが。前々日までには食事も摂られていて、うたた寝のつづきにひよいと境界を跨いだようなその死顔に掌を置いたまま、私は不思議な感動に打たれていました。

瑞枝さんは西伯郡淀江町（現米子市）のお生まれです。全国でも有名な和傘の産地として知られています。

ふるさとに傘の花咲く絵が消えぬ

句集「傘の浜」を一九九二年に出されています。句碑は三基、大山麓の報恩峠、神田ヶ丘、そして岡山の弓削にあります。

川柳生活は華やかだったと思います。五十五年前、この部屋に四人の女性が集まりました。石垣花子、佐伯越子、林瑞枝、そして私。女性ばかりを条件とする「きやらばく川柳会」の船出です。みんな、みんな若かったのです。ガリ版を切って、カットも手描きしての句報。青いインクの滲みも初々しく、文庫本よりも手帖に近い第一号でした。

やがて川柳塔の誌友になって、心斎橋大成閣での新年おめでとう会、大万川柳、夜市川柳大会などに参加。何度も八尾の西尾葉先生のご自宅にも伺いました。

瑞枝さんとはもとと行動的な方です。ご主人の林荒介さんが「きやらばく」の事務局を引き受けられてからは、鹿野みか月川柳会はじめ鳥取県内の月例会には、

殆ど、出雲、松江、木次、太田、浜田と。金築雨学さん主宰の「風の会」メンバーとして活躍されていました。とにかく西日本の会にはすべてと言っていいほど、ご夫妻の川柳行脚は続けられました。寿命のかぎり川柳と共に歩まれた方でした。その陰に長女の恵さんを軸にしたご家族の並々ならぬご支援があったことは、否めない実情でもありました。

平然とさえ見えた瑞枝さんの旅立ちでしたが、たぶん暗がりの見も知らぬ道をたった一人で辿られるかと思いますと、私も一緒に淋しくなるのです。「一刻も早く荒介さんに見つけてもらいたいなさいね」「瑞枝さん、ずっと忘れないから・・・」とも。そう呟くことがあの人へのご供養であり、またも死に遅れた私の心の救いなのかも・・・と思われるのです。

さようなら、瑞枝さん。 合掌

林 瑞枝 遺句抄

想い出の跡しみじみと掃いて拭き
考える草の孤独をいとおしむ
ときどきは夢の鞍替えして遊ぶ
旅をして聖書が少うしだけ解ける
藍を着ておんなが挑む詩の宴
じゃが芋の花におとこの慈悲を見た
ブランコの二人幾何学的に揺れ
ふと染まる耳のうしろにある花野

第五回 春の川柳塔まつり誌上大会

第五回春の川柳塔まつり誌上大会に際し、北は北海道から沖縄まで700名のご参加、ご支援を戴きました。また貴重な誌面に誌上大会要領をご案内、ご掲載賜りました各川柳社、個人的にそれぞれご紹介くださいました皆様のご厚情に、心よりお礼を申し上げます。

ご投句戴きました作品は、無記名の句箋のまま六人の選者にお送りし、選句をお願い致しました。お忙しい中をご選句戴きました選者の皆さまに深く感謝申し上げます。 入選作品は各題とも平拔 111句、秀句 10句、特選 2句、計 122句です。なお、各題特選にはささやかですが賞品をお送りいたしました。

今後とも皆さま方のご健吟とご活躍を祈って止みません。有り難うございました。

各 題 特 選 句

雑 詠	書 く	友
小 島 蘭 幸 選 裏口へ廻ると春が佇っていた 愛は愛はと千本ノック受けている 和歌山 木本 朱夏 大阪 平井美智子	植 野 美津江 選 澄んでくるまではひたすら浮いている 介護終了両の手に風が吹く 和歌山 小谷 小雪 広島 田辺与志魚 新 家 完 司 選 定年と書いて吹雪の中である エンディングノートを書いてジム通い 島根 石橋 芳山 愛知 金子美千代	長 島 敏 子 選 友情は男結びの固結び 葉桜もすてたもんじゃあない友よ 大阪 井澤 壽峰 青森 高瀬 霜石 高 瀬 霜 石 選 湯たんぽはたった一人のお友だち 入院をするたび友達がふえる 岡山 目賀 和子 大阪 山本希久子 平 田 朝 子 選 諦めはしないと結ぶ鬨病記 親心しのばせ遺書の封をする 大阪 平井美智子 大阪 古今堂蕉子

友

長島敏子選

ほつこりと幼なじみという響き
友達はたった一人だが阿吽
喪の友へ春をこぼさぬよう送る
友情のしるし私も鶴を折る
胸キュンになった呼び鈴押してから
酒は友酒は私を裏切らぬ
アホやなど許してくれてからの友
猫が来て程良い距離の友となる
友のいた家に売家の旗が立つ
メロスには到底なれぬ だがしかし
信じるっていいな友だちすぐできる
クラス会リングの唄の世に戻る
旧友の名が新聞の隅にある
ふと弱音もらした日から無二の友
友達は四、五人程で恙無い
あの世にも川柳好きな友がいる

兵庫 上田ひとみ
大阪 土田 欣之
大阪 森中恵美子
鳥取 前田 楓花
鳥取 福西 茶子
大阪 藤井満州夫
兵庫 堀 正和
沖縄 前川 真
大阪 前原 正美
青森 稲見 則彦
愛知 眞島 知恵
岡山 白髪 道子
三重 橋倉久美子
兵庫 澁谷さくら
広島 岩本 笑子
大阪 三好 専平

親友でも譲れぬ恋のカーリング
友が逝き碁盤はボツリ部屋の隅
敗戦を知らずに眠る友の墓
友情が壊されてゆく棒グラフ
無職には無職の友が居てくれる
桜咲く頃に会おうと決めた友
友見舞うアルバム二冊携えて
パーセント如何ほどあれば友ですか
友達はみんな出世をしていない
草いきれそう友達のままできた
病院と施設が友の様に建つ
悪友の見舞のバラに棘がない
友達になろうと投げる石礫
友達範囲はみんなアナログ派
ペンパルの今年も熱いラブコール
ひとり者同志安否を確かめる
アリバイに使われやすい友である
虹の橋友の指切り忘れない
友達と喧嘩した日のいわし雲
さくら舞う無沙汰の友を案じつつ
湯たんぽはたった一人のお友だち
余生という新たな友が一人増え

静岡 瀧 進
岡山 高杉 究作
大阪 福田 和子
大阪 川端 一步
奈良 久田年須美
鳥取 岸本 孝子
大阪 嶋澤喜八郎
青森 阿部 治幸
鳥取 牧野 芳光
奈良 太田のりこ
岡山 高橋由紀女
大阪 伊達 郁夫
大阪 森田 旅人
鳥取 森山 盛桜
兵庫 嵯峨里かはる
大阪 木藤こみつ
神奈川 菊地 良雄
京都 今井万紗子
大阪 太田扶美代
京都 山本 昌乃
岡山 目賀 和子
京都 今井 弘之

本当の敵は仲間の顔をする

希望という友を持たねば生きられぬ

バカヤロー友の本気に救われる

誰よりも酒が一番長い友

年一度声の賀状をよこす友

酔っぱらうと電話魔になる友がいる

お互いに点滴連れて語る友

答えより黙って聞いてくれる友

友の名がわからないまま小半時

ケイタイがまるで友達電車内

悪口は言わない友で居たいから

離婚した友の勇気が羨まし

生きて今痛み分けあう友がいる

柳友という友があり夢があり

悪友の一人で酒という名前

だんだんと昭和を語る友の減り

友達友達輪から和の連鎖

着飾ってデイサービスで友と会う

友だちの友だち温い輪になった

友達で片付けられる恋ばかり

心の友だ健さんも裕ちゃんも

友達になろう片割れ月同士

奈良 笹倉 良一

奈良 土井 京子

石川 藤村 容子

大阪 吉岡 修

奈良 松田 吉子

大阪 村上 玄也

岡山 丸橋 野蒜

大阪 若本 安代

京都 西村 益子

大阪 宇都満知子

兵庫 こまつてるえ

山口 平田 実男

兵庫 大黒 政子

岡山 国塩志保里

奈良 居谷真理子

大阪 石田ひろ子

大阪 荻野 浩子

大阪 木見谷孝代

奈良 松本 柊子

静岡 馬淵よし子

大阪 鈴木いさお

広島 大森 昭恵

友だちのままならずとつきあえた

友達に何匹もいるキリギリス

悪友の誘いやつかいでも感謝

友の計が五臓の中を掻き回す

野も山も友達だったふるさとよ

友達が教えてくれた僕の癖

いのち水友の情けが身にしみる

心友の萬年筆が知る秘密

泥水も一緒に飲むと決めた友

春一番逢いたい友の風便り

友の計に我が身の余命考える

気の置けぬ友で心のカギ外す

戦友はつくりたくないくらせぬ

山彦を友に暮らして過疎の母

フェイスブック虚しい友の数我慢

友の声聞いたら脱いでいる鎧

恋人と呼ぶ友達と呼ぶ狡いひと

まっ白な友からもう疲労感

クラス会友は良い歳重ねてた

そよ風もたんばも友侘住い

切碓琢磨ライバルという友がいる

呑み明かすつもりでやって来い友よ

宮城 庄子さゆり

和歌山 川上 大輪

大阪 穂口 正子

愛知 南 いづみ

兵庫 西口いわゑ

鳥取 岸本 宏章

兵庫 井上じろう

大阪 山根 妙子

大阪 矢倉 五月

兵庫 藤田 雪菜

大阪 雪本 珠子

静岡 川村美智代

大阪 上嶋 幸雀

徳島 黒田るみ子

大阪 高杉 力

和歌山 楠原 富香

岡山 木下 草風

栃木 荻原鹿声

大阪 中川ひろ介

大阪 松尾美智代

愛知 浅井 典子

大阪 藤村 亜成

逆流にたった一人の温い友

友達がぎょうさんできた医者通い

親友の顔して風が肩を組む

ノックなどいらぬ心の友がいる

友だちが欲しい月夜の影法師

ゆずれない恋愛友情が邪魔になり

級友に逢うとあの日の顔になる

あの刻の友は戦にいったまま

貧乏神友の顔してやってくる

生涯の友は川柳です わたし

アミーゴと紹介されてから意識

ありがたい友の火加減水加減

成せば成る励め励めと友が言う

十余年友達以上恋未満

黒電話親は子の友知っていた

またひとり婚活組を抜けました

薬という一生涯の友ができ

飲み仲間医者と坊主がいてほしい

ゆつたりと友にあずけている尻尾

知らぬ間にガンという名のお友達

相棒に猫でも飼ってみようかな

走れメロス友情という重きもの

大阪 山野寿之

大阪 岡 本 勲

京都 赤松螢子

福井 伊藤良一

和歌山 木本朱夏

鳥取 石谷美恵子

鳥根 加本精一

鳥根 松本はるみ

大阪 原田すみ子

愛媛 黒田茂代

岡山 永見心咲

岡山 鴨田昭紀

岡山 小野美那子

静岡 佐野由利子

兵庫 山端なつみ

大阪 美馬りゆうこ

大阪 荒木郁子

大阪 森松まつお

岡山 奥田佳子

大阪 西澤司郎

大阪 池之上教子

兵庫 みぎわはな

財産は持たぬが友という宝

湯タンボのような友です宝です

友情を戻す一夜の箸二膳

人恋し会う人すべて友に見え

無二の友亡くして昭和遠くなる

友人もお一人様が多くなり

秀句

友達が集いまつりになつてゆく

友と酌む酒は桜の下がいい

スーパ一の袋が似合う友がいる

友だちが笑った梅が咲きだした

友だから会えば反発してしまう

悪友も俺とおんなじ寂しがり

長生きのつかえ棒は友らしい

友情は木綿豆腐の味がよい

お互いを頼つただらうタロとジロ

友達が100人入るランドセル

特選

友情は男結びの固結び

葉桜もすてたもんじゃあない友よ

軸吟

これも縁一会の友と組むタッグ

広島 飛田陽子

香川 川崎ひかり

兵庫 中島憲三

奈良 安福和夫

大阪 川本 信子

大阪 大浦 初音

鳥取 倉益一瑤

青森 福士慕情

奈良 西澤知子

大阪 赤松ますみ

鳥取 大前安子

静岡 山本野次馬

和歌山 小谷小雪

大阪 西出楓楽

和歌山 山東日出男

東京 山田こいし

大阪 井澤 壽峰

青森 高瀬 霜石

兵庫 長島 敏子

友

高瀬霜石選

尖がった友をふんわり包み込む

俺お前飲めば二十歳の雲が湧く

友だちも一緒に落ちた落とし穴

ちよい悪の友に最後は助けられ

梅干しのような友ですたじろかぬ

友達が増える薬を飲んでる

用事一お喋り九の茶飲み友

冤罪の友の証言台に立つ

日溜りの友に温めてもらう

酔っぱらうと電話魔になる友がいる

山彦を友に暮らして過疎の母

メル友を増やして世界漫遊記

友達が本をなかなか返さない

友達と塀作ったりこわしたり

反り合わぬ友が思わぬ助け船

友だちになってください未来たち

奈良 菱木 誠

大阪 村上 直樹

三重 吉崎 柳歩

兵庫 梅澤 盛夫

岡山 田中 恵

沖縄 森山 文切

愛知 彦坂 石転

愛知 沢田 正司

三重 小河 柳女

大阪 村上 玄也

徳島 黒田るみ子

岡山 山崎三千代

奈良 牧浦 完次

島根 岸 桂子

広島 村田 幸夫

北海道 高橋みのる

夕焼け小やけ歌うとみんな友となり
筆マメな友の賀状が届かぬが

ともだちをいっぱいもっている傘寿
そよ風もたんばも友侘び住い

許そうか友達だから怒ろうか

まだ生きていたかと一升瓶が来る

友だちは友だちのままかたつむり

天国の方が賑やかああ友よ

あの刻の友は戦にいったまま

チョコの山もらった友に嫉妬する

友だちと飲んで発酵ばかりする

悪友の見舞のバラに棘がない

親友という手鏡で覗かれる

居酒屋の隅に友との指定席

腹割って話せる雲と友になる

友達を見つけたように猫拾う

飲めるかと一本さげて友が来る

友だちが桜の下に立っている

バカヤロー友の本気に救われる

友達は大事香典くれるから

AIという親友が付いてくれ

友の持つプラスをいただいて生きる

大阪 針生 和代

鳥取 山下 節子

大阪 土田 欣之

大阪 松尾美智代

京都 藤井 文代

茨城 櫻村 日華

青森 赤平くみこ

広島 村上 和子

島根 松本はるみ

静岡 今田 久帆

愛知 高柳 閑雲

大阪 伊達 郁夫

福井 中村 吉範

岡山 高杉 究作

奈良 渡辺 富子

沖縄 真栄城千矢子

兵庫 奥澤洋次郎

大阪 谷口 義

石川 藤村 容子

鳥取 大倉 孝二

佐賀 西村 正紘

熊本 徳丸 浩二

友達をいっぱい作る丸い鼻
友情が壊されてゆく棒グラフ
SとNだから仲良くなった友
縄のれんいつもの席に友がいる
雨降れば傘差しかける友がいる
悪友が憎まれ口を言う見舞い
友ゆえに言えないことがひとつあり
あの人から見れば親友なのかしら
妻の留守今日も悪友呼びに来る
悪友も毒気が抜けてきて米寿
友情は木綿豆腐の味がよい
あほやなど叱ってくれる友がいる
字余りでまとめきれない友ばかり
バッテリー切れそうだから友に逢う
友達の範囲はみんなアナログ派
こっそりと梯子を掛けてくれた友
本当の敵は仲間の顔をする
プロポーズできずに友達で終わる
無職には無職の友が居てくれる
出世した友の悩みを聞いている
デコボコの道で支えてくれた友
口裏を合わせた友に蕎麦おごる

鳥取 両川 無限
大阪 川端 一步
山梨 加藤 一郎
大阪 杉本 義昭
熊本 中原たかお
愛媛 花岡 順子
埼玉 根岸 方子
埼玉 中村 伸子
京都 今井万紗子
京都 都倉 求芽
大阪 西出 楓楽
大阪 高杉 力
岡山 小野美那子
鳥取 細田 裕花
鳥取 森山 盛桜
愛媛 郷田 みや
奈良 笹倉 良一
大阪 都 武志
奈良 久田年須美
兵庫 西口いわゑ
和歌山 北原 昭枝
大阪 原 洋志

故郷の友と名乗ればきつと詐欺
友と酌む酒は桜の下がいい
友達で片付けられる恋ばかり
離婚した友の勇気が羨まし
ひと粒で治る薬のような友
友人もお一人様が多くなり
友だちに魔法使いの二三人
給料日前に助けてくれた友
友だちの振りはこれから止めとこう
それ以上聞いてはこない仲間だな
餓鬼大将の友は普通になっていた
老人と少年海を見ている
友だちが笑った梅が咲きだした
ボーイフレンドガールフレンド呼び八十路
座標軸XYはキミと僕
友達以上恋人未満秋です
主語述語無くてわかる友が居る
あっち向いてホイ友に心を見透かされ
仲良しの友はやっぱり回遊魚
花の下友やら鬼がいて愉快
ベランダへ友の顔して来るスズメ
ともだちと一緒に転ぶ冬の坂

大阪 藤田 武人
青森 福士 慕情
静岡 馬淵よし子
山口 平田 実男
静岡 萩原まさ子
大阪 大浦 初音
愛知 石川 典子
鳥根 相見 柳歩
大阪 河内 月子
兵庫 上田ひとみ
広島 小島 蘭幸
岡山 丹下 凱夫
大阪 赤松ますみ
兵庫 相元 世津
兵庫 戸田わか子
佐賀 真島美智子
大阪 穂山 常男
大阪 渡辺たかき
愛媛 大内せつ子
大阪 小林 わこ
大阪 森松まつお
岡山 安原 博

ポポボンと女友達増えてくる

悪友の方がやっぱり面白い

おおらかで鯨のような友がいる

お札などええよ私ら仲間やし

友であり夫であってまだ子ども

相棒に猫でも飼ってみようかな

マツダスタジアム三万人が友である

悪友が出世頭でよく社員

お互いに一病抱いて花いちもんめ

東大出居ると自慢のクラス会

友達が100人入るランドセル

ウインクをしている星はきつと友

ともだちは臍の曲がった奴ばかり

友のいた家に売家の旗が立つ

アミーゴと紹介されてから意識

親友の一人になってきた親父

友達になろう片割れ月同士

友好国手の裏返すかも知れぬ

メロスには到底なれぬだがしかし

昇進へ友の拍手が揃わない

友一人共犯にして朝帰り

貧乏神友の顔してやってくる

島根 石橋 芳山

大阪 羽田野洋介

和歌山 柏原 夕胡

大阪 平井美智子

鳥取 吉田 陽子

大阪 池之上教子

島根 田中 堂太

大阪 谷口 東風

和歌山 小谷 小雪

兵庫 福田 好文

東京 山田こいし

兵庫 堀 正和

鳥取 新家 完司

大阪 前原 正美

岡山 永見 心咲

大阪 森 茜

広島 大森 昭恵

愛媛 黒田 茂代

青森 稲見 則彦

熊本 太田玉流川

静岡 瀧 進

大阪 原田すみ子

親友の諫言弾は抜いてある

みんな友達 親友はまだいない

友達が集いまつりになってゆく

路地裏を五百ワットで友と行く

ありがたい友の火加減水加減

友人を代表すれば泣くばかり

秀句

刑務所へ一緒に行ってくれないか

投げた球ちゃんと返してくれる友

友だちの亀と竜宮城へ行く

あなたにはうふ友だちにはあはは

選挙カー友達はかり乗っている

友という発光体を持っている

友達はみんな出世をしている

善玉菌友からひとつまた貰う

友達はできたかホームのじいちゃん

友達にいなかったんだドラえもん

特選

湯たんぽはたった一人のお友だち

入院をするたび友達がふえる

軸吟

君は絹オメ僕は木綿オウだけど友ケヤク(津軽弁)

和歌山 三宅 保州

和歌山 川上 大輪

鳥取 倉益 一瑤

青森 福多あられ

広島 鴨田 昭紀

広島 田辺与志魚

大阪 西村 哲夫

奈良 西澤 知子

大阪 高田美代子

青森 北山まみどり

兵庫 上田 和宏

大阪 山岡富美子

鳥取 牧野 芳光

島根 加本 精一

奈良 大久保眞澄

鳥取 斉尾くにこ

岡山 目賀 和子

大阪 山本希久子

書

く

平田朝子選

嘆願書心の声を絞り出す

蚯蚓には是非勧めたいペン習字

書き捨てたほうに本音があったメモ

てにをはに文章力を試される

濃く太く書いて私を浮き立たす

生年月日書くのが辛くなりました

生きたかを問うてばかりの書き損じ

白い紙好きという字で埋めつくす

消しゴムで消せる程度の罪にする

恋文を流れる指で書くスマホ

手書き地図目当てのビルが消えている

命名の字もパソコンに乗つとられ

達筆には生まれ縮む私の名

拝啓を消し前略と書きなおす

五線紙に書けば世界は同じ音

納得のいかないペンがよく動く

静岡 小林ふく子

青森 稲見 則彦

大阪 藤井 正雄

愛知 藤田 千休

和歌山 藤原ほか

和歌山 楠原 富香

北海道 高橋みのる

愛知 鏡味しょう子

青森 高瀬 霜石

静岡 鈴木千代見

青森 福士 慕情

兵庫 福田 好文

大阪 石橋 直子

大阪 吉岡 修

広島 錦 武志

茨城 桎村 日華

黙黙と値を書き入れる古本屋

怒・怒・怒・怒・怒いっぱいに書く日記帳

葉書一枚ころ模様がよくみとれる

書き順がよく分からない凹と凸

自画像に翼を足してみたくなる

日記帳父は勘当許してた

薔薇と鬱書けると自慢してみたい

私を素っぴんにして走るペン

書き順を悩みあぐねて字が迷子

病い癒え快気祝の字がおどる

憎めない落書もある寺の壁

拝復と書いて結局電話する

一字書く年の終りの総ざらい

走り書きドラマチックが好きらしい

達筆を絶滅危惧にするメール

恋と愛書き間違えて恋終わる

匿名のコラムにペンのフライング

古代文字君が好きだと書いてある

ボクの名でサインしたのは誰ですか

結露だとみると書きたくなるハート

筆圧が息災知らず年賀状

闊達な筆跡おやまだいける

岡山 国塩志保里

島根 藤井 寿代

大阪 小林 わこ

大阪 森松まつお

大阪 海老池 洋

熊本 太田玉流川

徳島 黒田るみ子

和歌山 堀 富美子

沖縄 前川 真

島根 板倉 聖治

兵庫 矢野 野薫

大阪 村上 玄也

兵庫 丸山 孔一

奈良 五味 尚子

三重 毎熊伊佐男

広島 岸本 清

岡山 山崎三千代

奈良 木嶋 盛隆

和歌山 川上 大輪

東京 川本真理子

大阪 山口弘委智

大阪 樋口 眞

縁談の度にリレーの身上書

間違えた文字が波瀾を呼んでいる
筆跡を鑑定されるラブレター

書くことで脳へ記憶を貼りつける

今日を書き過去は開かぬ日記帳

先生がフリガナつける出席簿

古文書の歴史を語る墨の色

写経三昧冷気にこころ洗われる

始末書を馴れた手つきで書く不安

エンディングノート書き終え飲むサブリ

書くことは人間だけに出来る技

合格祝い文字も跳ねますのし袋

気がかりな父の癖字にいつか似る

葛藤の中少し書くすべて書く

一行を増やし一足飛びの春

父が逝く誤字を正した手紙置き

書かされた不満で歪む辞表の字

母の背に指文字で書くありがとう

過去の傷修正液が透けている

筆跡に達者な父の顔浮かぶ

思慕の念ひたすら綴る本の跡

庭掃除熊手が跡を書いている

岡山 藤井 智史

愛知 恵利 菊江

岡山 岩崎 幸子

兵庫 佐藤寿美子

愛知 彦坂 石転

兵庫 堀 正和

大阪 米澤 俣子

大阪 村上 直樹

大阪 宮守 正博

大阪 鈴木いさお

兵庫 こまつてるえ

大阪 宇都満知子

愛知 沢田 清敏

大阪 山本希久子

和歌山 武本 碧

大阪 森田 麗

兵庫 萩原 狸月

岡山 畑 佳余子

静岡 佐藤 灯人

広島 飛田 陽子

石川 苗代ときこ

静岡 宮崎三千代

あとはもう夫の署名もらうだけ

書きなれた名前記帳の列の中

追伸に離婚したよと書いてある

小生はなどと背伸びをしたハガキ

接統詞書いて寂しさ紛らわす

ラブレター代筆しつつ情が入り

代筆の手紙が届く冬届く

筆談で偽りのないお付合い

落書の中で拾った子の本音

告白の君へ心は楷書体

無記名で書くは無敵になる私

初投票漢字テストのように書く

文豪の日記にあった誤字脱字

パソコンに書いた気分になせられる

鉛筆が折れる練り言書き連ね

美しく書ける便箋選んでる

借金の子を頼むと父の遺書

文末の点点僕を攻めてくる

書き終えた遺言書だがまだ迷う

風花が舞えば書きたくなる手紙

なぐり書き今日のわたしは地吹雪よ

書きためて置く幸せの時だけを

大阪 籠島 恵子

和歌山 北原 昭枝

大阪 中島 一彌

神奈川 菊地 良雄

鳥取 森山 盛桜

兵庫 東内美智子

兵庫 富永 恭子

和歌山 岡本 昇

兵庫 竹山千賀子

大阪 井澤 壽峰

奈良 高田まさじ

大阪 若林りえこ

兵庫 酒井 真由

兵庫 緒方美津子

兵庫 みぎわはな

大阪 榎本 舞夢

愛媛 よけだろくろ

石川 岡本 聡

愛知 西郷紀美代

大阪 西出 楓楽

山口 平田 恵

愛知 南 いづみ

目的は子の目に触れる母の文字
 書き足した一行詩だけ本音です
 酸欠になるほど好きと書いた春
 始末書の数だけ痕が内視鏡
 炎上はあるかも取えて書くホンネ
 肩書きが脳に居座り邪魔をする
 小説を書いて夢見る芥川
 箸袋に走り書きした師の言葉
 メ切日消化不良を書く無念
 人生に矢印ひとつ書いて老い
 書きながらわたしの思い確かめる
 読まれても困らぬように書く日記
 冒頭の言葉がさそう新刊書
 書き初めに明日を期待する気迫
 三という字にも筆順ちゃんとおる
 電子辞書駆使したらしい置き手紙
 福島と書きたび涙二千日
 墨の香も見事に映える命名書
 新暦に予定書き込む手が弾む
 ごめんねと書いて出掛けた子の涙
 写経して心の底を掃除する
 筆の先鍛えて線が生きてくる

静岡 渥美さと子
 大阪 中蘭 清
 奈良 山本 昌代
 奈良 谷川 憲
 静岡 萩原まさ子
 愛知 脇田 雅美
 香川 大高 正和
 大阪 鶴田 遠野
 大阪 矢倉 五月
 青森 境 きよし
 京都 山田 葉子
 静岡 竹平 和枝
 兵庫 藤田 雪菜
 兵庫 長浜 美籠
 鳥取 福西 茶子
 大阪 福田 和子
 岩手 百姓 一揆
 和歌山 福井 菜摘
 鳥取 山本ふみ子
 兵庫 橋本 凉子
 大阪 鈴木 栄子
 大阪 木見谷孝代

この至福書いた墨色笑う時
 ネットには書いたら消せぬ恐ろしさ
 本心を下書きだけに打明ける
 全開の個性で母は筆まめだ
 躍進へコーチと駄目を書くノート
 渇渴した脳へト書きを多くする

秀句

身の恥を書いてブログが膿んでくる
 お喋りな葉書表まで続く
 書き終えた介護日誌に夜は無い
 砂文字の恋をさらっていった波
 カルテ書く医者がいばらく手を止めた
 下書きが発芽するまであたためる
 恩師への便り思わず正座する
 下書きの線から絵師の苦が浮かぶ
 百歳の筆矍鑠と夢一字
 返信に親父の威厳添えて出す
 諦めはしないと結ぶ闘病記
 親心しのばせ遺書の封をする
 軸 吟
 和紙に筆下ろす雑念湿らせる

特選

徳島 寺澤 紀子
 大阪 藤川 八重
 福井 石谷 恵子
 大阪 津守 柳伸
 熊本 徳丸 浩二
 山口 中前 幸子
 三重 青砥たかこ
 大阪 大川 桃花
 和歌山 玉置 当代
 和歌山 柏原 夕胡
 大阪 江見 見清
 鳥取 細田 裕花
 広島 大森 昭恵
 富山 島 ひかる
 広島 村上 和子
 宮城 木田比呂朗
 大阪 平井美智子
 大阪 古今堂蕉子
 熊本 平田 朝子

書 く 新家完司選

日記書くさしたることもないままに
言い訳をかさね泣き事ばかり書く
幸せと書けば愛しくなるいのち
メモ書きの順を確かめペダル踏み
ベンだこが語るこれまで来た歩み
写経する筆先邪念まといつく
百までのつもり賀状に雀書く
告白はやはり手書きのラブレター
拝啓と書き掛けてから早や三月
延命の治療無用と書いておく
今日のここと日記に記し明日を向く
簡潔な絵文字で済ますありがとう
追伸に辛子を少し振っておく
自分史を書けば書くほどこいやになり
遺言書仲良くしてと書いてある
助けてと書くかも知れぬ遺言書

愛媛 栗田 忠士
兵庫 青木 公輔
兵庫 山口ヨシエ
兵庫 本谷 重子
高知 岡村 千鳥
奈良 細田 貴子
兵庫 山田 耕治
大阪 川畑まゆみ
広島 田辺与志魚
茨城 照沼 智
大阪 平賀 国和
大阪 池田 純子
山口 上村 夢香
兵庫 吉田 笑太
鹿児島 前田 洋子
奈良 大久保眞澄

エンディングノートは僕の顛末書
ありがとう楽しかったと遺言書
うんうんと頷いておく書道展
ペン牝豚とバチンコ牝豚がのこる指
金婚の妻に初めて手紙書く
本心を書きたがつてるペンの先
下手な字はでっかく書いて目眩ます
反核署名下手な字だけど丁寧に
大切な言葉は胸の奥に書く
闊達な筆跡おやじまだいける
父が逝く誤字を正した手紙置き
美しく書ける便箋選んでる
喜びを隠しきれない走り書き
母一人へ火の用心と書いて貼る
黙々と値を書き入れる古本屋
消しゴムで消せる程度の罪にする
子供の名書いた大風呂青い空
欠席と書く返信が多くなり
荷の中に下手な一筆添えておく
不都合なところはばかして書く日記
柩には渡せぬままのラブレター
古文書に百姓一揆生々し

鳥取 竹村紀の治
静岡 竹平 和枝
島根 川本 畔
大阪 三好 専平
兵庫 大坪 一徳
青森 木村奈生美
大阪 江島谷勝弘
大阪 藤井 正雄
大阪 森田 旅人
大阪 樋口 眞
大阪 森田 麗
大阪 榎本 舞夢
栃木 萩原 鹿声
大阪 池之上教子
岡山 国塩志保里
青森 高瀬 霜石
京都 西村 益子
愛知 沢田 正司
和歌山 小谷 小雪
神奈川 菊地 政勝
宮城 庄子さゆり
和歌山 三宅 保州

目標をちょっと高めに書いておく
寝る前に今日のいいこと三つ書く
居心地の良い場所本音書ける場所
嘆願書心の声を絞り出す

きらめいていたくて書いています

諦めはしないと結ぶ闘病記

書くたびに確かめている送り仮名

会いたいねと毎年書いてある賀状

試し書きついしてしまうボールペン

無記名で書くは無敵になる私

シヨートステイ母の衣類に名前書く

自分史を書くときファイトの声がする

生年月日書くのが辛くなりました

てにをはに文章力を試される

無記名と聞いて本音をしたためる

争えぬ血筋どの子も楷書体

酸欠になるほど好きと書いた春

下書きをよーく見て書くラブレター

感嘆符もひとつつけてお札状

画用紙にいっぱい伸びた象の鼻

好き勝手書いて絵文字で和ませる

横書きもやまところろはしなやかに

大阪	上山	堅坊	大阪	大浦	初音	鳥取	西村	久江	静岡	小林	ふく子	石川	新保	芳明	大阪	平井	美智子	広島	飛田	陽子	鳥取	岸本	孝子	大阪	阿部	俊八	奈良	高田	まさじ	大阪	高杉	力	鳥取	田中	重忠	和歌山	楠原	富香	愛知	藤田	千休	大阪	原	洋志	岐阜	武藤	敏子	奈良	山本	昌代	兵庫	藤井	宏造	静岡	堤坂	まさえ	大阪	神田	良子	奈良	安福	和夫	大阪	上嶋	幸雀
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	---	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

歩き方とても素敵とラブレター
形容詞シンブルにして書く手紙
古文書の歴史を語る墨の色
絵手紙の文字は絵よりも小さく書く
面影を引き寄せながら書く便り
手紙書くデッサン愛を添付して
しっかりと脳に書き込む受けた恩
暗号のようににはじめてのお手紙
投稿文直され違う人みたい
バカバカバカバカといっぱい書いた風
6Bのエールで脳のリフレッシュ
延命は無用と書いて日々弾む
身の内の木枯らしを書く修羅を書く
梅笑う苦手なお方にも便り
悪知恵も少し働く申告書
「龜」の字が辞書を見ながらでも書けぬ
パソコンがうまくなり字が下手になる
くどくどと余白を埋める親心
書き順がよく分からない凹と凸
メール打つひとまず紙に書いてから
遠からず遺書になる句を書き記す
嫌いとも好きとも取れる走り書き

大阪	河内	天笑	奈良	池田	貴佐夫	大阪	米澤	俣子	大阪	片山	かずお	広島	山本	恵子	鳥取	前田	楓花	大阪	藤村	亜成	茨城	岡本	恵	沖縄	真栄城	千矢子	高知	広瀬	鮎美	大阪	石田	ひろ子	和歌山	土屋	起世子	和歌山	木本	朱夏	大阪	徳山	みつこ	福岡	奥	正之	三重	橋倉	久美子	大阪	奥	時雄	和歌山	宇野	幹子	大阪	森松	まつお	大阪	梅木	澄空	香川	安田	翔光	大阪	西澤	司郎
----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	-----	-----	----	----	----	----	----	-----	-----	----	-----	-----	----	----	----	----	-----	----	---	----	----	----	-----	----	---	----	-----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

なぐり書き今日のわたしは地吹雪よ

淋しさを抜け出すために書いている

カルパッチョの赤で描いた大落暉

広告の裏に出来たサンマの句

6Bは切らさぬ生きている限り

筆圧が息災知らず年賀状

先生がフリガナつける出席簿

正直に心に添って返事書く

朝ドラが終りゆっくり眉をかく

了見の狭さを恥じる文になり

書いたもの持ってふたりでスーパーへ

逢いたいと書きつづけてる震災後

ボクの名は宇宙と書いてコスモです

幸せを一気に書けば螺旋形

母として充実感を書き添える

書き続け眠ったものを揺り起こす

うまさより心で書けと笑む色紙

短冊に書けば佳吟に見えて来る

一筆箋に想いを込めた句が届く

没の句を春の出番に書き直す

鉛筆と紙さえあればスイッチオン

直角の文字書く直角の男

山口 平田 恵

三重 小河 柳女

岡山 丸山 威青

奈良 尾崎 順子

大阪 栃尾 奏子

大阪 山口弘委智

兵庫 堀 正和

鳥取 門村 幸子

京都 山本 昌乃

鳥取 石谷美恵子

大阪 河内 月子

大阪 森中恵美子

兵庫 河内谷 恵

大阪 次井 義泰

大阪 辻村 ヒロ

大阪 木見谷孝代

広島 錦 武志

鳥取 早川 玲坊

兵庫 今井 寛

和歌山 辻内 次根

奈良 森田 昌子

和歌山 古久保和子

父さんの為に「トイレ」と大書する

トイレにも鉛筆と紙置いてある

遺言は「へのへのものへの」桃の種

へのへのものへ私の顔は描きやすい

写経して無の字ばかりが上手くなり

わたししか書けない丸裸のワタシ

秀句

筆圧の弱さを啜うボールペン

鉛筆の芯に本気を注ぎ込む

父ちゃんのパンツと書いてあるパンツ

料金は箱へと書いてある美文字

果たし状やつぱり縦書きにしよう

パジャマ着て書いたと誰も思わない

古代文字君が好きだと書いてある

太い字を書いて男を主張する

まる文字で届くわずらわしい手紙

平凡な日々カタカナでバラと書く

特選

定年と書いて吹雪の中である

エンディングノートを書いてジム通い

軸吟

茜雲見果てぬ夢を書いている

東京 山田こいし

兵庫 田中 章子

岡山 目賀 和子

愛知 伊賀 武久

奈良 米田 恭昌

奈良 安土 理恵

兵庫 宮崎ゆき子

奈良 居谷真理子

青森 赤平くみこ

大阪 大川 桃花

兵庫 中岡千代美

大阪 谷口 義

奈良 木嶋 盛隆

大阪 坂 裕之

愛媛 大内せつ子

佐賀 真島久美子

鳥根 石橋 芳山

愛知 金子美千代

鳥取 新家 完司

雑

詠

植野 美津江 選

ポケットを空っぽにして春ららら

生命線いまどの辺り春の風

雪国に今年もやはり雪が降る

不法投棄しないで天よドカ雪だ

ちよつとだけ不良になつてみたい春

勝つことはないがちよいちよいケンカする

口下手な人だ仲良くなれそうだ

幸せつてこんな小さなものでした

ふきん真つ白これが私の自負である

空気税取られたとこで目が覚めた

お年玉お母さんには預けない

春休みジャンプしているメダカたち

アップルパイ挨拶うまくなりました

走り続ける未来の僕に出会うため

伸び代は無限若さが突つ走る

引き摺らないように爽やかに叱る

青森 北山まみどり

大阪 針生 和代

大阪 鈴木いさお

鳥取 田中 天翔

大阪 池田 純子

大阪 河内 天笑

大阪 升成 好

大阪 中井 アキ

大阪 籠島 恵子

鳥取 池田 美穂

大阪 宮守 正博

沖繩 高良 秀光

奈良 西澤 知子

兵庫 前川 淳

高知 清水由紀子

佐賀 西村 正紘

字足らずも字余りもある反抗期

桐の花父の思いと子の気持ち

物干し場のシャツもパンツも帰省中

俯いてチャンス狙っているポピー

ぶらりバスわたし探しの春の海

全身の毛穴が春を待っている

いい日和妻をバイクに乗せてやる

話題なくお茶のおかわりする夫婦

定形のリズムでハモる反戦歌

難民は望む普通の日を望む

削除したはずの昨日が顔をだす

一つしか無い首何度でも晒す

日本の男の灰汁が消えていく

言い訳はしない男の向こう傷

宴席の裾でタラレバ練っている

四捨五入されて私の顔が無い

珈琲も男も少々ほろ苦い

きのうの傷なめてあしたへ突撃す

同床異夢棚上げにしてする握手

その先にあなたの居ない空なんて

見逃した四つ葉はきっと君でしよう

化けるのが下手で尻尾が畳めない

広島 笹重 耕三

奈良 土井 京子

鳥根 加本 精一

大阪 川畑まゆみ

熊本 阪本ちえこ

大阪 上山 堅坊

鳥取 早川 玲坊

兵庫 藤井 宏造

岡山 丸山 威青

岩手 百姓 一揆

愛媛 柳田かおる

鳥取 河川 洋々

鳥根 田中 堂太

愛知 沢田 正司

佐賀 仁部 四郎

兵庫 寺尾 麦人

岡山 福力 明良

京都 清水 英旺

東京 木咲 胡桃

高知 広瀬 鮎美

岡山 藤井 智史

奈良 高田まさじ

いつからか妻が座っている玉座
 咳をするたびに寂しくなる独り
 神様はときに優しい物忘れ
 老人の金平糖は意地つ張り
 無駄話しては元氣を取り戻す
 余命など気にせず今日もよく笑う
 日溜りをわけあうひとが居てくれる
 純粹になれる畑だ空も青
 平穩のありがたさ知る大根煮る
 五目飯オリンピックで揉めている
 野の風を頬に集めてにぎり飯
 ふわり愛 皇后さまのたたずまい
 シンプルに生きよう日の丸の真つ赤
 魂がさまよう一人鍋の湯気
 骨壺の外が近頃きな臭い
 絵手紙の裏にもあった古代文字
 誕生日まだやることがたとある
 年金の仕分け憶けてなぞおれぬ
 白昼夢覚めて命を取り戻す
 待つことに慣れて心が風いどくる
 生きていることが奇跡と知りました
 青い鳥貧乏神に追いやられ

岡山 木下 草風
 鳥取 竹村紀の治
 岡山 丸橋 野蒜
 大阪 鶴田 寿子
 大阪 鈴木 栄子
 大阪 前 たもつ
 大阪 山岡富美子
 岡山 高杉 究作
 大阪 助川 和美
 岡山 畑 佳余子
 奈良 佐藤 辰雄
 兵庫 戸田わか子
 大阪 荻野 浩子
 大阪 西出 楓楽
 兵庫 濱邊稲佐嶽
 奈良 木嶋 盛隆
 愛知 眞島 知恵
 和歌山 楠見 章子
 愛知 石川 典子
 京都 西山 竹里
 熊本 中原たかお
 大阪 油谷 克己

レモン囁む哀しい過去が裏返る
 添削の朱に曳き出され陽が昇る
 にんげんの脆さはほろほろ愛と哀
 聞こえたよ雷の中の笑い声
 平凡な幸せがいい玉子焼き
 脳トレと筋トレ老いる暇がない
 ゴールなら見えているから遠回り
 冬木立恐れるものは何もなく
 下り坂膝は笑って笑えない
 霜柱踏み人間の音を聴く
 よく回る独楽です悩みなどはない
 股覗きしても世の中変わらない
 はき換えた靴も方向音痴とは
 ガン告知された大きな秋だった
 言い勝った心を月に笑われる
 ひらめきが遠退いて行く現在地
 神様のサービスだなと受けとめる
 後悔をするより夢に碎け散る
 打ち返すためにボキャブラリーゆるする
 風を追い風に追われてまだ生きる
 介護する手に一しずく熱いもの
 理想論追って明るい絵具溶く

東京 星出 冬馬
 大阪 関 よしみ
 兵庫 山口ヨシエ
 奈良 居谷真理子
 愛媛 西田美恵子
 岡山 白髪 道子
 茨城 岡本 恵
 兵庫 大黒 政子
 鳥取 伊藤 龍枝
 熊本 太田玉流川
 愛知 浅井 典子
 兵庫 細川 花門
 大阪 原 洋志
 石川 新保 芳明
 大阪 大川 桃花
 青森 稲見 則彦
 東京 川本真理子
 大阪 上西 啓仁
 奈良 森田 昌子
 鳥根 松本 文子
 兵庫 上垣キヨミ
 兵庫 西口 時也

血圧も春の陽気も乱高下

遠ざかる風船酔いが覚めてゆく

ルルルル並んで買ったメロンパン

フィナーレは僕をハグするシンフォニー

画像処理されて私もターゲット

足踏みの左足から遅れだす

劇薬を含んだ口が笑んでいる

ひと恋えば坂ある街の靴の音

考え直さないと交差点がある

嘘ついた先にもやはり水たまり

平熱に戻ると消えていたオーラ

一本のペンが集まり樹を倒す

脚本を食み出し今日を生きていく

冬の雲白く動かず只白く

つつこみを入れない隣の腹筋

糸切り歯よく働いて長寿です

言い訳は割れたザクロの三粒ほど

人間を踊り終えたら軽い骨

何時だって僕の磁石は君を指す

S.L.の車輪のような彼が好き

ノスタルジー祭り太鼓が鳴っている

性格は外郎ですと言っておく

岐阜 武藤 敏子

岡山 安原 博

静岡 林 重勝

奈良 五味 尚子

石川 藤村 容子

鳥取 山野すみれ

山口 有海 静枝

福井 中村 吉範

大阪 太田扶美代

大阪 栃尾 奏子

山形 相田みちる

島根 伊藤 寿美

山口 上村 夢香

兵庫 本谷 重子

愛知 青砥 和子

大阪 川端 一步

愛知 八甲田さゆり

大阪 土田 欣之

大阪 藤井満洲夫

兵庫 梅澤 盛夫

愛媛 中居 善信

島根 石橋 芳山

精一杯菌車は菌車なりに

大人のぬり絵なぜか悲しい色になる

欲という器は底が抜けている

正解と言える廃炉の辞書がない

黎明はスノーダストの向こう側

にこにこ笑って爪を研いでいる

秀句

手を眺めふいに淋しくなってくる

雑念に囚われすぎる竹箒

いつまでをはしゃぐ花びら吹き溜り

宇宙史の一行くらい生きてやる

before after人間らしくなる時間

ストーリーに心拍数を足す映画

友情の縄が千切れ雲になる

バカな実をいっぱい付けている余生

美しく背いたこともある手毬

菜の花の向うへ加齢脱ぎ捨てる

特選

澄んでくるまではひたすら浮いている

介護終了両の手に風が吹く

軸吟

高野どうふほどの甘さがいいのです

青森 高橋せい子

愛媛 大内せつ子

奈良 笹倉 良一

奈良 菱木 誠

大阪 山野 寿之

和歌山 川上 大輪

大阪 嶋澤喜八郎

京都 赤松 螢子

奈良 安土 理恵

徳島 黒田るみ子

愛知 伊賀 武久

大阪 立蔵 信子

青森 松山 芳生

奈良 古川 洋子

和歌山 木本 朱夏

大阪 森中恵美子

和歌山 小谷 小雪

広島 田辺与志魚

雜 詠

小 島 蘭 幸 選

君といてあたり一面桜色

削除したはずの昨日が顔をだす

街の声次々と消す雪しきり

無駄使い出来ぬ時間も年金も

日に一度鏡と会話して終る

4Bのやさしさと描く冬木立

振り返る勇氣もなくて生き延びる

独りばち想定内にして生きる

過労死に鬼十訓も涙する

遅まきながら発芽中です老いの夢

フルマラソン一度走つて見たかった

訳あつて非常階段から降りる

よく遊び飲んで人生以下余白

切り替えてプラス思考のネジを巻く

そして何時か縄電車に一人

用意はできたかいと風が呼びに来る

大阪 関 よしみ

愛媛 柳田 かおる

大阪 穂山 常男

大阪 鈴木 益子

鳥取 山下 節子

兵庫 佐藤寿美子

大阪 横山 捷也

兵庫 田中 章子

北海道 三浦 強一

兵庫 桃谷 和郎

京都 三宅 満子

大阪 宮守 正博

兵庫 湊 利隆

和歌山 福井 菜摘

広島 岩本 笑子

福井 みつ木も花

二三回自分騙したことがある

字足らずも字余りもある反抗期

よく回る独楽です悩みなどはない

ご先祖に呼ばれてここにいるわたし

シンプルに生きよう日の丸の真っ赤

愛される軍隊どこにあるのです

ひらめきが遠退いて行く現在地

澄んでくるまではひたすら浮いている

年金の仕分け惚けてなぞおれぬ

無駄話しては元氣を取り戻す

悠々自適どこで狂ったのか老後

飽食と言う犯罪に慣れてくる

あの手この手やってみなはれ神も押す

遅しく生きる男の多面体

丁寧にお辞儀するのはむつかしい

菜の花の向うへ加齢脱ぎ捨てる

明日散ると決めた紅葉の深い彩

どの道を行ってもたどりつくあの世

深入りはよう大人の車間距離

腹から笑う今夜の眠り葉だな

泥濘を撥ねると春の音がする

早死には辛いが長生きも辛い

大阪 嶋澤喜八郎

広島 笹重 耕三

愛知 浅井 典子

愛媛 黒田 茂代

大阪 荻野 浩子

大阪 三好 専平

青森 稲見 則彦

和歌山 小谷 小雪

和歌山 楠見 章子

大阪 鈴木 栄子

鳥取 山下 凱柳

岡山 大杉 敏夫

大阪 吉岡 修

兵庫 戸田わか子

鳥取 田中けいこ

大阪 森中恵美子

大阪 内海 幸生

大阪 古今堂蕉子

大阪 田中 俊子

奈良 古川 洋子

鳥取 森山 盛桜

奈良 久田年須美

断捨離でニールック着る傘寿です

どこまでが限度か無言劇つづく

笑い売る人の険しい裏の顔

フィギュアスケート誰も転ばぬよう祈る

子のメール三日は機嫌よく過ごす

高野どうふほどの甘さがいいのです

考え直さないと交差点がある

魂がさまよう一人鍋の湯気

来た道を探す通学バスに乗る

間違いだらけの健康法でいまだ無事

人間を踊り終えたら軽い骨

北のミサイルきつと花火に致します

いいことがあるかもしれないから明日

雑念に囚われすぎる竹箒

忘れられぬように揺れてる芒の穂

孫にはすぐ鬼の仮面を剥がされる

テロリストだって死にたく無いのです

鯛大根みたいな夫婦になりたいね

おまえはね私が生んだオンリーワン

恋猫の一途は春を蹴散らかす

病む度に変わる余生の青写真

当り前にいた夫いない桜咲く

鳥取 岸本 孝子

鳥取 夏目 一粹

奈良 米田 恭昌

大阪 浅野 房子

静岡 竹平 和枝

奈良 植野美津江

大阪 太田扶美代

大阪 西出 楓楽

熊本 黒川 弧遊

兵庫 亀岡 哲子

大阪 土田 欣之

青森 阿部 治幸

広島 山本 恵子

京都 赤松 螢子

岡山 安原 博

岐阜 藤吉 政春

鳥取 両川 洋々

大阪 中川ひろ介

大阪 穂口 正子

大阪 美馬りゅうこ

広島 岸本 清

大阪 小山恵美子

落丁も脱字も老いの処方箋

花束を頂く夕日が美しい

走り続ける未来の僕に出会うため

ふきん真つ白これが私の自負である

花八つ手静寂のなかの死者生者

いつからか妻が座っている玉座

あんな誰天使になった母の春

介護終了両の手に風が吹く

受けて立つ男のたてがみが靡く

にこにこ笑って爪を研いでいる

介護する手に一しずく熱いもの

憎らしい妻が他人に見えてくる

灰になりようやく広い海に出る

めくるめく出会いがあった映画館

若いねとスニーカーから言わせたい

素通りの耳にストレスなどはない

惜しまれず消えてゆくのも悪くない

桜餅介護の愚痴を知っている

里の雪ニュースになって亡母想う

しろい手のままでは何も守れない

ようそろようそろ桜が咲いている

生きてゆく答えはひとつでは無いよ

大阪 山岡富美子

兵庫 酒井 真由

兵庫 前川 淳

大阪 籠島 恵子

兵庫 水田 蓉子

岡山 木下 草風

大阪 藤塚 克三

広島 田辺与志魚

広島 鴨田 昭紀

和歌山 川上 大輪

兵庫 上垣キヨミ

奈良 牧浦 完次

茨城 樫村 日華

青森 高瀬 霜石

大阪 江見 見清

広島 大森 昭恵

鳥取 新家 完司

宮城 木田比呂朗

大阪 森田 麗

兵庫 澁谷さくら

大阪 谷口 義

大阪 針生 和代

ありがとうきれいに咲いたこぼれ種
 脳トレと筋トレ老いる暇がない
 おしずかにあの人が来るはずでした
 幸せってこんな小さなものでした
 大人のぬり絵なぜか悲しい色になる
 予報士のはずれが愉快青い空
 いつだって君の答えは笑顔だね
 一喜一憂尿の検査に血の検査
 菜の花の黄色が春を告げに来る
 人様と比べて暮らすのは止めた
 病む夫の握り返した手と会話
 呆けたら面倒看ぬと嫁が言う
 長寿には笑いが似合う笑いたい
 空に月こころ丈夫になる椿
 化けるのが下手で尻尾が畳めない
 わたくしのパワースポットですあなた
 お手柄は妻に譲って波静か
 生きていることが奇蹟と知りました
 私にはボディガードはおりません
 見上げては登る見上げては登る
 視線浴びハナ花になるヒト人になる
 老人会の集いパスしてボランティア

兵庫 堀 正和
 岡山 白髪 道子
 東京 星出 冬馬
 大阪 中井 アキ
 愛媛 大内せつ子
 鳥取 福西 茶子
 大阪 中川 一男
 鳥取 加藤 茶人
 兵庫 尾崎 一子
 大阪 奥 時雄
 兵庫 嵯峨里かほる
 兵庫 こまつてるえ
 大阪 大和 峯二
 奈良 山本 昌代
 奈良 高田まさじ
 大阪 矢倉 五月
 大阪 落葉 ふみ
 熊本 中原たかお
 鳥取 成田 雨奇
 和歌山 辻内 次根
 大阪 山本希久子
 京都 榊本 宏子

百歳にひとつ足りない花魁
 皇帝タリヤ青空とハグ出来そうだ
 天に咲く火花四万十川旅情
 口下手な人だ仲良くなれそうだ
 花植えただけで心に灯が点る
 現実を受け入れてから春うらら
 秀句
 曾祖母にも一家言ありひな飾り
 逆縁を詫げる知覧の遺書を読む
 一過性ですが嬉しい紙吹雪
 ガン告知された大きな秋だった
 平熱に戻ると消えていたオーラ
 追いかけるばかりの姉が居てくれた
 雨上る 紋白蝶に戻ります
 雪国に今年もやはり雪が降る
 ひと恋えば坂ある街の靴の音
 聞こえたよ蕾の中の笑い声
 特選
 裏口へ廻ると春が佇っていた
 愛は愛はと千本ノック受けている
 軸吟
 失せ物は出ず穏やかな日が続く

島根 岸 桂子
 高知 岡村 千鳥
 兵庫 細川 花門
 大阪 升成 好
 和歌山 柏原 夕胡
 兵庫 黒田 能子
 大阪 澤井 敏治
 兵庫 谷口 修平
 栃木 荻原 鹿声
 石川 新保 芳明
 山形 相田みちる
 京都 山田 葉子
 岡山 しばたかずみ
 大阪 鈴木いさお
 福井 中村 吉範
 奈良 居谷真理子
 和歌山 木本 朱夏
 大阪 平井美智子
 広島 小島 蘭幸

第五回 春の川柳塔まつり

誌上大会参加者

総数 700 名

順不同・敬称略

〔北海道〕 小沢 淳 三浦強一 高橋みのる

星出冬馬 山田こいし

〔青森〕 阿部治幸 稲見則彦 赤平くみこ

〔神奈川〕 菊地政勝 菊地良雄 山崎修二

境きよし 高瀬霜石 高橋大洋 長内よう子

〔山梨〕 加藤一郎 小林金剛

野呂吞舟 福士慕情 松山芳生 木村奈生美

〔長野〕 丸山健三

吉田吹喜 斉藤ふみ子 高橋せい子

〔富山〕 島ひかる

福多あられ 北山まみどり

〔石川〕 岡本 聡 新保芳明 苗代ときこ

〔岩手〕 菅沼道雄 百姓一揆

藤村谷子

〔宮城〕 大久保もとじ 木田比呂朗

〔福井〕 石谷恵子 伊藤良一 中村吉範

庄子さゆり

みつ木もも花

〔山形〕 相田みちる

〔岐阜〕 藤吉政春 武藤敏子

〔福島〕 菊田信子

〔静岡〕 石上俊枝 市川今子 渥美さと子

〔茨城〕 岡本 恵 樫村日華 小林啓治

今田久帆 奥宮恒代 神村恭子 安藤千鶴子

照沼 智

佐藤灯人 瀧 進 竹平和枝 川村美智代

〔栃木〕 荻原鹿声

中田 尚 中村禎次 沼田壽美 久保田禎一

〔群馬〕 大川光一 野口らいら

橋本酒楽 林 重勝 小林ふく子

〔埼玉〕 下平史子 中村伸子 根岸方子

堤坂まさえ 佐野由利子 鈴木千代見

藤あかね

寺田喜代子 萩原まさ子 馬淵よし子

〔千葉〕 山下明子 田村ハナ子

宮崎三千代 山本野次馬

〔東京〕 上原 稔 木咲胡桃 川本真理子

〔愛知〕 青砥和子 浅井典子 金子美千代

安藤なみ 伊賀武久 石川典子 小松くみ子

恵利菊江 沢田清敏 沢田正司 西郷紀美代

高浜広川 高柳閑雲 富田末男 山本三樹夫

彦坂石転 藤田千休 眞島知恵 南いづみ

脇田雅美 鏡味しょう子 八甲田さゆり

〔三重〕 小河柳女 吉崎柳歩 青砥たかこ

北田のりこ 橋倉久美子 毎熊伊佐男

〔京都〕 赤松登子 今井弘之 今井万紗子

清水英旺 都倉求芽 西村益子 渡邊真由美

西山竹里 藤井文代 前中知栄 榎本宏子

三宅満子 山田葉子 山本昌乃

〔大阪〕 穂山常男 浅野房子 赤松ますみ

油谷克己 阿部俊八 荒木郁子 石田ひろ子

池田純子 井澤壽峰 石橋直子 池之上教子

井上照子 井丸昌紀 井本健治 出海素頼馬

岩口拓人 上嶋幸雀 上西啓仁 岩佐ダン吉

上山堅坊 碓氷祥昭 内海幸生 内田志津子

梅本澄空 榎本舞夢 海老池洋 宇都満知子

江見見清 大浦初音 大川桃花 江島谷勝弘

大隅克博 大治重信 岡本 勲 榎本日の出

荻野浩子 奥 時雄 落葉ふみ 大島ともこ

柿花和夫 籠島恵子 河内月子 太田扶美代

河内天笑 川端一步 川本信子 小栢こずえ

神田良子 久世高鷲 栗田久子 小川賀世子

黒岩靖博	兒玉重信	小林若芽	片岡智恵子	水野黒鬼	都 武志	宮守正博	原田すみ子	成定竹乃	二階幸子	西口時也	須本美知恵
小林わこ	近藤 正	坂 裕之	片山かずお	三好寿平	村上玄也	村上直樹	平井美智子	野口晶子	能勢利子	萩原狸月	竹山千賀子
酒井紀華	坂上淳司	坂野澄子	川畑まゆみ	森 茜	森 廣子	森井克子	藤井満洲夫	橋本涼子	福田好文	福田正彦	谷口加代子
澤井敏治	沢田和子	島田誠一	岸井ふさゑ	森田旅人	森田 麗	矢倉五月	藤原千恵子	藤井宏造	藤岡りこ	藤田雪菜	戸田わか子
初代正彦	杉谷和雄	杉本義昭	木藤こみつ	安田忠子	山崎珠生	大和峯二	増井ヨシ枝	藤原紘一	古橋茂子	細川花門	七反田順子
助川和美	鈴木栄子	鈴木益子	木見谷孝代	山根妙子	山野寿之	雪本珠子	松尾美智代	堀 正和	前川 淳	前中 勝	中岡千代美
関よしみ	高杉 力	高杉千歩	源田八千代	横山里子	横山捷也	吉岡 修	宮崎シマ子	松井文香	丸山孔一	水田蓉子	西口いわゑ
伊達郁夫	立蔵信子	田中俊子	古今堂蕉子	米澤俣子	若本安代	宮村満寿恵		湊 利隆	村田 博	本谷重子	濱邊稻佐嶽
田中朋子	田中廣子	谷久美子	小山恵美子	森中恵美子	森松まつお	山岡富美子		森本高明	矢野野薫	山口光久	東内美智子
谷口東風	谷口 義	丹後屋肇	佐々木満作	山口弘委智	山本加お里	山本希久子		山田耕治	吉田笑太	盧 光来	藤原みよし
次井義泰	辻村ヒロ	土田欣之	柴本ばっは	吉内タカ子	吉村久仁雄	若林りえこ		脇田敬子	嵯峨里かほる	松本ゆかり	
津守柳伸	鶴田遠野	鶴田寿子	嶋澤喜八郎	渡辺たかき	美馬りゅうこ			みぎわはな	宮崎ゆき子	山口ヨシエ	
寺井弘子	栃尾奏子	富田啓二	島田千鶴子	〔兵 庫〕	青木公輔	池野英坊	足立つな子	山端なつみ	吉村めぐみ	こまつてるえ	
富田保子	内藤憲彦	中井アキ	神野千恵子	市坪武臣	稲角優子	今井 寛	井上じろう	〔奈 良〕	安土理恵	安福和夫	池田貴佐夫
中川 一男	中嶋一彌	中崎深雪	鈴木いさお	上田和宏	梅澤盛夫	大黒政子	上垣キヨミ	大内朝子	大西將文	尾崎順子	居谷真理子
中 蘭 清	中村 恵	西澤司郎	高田美代子	大坪一徳	岡本潮里	尾崎一子	上田ひとみ	木嶋盛隆	北野年子	小中繁子	植野美津江
西出楓葉	西村哲夫	萩尾紀子	辻部さと子	金川宣子	亀岡哲子	河内谷恵	太田としお	五味尚子	笹倉良一	佐藤辰雄	大久保真澄
畑中節子	早泉早人	原 洋志	津村志華子	菊池正志	北澤稠民	北野哲男	緒方美津子	柴田園江	下谷憲子	城崎れい	太田のりこ
針生和代	樋口 眞	日野 愿	出口セツ子	国代昭子	熊谷 勉	黒田能子	奥田みつ子	高橋敬子	谷川 憲	土井京子	来田甚之市
平賀国和	福田和子	藤井則彦	徳山みつこ	梶谷和郎	幸田厚子	酒井真由	奥澤洋次郎	中森勝代	西澤知子	菱木 誠	小金澤貴一
藤井正雄	藤川八重	藤田武人	中川ひろ介	澤 良兼	澤 良子	梶元世津	神崎みき子	古川洋子	細田貴子	松田吉子	小早川秋子
藤塚克三	藤原大子	藤村亜成	西川ひろし	多田雅尚	田中章子	谷口修平	久保田千代	松本柎子	牧浦完次	森田昌子	澤山よう子
穂口正子	前たもつ	前田紀雄	羽田野洋介	近兼敦子	塚北一徳	寺尾麦人	佐藤寿美子	山本昌代	米田恭昌	渡辺富子	高田まさじ
前原正美	升成 好	松岡 篤	原熊知津子	富永恭子	中島憲三	長浜美籠	澁谷さくら	飛永ふりこ	中山恵美子	西久保隆三	

長谷川崇明 久田年須美 大津ひろつぐ

【和歌山】 石田隆彦 磯部義雄 坂部紀久子

上田紀子 宇野幹子 尾崎善英 山東日出男

岡本 昇 柏原夕胡 川上大輪 土屋起世子

北原昭枝 木本朱夏 楠原富香 藤原ほのか

楠見章子 倉橋悦子 小谷小雪 古久保和子

小林八茶 武本 碧 玉置当代 辻内次根

堂上泰女 平田元三 平田善治 福井菜摘

堀富美子 松尾和香 松原寿子 三宅保州

【鳥 取】 飯野菖子 生田和之 石谷美恵子

池澤大鯨 池田美穂 伊藤昭子 岡崎美知江

伊藤龍枝 大倉孝二 大前安子 斉尾くにこ

奥田由美 加藤茶人 門村幸子 坂本とも湖

岸本宏章 岸本孝子 倉益一瑤 竹村紀の治

児玉規雄 新家完司 竹口清信 谷口回春子

竹信照彦 田中重忠 田中天翔 田中けいこ

田村周子 津村律子 中井虎尾 山野すみれ

中原章子 永原昌鼓 中村金祥 山本ふみ子

夏目一粋 成田雨奇 西田 滋 吉田孔美子

西谷悦子 西村久江 西村海希 若松由紀子

早川玲坊 平尾菜美 福西茶子 細田裕花

前田瑞枝 前田楓花 牧野芳光 松川行男

森山盛桜 八木千代 山下凱柳 山下節子

山中康子 吉田陽子 両川無限 両川洋々

上山いっぺい 児玉コスモス

【島 根】 相見柳步 石橋芳山 小白金房子

板倉聖治 伊藤寿美 伊藤玲子 多久和敬子

稲田陽子 今岡健柳 加本精一 松本はるみ

川本 畔 岸 桂子 田中堂太 福岡芳枝

藤井寿代 松本文子

【岡 山】 岩崎幸子 大石洋子 池田たか子

大杉敏夫 奥田佳子 尾崎 貴 上田真智子

片岡富子 片島秀月 木下草風 小野真備雄

小林妻子 白髪道子 杉山 静 小野美那子

鈴木陽子 高岡茂子 高垣敏子 河相美代子

高杉究作 武村一美 谷内拓庵 工藤千代子

丹下凱夫 永見心咲 畑佳余子 国塩志保里

福力明良 藤井智史 松田龍彦 古山はつ子

丸橋野蒜 丸山威青 宮本信吉 高橋由紀女

紫しめの 目賀和子 安原 博 田中ケイ子

山下公子 吉原信子 田辺たかき

中力美美子 真神はすみ 巻尾ひろし

山崎三千代 しばたかずみ

【広 島】 石原淑子 岩本笑子 瀬戸れい子

大森昭恵 鴨田昭紀 岸本 清 田辺与志魚

北村善昭 小島蘭幸 小畑宣之 吉川美佐子

笹重耕三 塩谷邦子 末長恵子 土井輝恵

錦 武志 野村賢悟 飛田陽子 日谷 寛

松尾信彦 村上和子 村田幸夫 山本恵子

六田半徳

【山 口】 青木隆子 有海静枝 上村夢香

楠川道子 坂本加代 中前幸子 平田 恵

平田実男

【徳 島】 明石幸風 寺澤紀子 黒田るみ子

【香 川】 大高正和 中井里美 川崎ひかり

安田翔光 吉原哲也

【愛 媛】 栗田忠士 郷田みや 大内せつ子

中居善信 花岡順子 黒田茂代 柳田かおる

西田美恵子 よけだろくろう

【高 知】 岡村千鳥 広瀬鮎美 清水由紀子

【福 岡】 奥 正之

【佐 賀】 西村正紘 仁部四郎 真島久美子

真島美智子

【熊 本】 倉光雪子 黒川孤遊 太田玉流川

杉野羅天 徳九浩二 中山好汰 阪本ちえこ

中原たかお

【宮 崎】 黒木せつよ

【鹿児島】 平瀬美蓉 前田洋子

【沖 縄】 禰もと 島尻 卓 上原とよ子

高良秀光 前川 真 宮すみれ 崎山としこ

森山文切 島村つばき 真栄城千矢子

本社 四月句会

◇四月十日(月)午後一時
アウイーナ大阪

花曇りの十日、四月句会は二二一名(投句十名)の参加で開催された。

今月のお話は北野哲男氏。題は「日本ミツバチのこと」。西洋蜜蜂と比較しながら日本蜜蜂の特徴・性格や現状の問題点をユーモアたっぷりの口調で分かりやすく解説された。約二十五年前から趣味で始め、三年目には一つの箱から二十五羽もの蜂蜜が採れたのに数年前、蜂の大量死という変異があつて以来最近は一羽も採れない。現状、田畑にイナゴ、蛙、ミミズ等が激減、雀や鳶が飛来する姿も滅多に見られない。これは恐らく田畑に散布されるネオニコチノイド系農薬が原因、今まさに、田園地帯の生態系が揺らいでいる……と危惧しておられるのが印象的であつた。

最後に、鈴木いさお氏のリードで「春が来た」を元よく全員合唱。(正彦)

月間賞は 木藤こみつさん(豊中市)

(司会)真理子・隆彦(協取)扶美代・勝弘

(受付)靖博・美智代(清記)慈彦

席題「四角」 藤村

亜成 選

直角が四つ正義の顔をする
三角も四角も丸も愛である
四角いな丸いなわたし皆私
弾力で丸も四角もこなします
かたくなに四角守っている豆腐
童顔が四角になつてきて大人
角張った顔でまあるい声を出す
真四角な紙でも折れる丸い月
父は正方形 僕は多角形
優しさも四角に切れれば角が立つ
トランプに安倍キム習が画く四角
ミサイルとテロが地球を四角にす
苛立ちに四角い涙溢れ出る
四角四面そんな夫に惚れている
四角四面が言うジョークつぼくなる
丸ビルを囲む四角いビルばかり
四角はつた上司が代わり課が和む
四角四面の人生をとつても悔いている
四角な世間まるくまあるく暮らしたい
にこにこ四角い話聞き流す
怒らせて妻の返事が四角張る
あんなあもうちよつと丸くなつてや
ビル街に生きて四角になる思想
さくら咲き四角いビルの町灯す
真四角な男をふわり抱く桜

居谷真理子
川端 六点
中里はこべ
松本 柁子
石田 隆彦
柿花 和夫
森松まつお
山東日出男
藤井 宏造
山口弘委智
山岡富美子
柿花 和夫
小野 雅美
太田扶美代
清水久美子
細川 花門
松浦 英夫
島田 握夢
荒川 純甲
上山 堅坊
藤原 大子
江島谷勝弘
西出 楓楽
水野 黒兎
新家 完司

真四角をまあるく変えていく器
四角い夫の角を取つて孫と犬
手の届く範囲で暮らす四畳半
座布団の四角に父と母の影
将棋盤を見ると少年畏まる
世故に長け四角い箱も丸くする
四角四面な男を笑う象の鼻
窓開けて四角たつぷり春の風
虐待を受けて四角い竹育つ
病床の四角い窓に花吹風
真四角を愛して直角に曲がる
真四角な男のまつすぐを愛す
佳
ジェラシーを秘めて四角なアドバイス
ロボットが昇目升目を読み尽くす
四角碁盤が丸い宇宙に見えて来る
父は四角に母はまあるく子を諭す
しきたりへ愛が四角になつて行く
人
白紙一枚決心せよと言う如し
地
ま四角に生きた男の傷だらけ
天
私の四隅に父母が住んでいる
軸
怒らせてばかり四角い友の愚痴

山野 寿之
能勢 利子
山本 進
富永 恭子
立蔵 信子
前 たもつ
海老池 洋
能勢 利子
上山 堅坊
細川 花門
中村 恵
小島 蘭幸
松本あや子
新家 完司
荒川 純甲
升成 好
升成 好
木本 朱夏
渡辺 富子
鈴木 栄子

兼題「一簇」 島田 誠一選

よく見ればわたしそっくり叱れない
母は口父は背中て子を簇け
叩かれて子は簇とは思わない
じいちゃんがいるので簇にはならぬ
昭和一粒もつたないがこびり付き
営業中笑いは禁止葬式屋
奥さまを簇けそこねた或る総理
子が真似をしますと妻に叱られる
虐待を簇だつたと言いのがれ
行儀良き序列はボチの下に居る
簇だと若い芽摘んでいる鉢
夫婦善哉簇けられたり簇けたり
あの頃の父の拳固にいま感謝
大臣の口につけたい簇糸
簇でもまた下に咲く藤の花
玄関で親の簇を見てしまい
虐待と簇区別がある筈だ
近似値で生きる私の簇糸
引き受けて意地悪ばあさんしています
濡れ落葉教えて褒めて主夫にする
簇だと昭和の母の鯨尺
手を合わす事から母に教えられ
ひもじさを知らぬ子供迷い箸
規制より自製のこころ簇する
嫁ぐ娘に渡す簇の仮免許

榎本日の出
福田 好文
升成 好
小島 蘭幸
前 たもつ
太田としお
水野 黒鬼
北野 哲男
大内 朝子
細野 半六
伊達 郁夫
上田 和宏
初代 正彦
木本 朱夏
田中 敬介
堀 正和
川端 六六
池 森子
田中ゆみ子
田中 敬介
油谷 克己
松本あや子
澤山よう子
澤井 敏治
伊達 郁夫

三角も四角も簇れば丸い
礼節をひらりとまたぐ長い足
ボチでさえお手ぐらいなら出来るの
だとしても教育勸語あかんやろ
半世紀妻にしつかり簇され
礼儀作法なくて育つた脚線美
お尻ペンペン簇の原点と思う
愛なくば虐待となる子の簇
箸づかいとてもきびしい父でした
お育ちがばれたセレブの飲みつ振り
やさしさを絆の端に見る簇
世代間格差簇が揺れている

佳

ままことのママは小言をたんと言
犬でさえ三遍言えばわきまえる
来てすぐに仏壇へ向くちつちやな手
百襲めて一度叩いておく簇
青い地球守る簇がひからびる
人
最大の簇は平和守ること
地
玄関に家の簇が脱いである
天
しつけ糸ばらり わたしは春の蝶
軸
責任の火の粉払えぬ子の不出来

池 森子
渡辺 富子
中岡千代美
江島谷勝弘
森松まつお
丹後屋 肇
太田扶美代
長高 俊雄
安土 理恵
柿花 和夫
失 名
山岡富美子

兼題「ランチ」 堀 正和選

通り抜け桜たのしみ握りめし
ハルカスの天辺蝶も来たランチ
鴨川に春があふれる松花堂
船上のランチも楽し波光る
ランチョンマツト敷いて一人のカップ麺
素うどん済ますランチに誘われる
海からの密輸ランチのパトロール
キムタクとランチしている白昼夢
ランチしてしばし昼寝の雲に乗る
時折はランチ誘おう車椅子
AランチかBか悩んでいるコイン
どっちみちうどんかソバになるランチ
おばちゃんランチタイムは目茶長い
おしゃべりもランチタイムのBGM
妻ランチ僕はうどんで子はマック
年金の支給日だつてBランチ
お子様はあるのにシニアランチなし
ボケモンをおかずにランチする息子
ランチぐらいと付き合ったのが悪かった
弁当のI LOVE YOUに胃がもたれ
昼のカフェ^{ひんが}一人に居る僕
ランチ付きにひかれ講習受けに行く
昼ぐらい好きにさせてよ血糖値
ランチタイムちよと気取つて五つ星
ランチはワンコイン夜は縄のれん

遠山 唯教
柴本ばつは
遠山 唯教
若松 雅枝
大久保眞澄
津守 柳伸
川端 六六
大内 朝子
村上 直樹
矢倉 五月
澤井 敏治
森松まつお
山東日出男
山根 妙子
村田 博
川端 一步
宮崎シマ子
渡辺 富子
鴨谷瑠美子
内藤 憲彦
中里はこべ
藤原 大子
木本 朱夏
能勢 良子
上山 堅坊

ランチにも一本付けるお留守番
給食はみんな食べたと手柄顔

山本 進
吉岡 修
兼題 「ぐずぐず」 松原 寿子 選

サラメシのキャラ弁つくり遅刻する

指定席買つてハラハラさせるぐず

決められぬ父の背中を母が押す
ぐずぐずの妻に付き添うああしんど
ぐずぐずと言う大臣がまた謝罪
ぐずぐずしてたらタクシー代をくれはった
背中にも鬼のぐずぐず出たがらぬ
アラフォアの恋占いが続いている
二番手で咲ける幸せだつてある
断ち切れぬ未練引きずるのは男
ぐずぐずとして着実に打つ先手
ぐずぐずの真ん中辺は未だ若葉
ぐずぐずと春を居座る花粉症
ぐずぐずに黙つて俺に付いて来い

ランチ位でプロポーズするのは止めて

清水 英旺
津守 柳伸
太田としお

昼メシをランチだなんて気取るなよ

伊達 郁夫
柿花 和夫

おにぎりがひとときわ旨い野良仕事

石田 隆彦
油谷 克己

午後2時にランチタイムの小商人

川端 一步
吉岡 修

店長はランチタイムもない仕事

太田としお
西出 楓楽

激論が社内食堂まで続く

萩原 狸月

出世した部長になってAランチ

老いらくの恋はランチでこ足りる

ランチから映画へ妻と待ち合わせ

ラン

ランチの席にシリア空爆告げられる

煮え切らぬぐずぐず虫がてこずらす

残飯でランチを浮かせ募金する

ぐずぐずと女の愚知に喝入れる

ダイエツとするならランチ抜きなさい

ぐずぐずするとあの世の椅子が売り切れる

お昼なら僕も食べれる北新地

クラクション鳴らして妻の化粧待つ

大阪のランチうとんにいなり寿司

ぐずぐずと築地市場が宙ぶらり

目も鼻もティッシュ足らない花粉症

あの人と一緒にエレベーターはいや

女子会の妻は懐石ボクはパン

ぐずぐずと決断できぬ迷い癖

昼弁当ふたつ作つていく娘

ぐずぐずと迷えば妻がばつと決め

軸

札束を積んでぐずぐず言わさな

OB会ランチタイムのビヤホール

ぐずぐず言うなトランプ様のお通りだい

好きなら好きぐずぐずすると桜散る

今井万紗子

村直樹

石田ひろ子

水野 黒兎

油谷 克己

升成 好

島田 握夢

阿部 俊八

村田 博

荒川 鈍甲

酒井 紀華

村上 直樹

松本あや子

黒岩 靖博

阿部 俊八

島田 握夢

升成 好

油谷 克己

水野 黒兎

石田ひろ子

村直樹

今井万紗子

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

のろのろと山のあなたへ消えた夢

渡辺 富子

軸

足止めをしたのは私のせいだろう

兼題「刺す」

三宅

保州 選

目出し帽被る男がホシらしい
臆病で薔薇は鎧をつけている
風刺画のネタは尽きない永田町
試食品一人一個と爪楊枝
突き刺されながらたこ焼き丸くなる
刺し違え覚悟の辞表ポケットに
マイナンバーあれば刺客に違いない
老々介護刺し違えたい日もあろう
千人針二度と刺さない刺させない
指チクリ男やめめのボタン付け
父さんを真似てはダメと釘を刺す
刺股をまさかに備え置く寢床
竹串を刺して私の熱れ具合
どうせなら優しい人に刺されたい
弱気など串刺しにして前を向く
匿名がとどめを刺しにやって来る
おしゃべりにアメをしゃぶらせキを刺す
桜咲く刺さった棘がまだ抜けぬ
同情の視線も刺さる車椅子
チクツとしますとチクツとした注射
流し目に刺されバランス狂いだす
残高の軽さが胃の腑刺してくる
ふる里を思えば頬を刺す夕陽
身を守るほどの棘なら持ち合わす
わら人形刺されて涙また溢れ

喜田 准一
大久保眞澄
澤井 敏治
堀 正和
木藤 こみつ
松浦 英夫
太田としお
西出 楓楽
笹倉 良一
山本 進
上田 和宏
初代 正彦
中岡千代美
榎本日の出
吉村久仁雄
小野 雅美
細野 半六
伊達 郁夫
山本希久子
藤井 宏造
吉岡 修
山本 昌代
山田 耕治
太田扶美代
小野 雅美

釘ひとつ刺して敵父は背で赦す
幾人を刺したかトゲのある言葉
隣りは隣り私が好きなのは目刺し
ひと言がころに刺さる割れガラス
満月を串刺しにした流れ星
喜怒哀楽母は刺繍にして暮らす
刺すような視線躲してから苦難
鎌の月卑しき心刺しに來た
後悔の棘がわがまま戒める
視線刺す中を歩いてから大人
刺されてみてやつとわかつたバラでした
それはそれこれはこれやと釘を刺す

佳

島田 誠一
安土 理恵
田中ゆみ子
松尾美智代
榎本日の出
渡辺 富子
藤原 大子
柴本ばつは
宇都満知子
山田 葉子
松浦 英夫
谷口 義
太田扶美代
渡辺 富子
石田ひろ子
木本 朱夏
島田 誠一
西出 楓楽
谷口 義
水野 黒兎

あの頃は意欲五体に満ちていた
使い込んだ辞書を小脇にやってくる
生きる意欲老いた桜からもらい
当たつても又当たつても行くルンパ
一番乗り最前列にいる句会
少々の自惚れ生きる糧にする
満ち足りて意欲ふんわりとけていく
やる気だけあるな腕まくりをしてる
点滴に命のめぐる音を聞く
ほとばしる意欲さくらが咲いている
春ですなスイッチオンで挑戦だ
意欲湧く倚りかからずと決めてから
一匹と男に生まれ言われない
叩きのめされてもまだ冗談が言える
時々煽てて燃えさせる意欲
雨風をものともしない趣味の会
ジャンプ傘程の意欲は持つている
何処までも生き抜く意欲夢あまた
トランプのやる気トマホークの乱射
ライバルに意欲隠して取るトップ
ほうふらの生きる意欲に目を見張る
痛み止め打って逢いたい人に逢う
青レモン明日は鳥になるつもり
復興への意欲を詰めた道具箱
白寿へとレースの下着買う傘寿

兼題「意欲」

小島

蘭幸 選

清水 英旺
小谷 小雪
山本希久子
田中 敬介
川端 六点
矢倉 五月
能勢 良子
片山かずお
笹 百合子
谷口 義
堀 正和
松本 柁子
海老池 洋
藤村 亜成
中岡千代美
山野 寿之
石田ひろ子
今井万紗子
森 廣子
小野 雅美
藤井 則彦
安土 理恵
木本 朱夏
米澤 俣子
笹 百合子

日々切磋琢磨 巻頭視野に置き

一〇〇個目の資格取得にトライする

這上がる意欲を燃やす農のメモ

iPS生さる意欲の灯がともる

3度目の遍路先導買つて出る

明日へ向く意欲無くせばおさらばさ

ゴールまで女でいたい濃いろージュ

迷惑でしようが百歳まで生きる

見つめてくれる人が居て跳べる

割り勘に意欲全開アルファー波

同窓会あと三キロのダイエツト

三猿にはならぬ眼鏡を買い替える

佳

あの頃の曲をかけると湧く意欲

八十の記念にスマホ買いました

始発電車今日の意欲が乗っている

スクワット老後のためという傘寿

耳で眼で毛穴で聴いた師の言葉

人

北斎の波は意欲を超えている

地

詠うために遊ぶ飲むために歩く

天

意欲をなくすともう生きられぬ拉致の親

軸

プロになり燃え尽き症候群抜ける

細川 花門

清水久美子

米澤 俣子

升成 好

清水久美子

中村 恵

島田 誠一

新家 完司

小谷 小雪

澤井 敏治

宇都満知子

田中ゆみ子

立蔵 信子

山田 耕治

中村 恵

澤井 敏治

居谷真理子

荒川 鈍甲

新家 完司

木藤こみつ

句会 燦 燦

三月句会を読む

岩 崎 眞里子

ばつと咲くために桜はいま我慢 一 歩

曇天の重さに耐えようやく膨らみ始めた花芽が、共に我慢の日々を過ごした同志のように思えた。力強く春へ向かう一句。

五円玉拾いギツクリ腰になる

母さんと思わず呼んでみる鏡

さよならがリボン結びで座つてる

まだ言えるタケタテカケタ大丈夫

よく転ぶ男が何故か怪我をせぬ

足指・胸筋・膝、顔面擦り傷：今年に入って次々と更新され

ている我が痛み。だから五円の後悔、鏡の国へのSOS、悪い

方へ向きたがる思考に共感。でもまだ早口言葉は言えるし、私

より転ぶ奴はピンピンしている。この五句は、転んでも怪我を

しないようになりなさいと、指導書として痛みが編んだ作品。

職人の手元昆布のリボン舞う

定年の夫へブルリーリボン賞

幸せとどこか似ているシャボン玉

職人の手仕事をみるのは楽しいが、多くの仕事は覚ええない。

何十年か経て迎える定年だがそこに辿り着くことは、ブルリー

ボンを標掛けするほど難しい。でも振り返って見れば人の一生

も幸せも、虹色に輝く一時のシャボン玉と同じかも知れない。

パパに似てほくに似ているお婆ちゃん

多少の怪我承知でいこうこれからも

春の陽を浴びているようなパパと僕とお婆ちゃんの関係性が

ぬくぬくと心地良く、多少の怪我は：と思えてきた。

竹とんぼ屋根の向こうを見ておいで 好

もつと高齢化が進んでも、子ども達の明日がこの世の明日。

おどろおどろ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

朝礼時呪文の如く読む社訓
擦り傷も恋煩いもちんぷい
あの人へ流し目という呪文かけ
大丈夫背中をボンと押すコーチ
チンブイ蓋を開けると若返り
薬はいらぬちんぷいぶい
可愛いと言えば可愛くなる呪文
好きすきスキこれで夫は馬車馬に
口から口へ大きくなってゆく波紋
食卓に波紋を投げる塩加減
一滴が波紋となって大河なり
トランプ氏入国拒否で波紋呼ぶ
なにげない振舞い波紋誘ってる
ファミリーの暗殺めぐり波紋呼ぶ
その先は考えてない小石蹴る
ふと触れて平気装う君の指
失敗でした謝りはった整形医

隆 昭
千代美
宏 造
直 子
満 作
昌 紀
安 代
たかこ
かりん
俊 雄
志 津 子
公 平
廣 子
舞 夢
ゆみ子
里 子
としお

明るさを装いながら墓洗う
求婚へ平気装う胸の内
背伸びした装いはける河内弁
平然を装う足は震えてる
雪化粧富士はやつぱり日本一
花嫁衣装父も眠れぬ夜を明かす
桃色の装い春を呼び寄せる
無関心装いガムを噛んでいる
装いを今か今かと待つ蕾
豆まいて鬼を装い風邪ひいた
春の虹別の私がよくみえる
もう好きにさせて下さいこれからは
片づけただけで終活かと聞かれ
ビビってるそろそろくるか認知症
足もとからそろそろ老いが見え隠れ
丸い背を見ればそろそろ許そうか
人生の終着駅がそろり来た
そろそろとチョコの効果がでる時分(奥)五月

川柳塔みちのく(青森) 相見 則彦報

雅 美
賢 子
朝 子
大 子
福 貴 子
美 籠
ふりこ
芳 香
妙 子
重 信
哲 矢
昭 萌
美 世 子
満 知 子
日の出
ばっは
五月

空までも分けなきや済まぬ人の性
川柳を詠む楽しさ分ち合う
田植え歌補植も終えて秋を待つ
論された教えに胸が熱くなる
ゆらゆらと危なっかしい弥次郎兵衛
自立して段々太る雪ダルマ
目に見えぬネットの先に鬼が居る
ママばなれ自立の出来ぬ草食系
ひとつしか無いものならば手をださず
D51が金の卵を乗せて発つ
没句からまた言の葉を選び分ける
まだまだと鷹にするため鬼になる
卵白が決めるシフォンの舌ざわり
愛と憎切り取り線の曖昧さ
自尊心めばえ自立へ胸を張る
子の楯になつてじんわり詫びを入れ
握手してじんわり鬼の面除く
民話とろりとろり孫より先に寝る
早口を咄しやく出来ないままエント
千鳥足強い味方の月明かり
渡れないあなたの胸にかかる橋
ジャッパ汁食べ得意のあどはだり
気がつけばまたひとりと言っている
田畑の買い手が決まり嫁もくる
気むずかしい赤ワインと合う津軽弁
川柳ふつもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

吹 喜
久 美 子
井 蛙
龍 馬
小 と み
ひ と し
洋 子
一 吞
規 子
初 枝
隆 樹
柳 子
英 子
のぶよし
京 子
きよし
吞 舟
黙 人
ふさふ
花 峯
氏 加 子
一 花
霜 石
つ と む
和 香 子
無 限

福の神潜んでないで出ておいで
鬼が近くきれいな様見る前に
ここの一番弱いメンタル顔を出す
賢いと言う字は俺の為にある
メンタルの弱さを隠し虚勢張る
賢過ぎ天狗になって落馬する
宇宙に潜む星の一つが亡父の星
初雪に父の真似する頬被り
あどめても昔の嘘が顔を出す
口先のトランプに安倍遊ばされ
山猿が賢いふりをして溺れ
老々介護メンタル強くなる絆
メンタルが時々弱音困らせる
自宅では死ねなくなってきた不幸
仕事あるお金もあるが嫁がない
ドカ雪でも芽吹く準備は怠らぬ
可愛い炬燵の中でもういいよ
着飾ってお化粧しても潜む歳
似て来たな遺影の父に瓜二つ
釘一本打てぬ賢い夫となる
賢げにしてもメッキはすぐ剥げる
メンタルを忘れて袖の下に酔う
賢い鯛はエビでなければそっぽ向く
まだ夢が一杯あって呆けられぬ
若い気で居ても身体が動かない
トランプのエゴが世界を弄ぶ
押入れに突っ込みあじめ客を待つ
三歳児オモチャあどめるのも遊び

天 翔 昌 鼓 一 平 凱 柳 雅 女 とも 湖 静 夫 隆 浩 紀 美 江 三 千 代 金 祥 真 智 子 賢 悟 克 也 真理子 美津子 さ ち 茶 人 茂 子 一 瑤 妻 子 蟹 郎 雅 女 清 信 回 春 子 美 恵 子 節 子

コナンなら難問だつてすぐに解く
メンタル面補強の酒が泣き上戸
潜む才能使い切らずに錆び始め
賢くはないが必死に生きている
賢い人も時には道を踏み外す
遅咲きの花のメンタル見栄つ張り
方言あどめる」は片付けるの意味
富 柳 会(大阪) 関 よしみ報
釘の意地抜けまいとして錆びていく
妄想に狂い般若となる嫉妬
飛んでいる言葉に五七五の翼
幸せの形に結ぶ今朝の帯
私の狂気を止めるのは誰だ
狂言に義理人情の人間図
春風の誘いを待つて耳掃除
玉筋魚の釘煮は瀬戸の早春譜
段落に釘刺しドラマ序に戻す
苦境にも耐えてアタックする勇氣
わたくしを狂わす人の春を待つ
釘抜きに負けるもんかと釘の意地
冥土まで踊り狂うて逝くつもり
アタックは無駄なことよと美女が言う
忘れないように貴方を忘れよう
人間の愚か花の季を狂わす
月の視野私ひとり眠れない
たびだちの子へ餞は親の釘
添削の朱に曳き出され陽が昇る

八 千 代 振 作 千 枝 子 美 佐 枝 由 美 子 一 粹 常 男 仲 雄 文 重 田 鶴 子 慶 子 朋 子 澄 子 清 仁 壽 峰 高 鷲 武 人 惠 一 文 奏 子 寿 之 ア キ 欣 之 よ し み

浅 田 隆 樹 選
書初めの希望と言う字の墨の濃さ
除夜の鐘鳴つても続く介護の手
つまずいた石から貰う生きる道
哀しみの穴を覗いてふたをして
あのときの無念が繋ぎ止めている
満ち足りた日々につつくら豆は煮え
里便り生きぬく知恵も添えてある
あの人がいるなら空気をさえ薫る
今日も又少しの老いに笑わされ
チヨコ二個夫の琴線撫でている
佳句地十選 (4月号から)
古久保 和 子 選
トンネルをいくつも抜けてきた命
転がらぬ程の丸さで生きていく
そのままでいいんだ君も大根も
ゆつたりと座れる椅子を探してる
一本の補助線引いて解けた謎
還暦の赤が意外に良く似合う
泣くわたくしより笑うわたくしの方が好き
故郷のリズム半音ずれている
寒い日の日記は温度だけを書く
太陽のように輝く割烹着
希久子 久 子 三 津 子 慕 情 雅 尚 美 穂 す み 子 堂 太 正 和 あ き 子

アタックは愛の深さを朱に染める

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

収支とれはつと一息幹事役
足し算も引き算もして古希の坂
巡り来る土手の土筆は四分音符

惠美子
甚之市

この時の今が大事と風を読む
明日検診今日は禁煙禁酒です
介護できる今を大事にして生きる

汎美
宣之

町内にご意見番もいた昭和
お財布の余裕探して文庫本
好きな唄声には出さずくり返し

高明
四郎

大地からとんとん新芽押し上げる
簡単に崩れる石を積んでいる
おれが先に逝くと気楽に言うけれど

成子
ふりこ

今だから言えます貴男ありがとう
五十年夫婦の今を皿に画く
今上陛下の生存御退位の賛否

弘子
笑子

曾孫たちいいなと思えばスマホです
世話役が重荷になって知る老化
蜂朗

節子
蜂朗

いつも朝水とバナナで済ませたい
妻に物申す時には酒が要る
身の丈に生き貯えも借りもなく

史郎
盛隆

火の神に後はまかせる備前焼
豆撒きをする横綱は神である
縁ですれ神が結んでくれました

比呂子
敬子

草青くふるえていても春きてる
雨上がり兼用傘は杖変わり
曆には立春とあり雪見酒

かほる
哲男

丸ベケで答えられない幸福度
たった一言囁んでしまった丁寧語
入口はやさしく見せる深い穴

良一
恭昌

運つかむ常に精進自然体
煽てられ男が素手で火を掴む
恋ひとつつかんだ春へまっしぐら

鬼焼
淑子

川柳ささやま(兵庫)
北澤
稠民報

かほる
稠民

円満な外交の裏黒い影
十行も飛ばし結論らしきもの
簡単ではないが人間らしくする

美智子
史郎

ついかんでも最期は何も残らない
子を育て母の心がつかめたか
幸を掴めそうな手をしてる

一徳
昭紀

休めない暖房器具にありがとう
久し晴れ大忙しの洗濯機
よく動くロボットの居て家平和

真由
開子

円満な外交の裏黒い影
十行も飛ばし結論らしきもの
簡単ではないが人間らしくする

真澄
將文

今もまだ妻の心がつかめない
足指でつかみ舞台の鬼となる
要介護私をつかむ父の指

規代
蘭幸

雨上がり兼用傘は杖変わり
曆には立春とあり雪見酒
もう少しこうしていたい傘の中

真由
開子

円満な外交の裏黒い影
十行も飛ばし結論らしきもの
簡単ではないが人間らしくする

真澄
將文

福よ来い今年は鬼になった私
悲しみも辛さも洗う春告草
師の教えふつと浮かんできた至福

千代美
歩美

とんとんと進んだ僕と君の仲
ここにきてボロが出ました国有地
妻病んで男の音で朝刻む

朝子
優弘

三方が一両損でケリがつく
愛があればなにも要らない古希半ば
同じ歳同じ病気で同じ墓

紀雄
崇明

梅の花一輪うきうきオーラ待つ

京子
栄恵

酔う程に臆病者の武勇伝

和之
國治

好きな好き嫌いは嫌いそれでいい
生きる意味シンプルに問い組む坐禅

富子
理恵

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

栄香

半徳
輝恵

善輔
さゆ子

善輔
さゆ子

簡単で分かりますく破天荒
円満にはつれ見つけてはじくられ
遺産ゼロ採めようがない子沢山

敬子
和夫

吸って吐くただそれだけでいいのです 喜八郎

南大阪川柳会 津守 柳伸報

満たされて顔も心も有頂天
春風の街へ出かける有頂天
血圧が妻の機嫌で上下する
番付の上下気になる相撲取り
合宿で上下関係会得する
モチベーション言葉一つで上下する
指迷子勝手に画面上下する
元部下の下で働く再雇用
くどくどと言ってる方がボケらしい
風邪引くなくくどくど母の電話口
ばあちゃんよクドイ寝め方止めてんか
相植がしんどなります酔っぱらい
くどいけど歩きスマホはあかんでえ
追伸の一行読めば足る手紙
口下手が想い届ける筆はまめ
師の手紙何度読んでもありがたい
もう顔を見るのも嫌と書いてある
水色の手紙太りすぎやであべ静江
亡き母の最後の手紙宝物
老いた母きつとエンピツ嘗めて文
絵手紙のはみだしそうなチューリップ
金送れの催促でよい手紙書け
10枚の切手纏ってきた手紙
太い釘打って父から来た手紙
全身で笑える人と酒を酌む

更紗 紀乃 恭昌 いさお 柳伸 国和 裕子 篤修 シマ子 タカ子 勝弘 あや子 歌留多 俊雄 一步 和雄 昌紀 武臣 あさ子 ばつは 克己 東風 楓楽 郁夫

準備して笑い所を待つ舞台
なるようになるさと笑う女坂
今日の笑い日記に付けてよく眠る
欲ばけの願いは神が苦笑する
ひとりばち笑い袋は押し入れに
まだ借りたままでしたんかワハハハ
鏡にはあふれる笑い貯めておく

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

洋服着ても和服を着ても日本人
イマジンを歌っても平和は遠い
和の論理何でも通るおかしいわ
余裕だな大風呂敷を拡げてる
ひと呼吸余裕が次の飛躍産む
追伸にはんとの心読んでいる
賢治読む春にかわってゆく星座
浅かった読みを兎は悔いている
相植を打ちつ相手の本音読む
読むクスリ佐藤愛子が離せない
読んで泣くまでも筆者の思うつば
ひらがなの母の手紙は読み返す
老いの目に読めて分からぬカタカナ語
目を読んで今の貴方を知りました
ハイネの詩音読していい気分
酔っ払いの気持は読める酔っ払い
ラッキーな夕暮れ月と金星と
はい私しあわせですと言ってみる
体調が良くてはじめてみなラッキー

直子 弘子 たもつ 実 志華子 栄子 弘委智 文子 寿代 朋子 畔 左余 注湖 芳山 桂子 ゆき 美智子 紗季 久絵 ひふみ 涼子 輝山 弘充 知恵子 孝子 俊子

幸運を出雲の神が保証する
ラッキーも心しだいで決まること
人間に生まれた今も生きている
流行を追ってもなぜか俺の風
遮断機はビシヤリ追うなど切るタンカ
ちようちよつて追いかける人生だ
追っかけてズドンと落ちた落とし穴
草庵

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

名人の幼い目には歳がない
MRI脳に異常がみつかった
お不動に触れて誓って縄のれん
面倒な男が来たな遠まわり
目一杯おしゃれた日の通り雨
いつまでもどきどきさせる彼がいる
触診が五臓の直訴聞き分ける
お喋りの会で世間の風に触れ
アラサーもアラフォーも居る我が家です
温い手で触れて笑顔になる介護
高校のフオークダンスで初タツチ
母の詩のんびりだけど難しい
左手まで添えて握手をした別れ
触れたつてもう花びらは散りません
休園日のんびりしてる象の鼻
どきどきと夫婦喧嘩を子が見てる
恵まれておまけを生きる共白髪
おばちゃんの悪趣味過去に触れたがる
法に触れてもうやむやにする権力者

雪代 邦代 あきら ひすい 草庵 唯教 世紀子 富夫 ゆみ子 雅美 舞夢 誠一 清晋 佳子 ひろ子 清 健吾 敏治 月子 俣子 さくら 憲彦 和夫 八千代

神木に触れてご利益期待する
 この金に触れたらあかん葬儀用
 のんびりと閉館のベル聞いている
 大阪の春に触れます通り抜け
 にここと笑うほつべに触れてみる
 昭和史に触れて忍の字蘇る
 触れただけ姿そのまま椿落ち
 人情に触れると聞く胸のバラ
 ときどきは時どき止まる不整脈
 手が触れただけで伝わるもん無限
 ちよつと手に触れただけで怒りなや
 B面に触れて優しい人と知る
 風に触れヒラヒラひらと花のショ
 メダカ棲む小川見えていた遠い春
 高嶺の花眺めるだけでしんぼする
 のんびりは顔だけわたし火のクルマ

和歌山三幸川柳会 武本

光雄 澄空 扶美代 五月 かりん 若芽 妙子 好子 大造 愿 シルク みつ江 ヨシ枝 時雄 としお 天笑

真剣に拝めば開けてくれた窓
 懸命に拝む背を押す百度石
 母となる日を祈願する鬼子母神
 今年こそ戦火なくなれ地球から
 お互いを拝めば上手いくだろう
 武器を持つその手で神に跪く
 今日も無事ただ有難く手を合わす
 今日は無事感謝し拝む大落暉
 手を合わせ母が炊いてる三分粥
 自然への崇拜忘れ温暖化
 百歳を拝むと迷い消えました
 お日様を自然と拝む歳になり
 新春のスタート先ずは笑顔から
 スタートを切るにはまだの自己評価
 スタートでフライングして立ち直る
 夢いっぱい抱いたスタートだったはず
 きっかけは背中を押してくれたから
 一瞬の迷いよぎって出遅れる
 靴紐を堅く結んで初出社
 煮えきらぬ背中に友のゴーサイン
 父を越す覚悟で父の駅を発つ
 羊水の海が誰しものスタート
 母さんのスタート春は忙しい
 スタートの呱呱の声にもある格差
 地鎮祭さあこれからが正念場

京都塔の会

山田 葉子報

八重子 富香 幹子 一雄 倫子 純子 彦弘 みつ江 起世子 敏照 あき子 昭枝 よしこ 次根 義雄 美羽 知香 明子 昇 章子 菜摘 保州 絹子 愿 当代

うっかりと発した言葉本音だろ
 金びらの石段よいしょ上り切る
 励ましとよいしょをいつも孫にやり
 子供でもほしい時にはよいしょする
 日々発見三歳児には未来だけ
 ぬるま湯につかっていては進まない
 正座して妻の文句に耳を貸し
 トランプのツイートが世を掻き乱す
 喜寿すぎて未だ発展途上です
 見送りの惜しむ間も無い発車ベル
 思いやる温い一言から気概
 始発ベル同じ顔ぶれ同じ席
 よいしょだとわかっていてもいい気分
 人わんさそれでもひとりぼち生きる
 喜びも悩みもわんさみんな過去
 温いなあやっぱり夫婦あんたの手
 古里の温い訛のおもてなし
 春間近発火ボタンを押すところ
 突発性から持続性へと物忘れ
 始発まで眠っていたい終電車
 子のズボラ行儀の悪さわたし発
 もう一度発作が起るほどの恋
 一斉にサクラがサイタ発表日
 よいしょと肩の荷降ろす定年日
 暇なんです時間わんさか消えていく
 明日よりも今日を大事によいしする
 赴任地の人の温み有難い

りこ 肇 泰夫 弘子 福子 弥生 昭 正彦 光久 忠子 ふりこ 保子 朝子 ゲン吉 求芽 満子 かずお 万紗子 弘之 北舟 宏子 則彦 英旺 元一 文代 洋志 義昭

川柳大坂

山崎

珠生報

風読んで殺然と猫は猫である
健やかさ願っているが儘ならず

孔美子
ゆり子

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

鋭い目消えた恩師と古希の会
言い訳をすればする程風が舞う

綾子
美ツ千

細身なのにふくら見せるジム通い
買い過ぎた備蓄食品腐りそう

雅美
まみ子

信号も空も青色サイクリング
健やかに卒寿でしてる野良仕事

弘子
重忠

適当な住所氏名でチェックイン
もうあなた私自由に生きますね

三樹夫
美千代

赤ちゃん白紙大人が泥を塗る
母思う健やかな日のあの笑顔

照彦
草文

暗闇で流した若き日の涙
すぐに泣く癖を味方にしています

一子
一子

私がまあるくなつてから無風
輪の外に出ればみにくい風に会う

茶子
八重

五年添うた女房が認知症
天井の裏に内気な福の神

天翔
清信

キャンパスの白さに君をのせて描く
やさしさも隠れてしまう鋭い目

実満
完司

一升の涙流した父母の葬
人生の一コマにする涙の日

重忠
完司

よく笑う妻よ家計は健やかか
垢や染みもう白紙には戻れない

和子
螢

横綱の涙に発句爪を研ぐ
妻の癖よく沈黙の刑に合う

茶子
公子

ご意見の鋭い事に感謝する
健やかに二度寝ができる春うらら

すみれ
かおる

米櫃は常に満たして戦中派
出発は同時ゴールはテープない

美恵子
一平

油断して鋭い牙におそわれる
びっくりが白紙に戻りひとり立ち

京
富久江

北風が涙を誘う冬の朝
ランドセル桜吹雪に向けて発つ

節子報
山下

真つ白な紙に託した未来像
二本杖健やかですが間に合わぬ

妻
振作

出発は同時ゴールはテープない
北風が涙を誘う冬の朝

節子報
山下

健やかな証か今日もうまい酒
我が案に鋭い指摘うろたえる

裕
満

流すなら嬉し涙にして欲しい
仏閣の天井画繙く歴史

敏子
雅子

ときめて白紙に踊るラブレター
大家族健やかな日も悩む日も

いさを
小満

出発は同時ゴールはテープない
北風が涙を誘う冬の朝

幸子
安子

鋭いなあ君の視線は多角的
健やかに育てば次の欲が出る

蟹郎
恒

仏閣の天井画繙く歴史
流すなら嬉し涙にして欲しい

弘子
雅子

百歳が白紙「ふるさと」唄いけり

蟹郎

仏閣の天井画繙く歴史
流すなら嬉し涙にして欲しい

弘子
雅子

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

飼い犬は僕の本心知っていた

盛桜

目薬で涙に見せる名演技
築百年天井裏にあるロマン

振作 彰夫

後期高齢まだ生きがいを探してる
肩書きがズラリ名刺が重過ぎる
人間を卒業したくないです

いさお

もう一度聞きたい亡父の怒鳴る声
バラの花刺を宿して咲き誇り
肩書きがとれて野心も遠い空

正子 久美子

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

探したら出るわ出るわの不用品
卒業式涙止まらぬ子の答辞
盲導犬大役を終えゆつくりと

ダン吉

羨ましい野心のままの猫の恋
玉の興乗ると決めてた20代
下味を手抜きノレンが泣いている

悦夫 清乃

それぞれの芽が笑いだす春になる
ふつと芽吹くものあるらしい独りごと

夕胡

春まだか球根土中苛立って
マイ名刺一部に詐称しています
卒業は出来ない趣味の五七五

喜久子

願かけて手間を省かず千羽鶴
大阪弁だじゃれ省くと味気ない
断捨離を迫る女房と睨めっこ

弘光 文子

何の芽が知らぬが水をやっておく
芽が出たぞ男我慢の宮仕え

あきこ

二つ三つ幸を探してつく眠り
卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして

ひろ介

来る春にどこからとなく粹なうた
栗拾いどんぐり一つ入れてある
苦勞さえどこ吹く風のいい女

一彌 克三

根っ子ある限り芽が出る早春賦
ありがとう今日も満足して生きる

紀子

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

光男

九時からのドラマ見だすと犬すねる
来る春にどこからとなく粹なうた
栗拾いどんぐり一つ入れてある

修 政夫

褒め上手満足させて役を振る
腹抱え笑えた今日に満足す

保州

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

美子

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

良雄 五月

満足してます卒業すぎてます
満足が次の挑戦掻き立てる

和子

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

フジ

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

和代

満足してます卒業すぎてます
満足が次の挑戦掻き立てる

英子

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

真

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

欣之報

満足してます卒業すぎてます
満足が次の挑戦掻き立てる

富美子

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

かつ美

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

土田

満足してます卒業すぎてます
満足が次の挑戦掻き立てる

ほのか

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

ヨシ枝

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

壽峰

海外旅行今さら英語習つても
今さらと言わぬが花と言葉呑む

紀久子

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

雄太

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

紀雄

胸の内今さら聞いてどうするの
反省をするのが遅いキリギリス

京子

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

泰子

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

かこ

遅すぎた返事波間に消えて春
喉元に言わぬが花を詰めておく

ちづこ

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

仁

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

高鷺

年金をすべてエステに母卒寿
身分証すすべの顔はつておく

日出男

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

ちづる

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

惠

すすべに磨いて返したい命
めぐみ

小雪

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

清

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

耀一

まきみ

人間を無事に卒業待つ浄土
肩書のとれた名刺がよく遊ぶ

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

六点

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

森子

弘子

屈辱の降格名刺出し渋る

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

高鷺

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

安男

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

章司

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

清

探求の奥は無限の広辞苑

欣之

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

淳司

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

朋子

はんやりと寝転んでいる花の陰

槌原

卒業は出来ない趣味の五七五
必需品すっぱ隠しのマスクして
卒業の袴姿の孫可愛い

弘光報

新雪を漕いで頂目指す脚
私の非常扉は諭吉です
愛されて菜の花燦々と笑う

仁

八尾市民川柳会(大阪)土田

欣之報

喜寿の春五体は冬のど真ん中
打ち寄せる波に帰らぬ声が乗る
動かないで私がドアを閉める迄
毎晩の酒は命の常備薬

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

この山を越えたらきつと元気づく
元気だせよ今日が過ぎれば朝が来る
おだてられ元気な年寄り演じてる
電話口元気な声に安堵する
雑草の踏まれ上手を見て習う
踏みつけにしたい心を抑えてる
踏まれてもタンポポ顔を出している
ストレッチたまには四股を踏んでみる
百歳をめざし踏む踏むベダル踏む
白バイがくるり向きかえ追ってくる
おらが国くるりと全部おらが海
戸締りが気掛りくるり後戻り
百合の花くるりと花弁桜色
当選後くるりと見事背中向け
懐も頭も骨もすかすかだ
すかすかの年寄り小言ばかり言う
蔵の中すかすかにした三代目
すかすかの肌の女も化粧する
懐がすかすかになる慶弔費
すかすかの心で介護してごめん
布団踏みふんだフトンに足取られ

加央里 常男 慶子 欣之 康子 龍枝 鬼一 智恵子 日出子 萩江 瑞子 けいこ 醉芙蓉 重忠 石花菜 祐子 英子 次男 由紀子 茂夫 野蒜 紀美恵 風露 茶子 照彦

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

憲法が柱になっている平和
日溜りへ春風が押す車椅子
どう生きる弥陀の心に問いかける
頼りないけれど我が家の床柱
気骨ある一家の柱好々爺
子は欲しいでも邪魔にする保育園
ありがと叫びたくなる青い空
春日和ゆり揺られて乗り過ぐす
ボケ防止と言う妻は難飾る
傷心をそとと労わる花の風
びりびりと親も氣遣う子の受験
ゴキブリが電車の座席独り占め
曲がり角弱気を押してくれた風
石柱が歴史を語る縄のれん
愚痴を聞く湯割りの梅も欠伸する
大粒の母はおばり春が来た
くどくどといわず釘刺す父の檄
はんやりと老いを楽しむ春炬燵
針の無い時計に余生刻まれる
邪魔なかがノーベル賞に辿り着く
嗚呼演歌時代の隅に押しやられ
苦勞人押しもおされもせぬ度量
お邪魔しますお邪魔しましたい言葉
押し花のままで貴方を閉じ込める
下腹が邪魔で足爪切る苦勞
なごり雪梅をハグする深情け

一步 星雨 武彦 高志 あさ子 寛昭 義昭 素子 和夫 志華子 満作 千恵子 修 堅坊 満洲夫 杵香 野鶴 集一 俊雄 朝子 勝弘 郁夫 北舟

柱時計ボーン原稿紙白いまま
頬を押すはじける笑顔返す孫
三寒の無口四温の弾む声
見ましたか雑木林のあの芽吹き
燃え尽きる前に一杯飲んでおく
新鮮な今日丁寧に生きている
この顔はくどいと云われて七〇年
ケンカするたびに話長々と
答弁はくどくと言うが中身なし
あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報
愛あれば太陽なしで生きられる
鎮魂へ頭を垂れる六年目
東西の汚れた土地に捨てるカネ
生半可覚えた知恵の痛い付け
生かされる喜び確と知る傘寿
離れと共謀罪にされるから
太陽がしっかりと抱いてくれました
勝負服生たまご二個呑んで出る
生かされて地球ぐるっと万歩計
こっそりとウインウインの天下り
芽ぶくよに食欲進む回復期
誕生を喜ぶ国と飢餓の国
蝶が舞う茄子もかばちゃも恋をする
太陽が王手をかけてくるのです
友一人月に旅立ち般若経
活断層どうか静かに願います
好きだった男も後期高齢者

克己 弘委智 洋志 ばっは 実 たもつ 縣笹 節子 正 紀雄 英夫 秀夫 秀夫 壽峰 栄子 生枝 愿 たもつ のぶ久 シマ子 信二 克己 信子 一文 福貴子 千代

拉致の娘へ老母祈つても祈つても
3・11御霊の声か波の音

黙禱を終える自由な空がある
老いるのみ^今が一番若い時

太陽に感謝現わすわが国旗

六年もたつのに仮設まだ出れぬ

十字架のように二トロを下っている

燃えつきるまで女でいたい恋しない

祈りの道熊野古道を一步ずつ

影までも祈るかたちに老いてゆく

お日様と約束がある花の種

あと四年安倍一強にさせるのか

木洩れ日の小径いいことありそう

新自由主義駄目だマルクス連れて来い

一年生です震災の日の赤児

コンニャクの元大臣のはいはある

マシムマロに埋もれてみたいホワイトデー

人間で生き通すことむづかしい

六甲川柳会(兵庫)

市坪

武臣報

下積みに徹して光る人間味

愚痴ひとつ言わず支える土ふまず

甘酒でほっこりとする梅祭り

損で得た知恵で磨いた年の功

土蹴って春だ春だと路のとう

ワンコイン手にスキップで来る句会

いずれ土に還る時まで悪あがき

一言の謝罪が出来ぬ意地つばり

武彦

和郎

盛夫

和宏

千賀子

利子

浩司

正彦

いさお

満知子

紅絵

万作

堅坊

隆昭

柁子

浩子

直子

朝子

哲男

康信

紀乃

鈍甲

義泰

ひろ介

久美子

ダン吉

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井

宏造報

耳かきを上手に使っている社長
結論は出ていてつくる審議会

迷い道わたしを叱る寒椿

居心地がいいから鳥も庭に来る

黙黙と登って降りた山がある

おのおの方奥を大事に死後離婚

難しく考えないで自然体

のぞき穴来世もやはり美女で生き

一面の菜の花無人駅無情

僕達は戦友だねと言う夫

美津子

洋次郎

紀華

みよし

敦子

じろう

光久

晶子

秋果

一徳

武臣

邦子

洋一

道子

敏夫

逸郎

忠貞

芳江

弘

文香

博史

じろう

洋次郎

恵子

美穂

光久

ずいぶん夜明けが早くになりました
段取り悪くいつもせかせかばたばたと
せかせかへばっかり浮かぶ春の雲
せかせかとしても一日はいちにち
せかんでもあの世の使いやがて来る
せかせかと身勝手になる歳をとる
今日も又言った言わない聞いてない
せかせかと豆が転がるような女
せかせかと刻を食べてる砂時計
せかせかの心について来ず
勿体ない少し残して腐らせる
腐ってる間がありや励め父の喝
腐敗責め自分の腐敗はおかぶり
大胆な行動に出る春の猫
神さまに残り時間を聞いてみる
大胆に生きねば老いはつとまらぬ
被災地に元気が戻る槌の音
ゆったりといつでも雲は聞き上手
褒め言葉はちゃんと聞こえる老母の耳
ゆったりと側にいさせてほしいのに
初対面歳を聞かずに干支を聞き
透明の自分を見つけ愉快なり
腐っても鯛と言えない養殖魚
ゴミも金8億の価値あるうとは
竹槍で勝てると思ひ込んでいた

勝弘

浩司

いね

能子

千賀子

盛夫

弘子

恭子

野鶴

りこ

光子

文香

正彦

宏造

章子

哲子

キヨミ

千代

利子

ひとみ

武臣

伯備

千恵子

邦男

輝彦

長柳会(大阪)

辻村

ヒロ報

思い出を巡らせ老いを磨いてる

ヒロ

その野心周り泣かせていませんか

巡る四季今年も見れて安堵する

巡回し独居老人声をかけ

野心家の妻と気弱な夫です

一つずつ省いて老いに立ち向かう

古い最中四季の巡りは矢のごとし

のし袋少し多目に入れておく

観覧車愛の吉日ひと巡り

脂肪を脱ぐ野望に満ちたストレッチャ

野心秘め狐狸妖怪のたまし合い

手間省くことが上手な経験値

介護する母への手間は省けない

ママがチン手抜き料理はお手の物

食欲の野心に負けて棄潰け

酒二合あとはすこしの飯と汁

一人居の料理の手間を省く日々

竹べいに何度でも打たれてる野心

バック一つだけで上京する野心

野心抱き都政に凜と咲かす百合

ひこ生えの緑希望のメッセージ

いつか父を越えると誓う反抗期

湯けむりに野心を捨てた顔が浮き

終活で野心も捨てて南無阿弥陀

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

ゆつくりと老後温泉三昧で

良い事を思えば運も味方する

四季の富士風呂屋の壁に見とれてる

篤

弘美

洋二

もこ

幸子

光弘

正博

美子

隆彦

純風

知津子

たけし

由夏

三和子

直樹

マサ

淳司

正美

孝代

和子

ともこ

和代

靖博

房子

みつ子

久仁雄

夢うつ湯気の向こうに志賀直哉

温泉を出ると頑固が消えていた

小さな夢追えば希望がわいてくる

露天風呂あつと驚く流れ星

長逗留してみたいです美人の湯

ボスターの美人はいない露天風呂

温泉の素で我家は今日別府

温泉にグルメおんなの至福なり

湯につかれ見える有馬の月白し

前傾の姿勢で冬を乗り越えた

参観日やる気見せてる子の姿勢

ほたる川柳同好会(大阪) 水野 黒兎報

桜さくら他はまとめて春の彩

他所にない味を自慢の地酒蔵

表彰状その他の人は以下同文

他人には言えぬスカタン繰り返す

残業を切り上げプレミアム・フライデー

子に残す価値あるものは元氣だけ

気まずさを残して会は終われない

残り物並べつまいし主婦の昼

天地人残る三句に期待する

楽々の暮しに見えて火の車

らくらくと打つイチローに汗がある

抜け道をいっぱい知った蟻となり

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

少しでも軽くと傘は置いて来た

昌紀

光久

たもつ

加お里

美智代

扶美代

蕉子

美籠

智恵子

希久子

楓楽

春代

正子

長一

堅坊

柳童

順子

久子

郁子

信男

勝

黒兎

美佐子

耕治

ボーフラのように川柳できもせず

定年後遊んでいます腕時計

開店にどこか来るが試食のみ

どこかかと降って昼寝の名残り雪

春うららおにぎり食べる花の下

どこかかと家宅搜索のダンボール

楽しみは食べることだけ老二人

啓蟄に白い手帳が黒くなる

うらやまし払ってみたい相続税

腕相撲は右腕時計は左

たそがれてお子さまランチ欲しくなる

赤ちゃんの輪ゴムを巻いたような腕

すごいやる力こぶだと見せる孫

梅林で目礼交わす過去のひと

腕組みの中に思案の一大事

手をつなぎ母の歩調で散歩する

世の中に蓼食う虫の無かりせば

幾万の殺生をしたイカナゴ煮

どこかかと面白く書く週刊紙

七福神みんな揃って来てくれた

説明はつかぬ恋とはそんなもの

長らえて余白ゆつたり春を食む

水ぐくり飲んで二度寝の湯治宿

息子には弱味を見せぬ腕相撲

鍋つつく箸人見知りなどしない

お人好し腰の軽さを誉められる

稀勢の里行く先に人の波

飢餓の子に御免なさいと食べ残し

英坊

修平

りこ

晴美

柳明

つね湖

初音

章子

紀恵

花門

健二

こみつ

洋子

雪菜

キヨミ

宏造

歌留多

哲夫

奮水

祐康

ひとみ

ヨシエ

正和

ひろ介

美籠

かずお

千賀子

純

食べてみてあんがい甘い人と知る
タンポポの綿毛が乗った春の風
青春は転び上手の怪我もせず

晶子
靖鬼
紀華

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

一直線に並んだ蟻の労働歌
しっかりと化粧直してハイポーズ
正直に言えば許すと云ったのに
切って直ぐ話足りぬかまだメール

良子
浩二
すみ子

素直な子出世街道成功者
卒業のない晩学の辞書をくる
川柳は卒業のない遠い道

弘子
公平
善之

卒業し自由に生きる弘兼氏
親卒業孫の育児を予約され
卒業の出来たお礼を父母に言う

敬子
照子
和夫

人間を卒業する日楽しみに
当りましたトイレ掃除と庭仕事
貧乏くじだけはきっちり引き当てる

舞夢
理恵
恭昌

当りくじ遠い知人も寄って来る
当るのは少しと絵馬がつぶやいた
当てましょか顔に年齢書いてある

蕉子
希久子
志華子

陽当りの墓地につくしの揃い組
当たってくるから反発したくなる助言
ゆつくりと五体のネジがゆるみ出す

楓楽
富子
集子

私を待つてくれている白い画布
年取れば増々放せぬ電子辞書
さくらさくらふつつか者でございます

日の出
義
げんえい

「また来てね」美人ナースに誘われる

げんえい

悪口を言うたら口が裂けてきた
重ね合う夫婦茶碗にある絆
根ほり葉ほり聞いた結末知らされず
何れくる寿命は神の思し召し
あれこれと規則作って田を守る
新しい機種へ孫から助け舟

眞澄
正雄
捷也
満作
みつ子
桃花

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

指切りはれんげ畑の秘密ごと
秘密だと言えば次の日みんな知り
ランドセル光るビカビカ一年生
誰にでも一つや二つ有る秘密
兄弟で光る頭にタオルのせ
秘密ですうわさ話に羽根が生え
ひとすじの光を呉れた医師の言
闇深くなるほど光の増す教え
素人が研ぐ包丁は光るだけ
ほどほどの秘密がないとつまらない
何かある夜中夫がうなされる
かくし事妻の目線があぶり出す
ホッとする免許返戻報聞いて

あや乃
みちる
陽
昭好
風
やすの
泰子
亜成
正太郎
敬子
薫
笑子

岸和田川柳会(大阪) 石田ひろ子報

舞台裏知って語らぬ男の美
B面に触れて優しい人と知る
裏とって迫る質問逃げ場ない
近道でないけど通る裏通り
若者の食通が行くナンバ

大輔
みつ江
義泰
宗博
和美

二千万の命が昭和史の裏で
風雷に耐えて耐えてのやがて春
一滴もやがて大河の水となる
やがて来る春を信じて頑張ろう
やがてくる南海地震備えあれ
じつと待つやがて五七が花開く
終活はせんでも行けるやろあの世
泣き疲れやがて可愛い寝息立て
涙あふれ送る言葉をつつんでる
送別会胴上げされて落される
見送りは門出だったと過ぎてから
漫然と送った日日が悔やまれる
賑やかに送ってやろう家族葬
安易に送る大切な日日
本心は書留便で送ります
送り主不明の小箱からサタン
病院の母いつまでも立っている
送られて熱くなつて回る回道
先送りばかりしている国のツケ
エプロンに命をかけるトップシエフ
エプロンが遣り繰り上手知っている
ひろ子

ダン吉
ふさゑ
洋一
喜代志
忠太
景一
英夫
カズ子
侑子
清
信子
紀乃
笑司
三成
喜八郎
浩子
信二
ばっは
隆昭
益男
ひろ子

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

西年の今年も幸がとんでくる
給食のパンで戦後の背は伸びた
雪晴れの朝日アロエと拝みます
節分生れ八十八の豆拾う
八十路坂越えて楽しく若返り

かね子
日枝子
美佐子
あやこ
美草

煩惱が百八つでも払えない
問題は解決青になつてます
湯豆腐がいいねと雪が降ってくる

瑞枝
宏之
紀の治

初春の梅にスズメも良く似合う
惚け防止包丁持つ手言つてい

多美子

晴れる日を待とう心の水まわり
何事も笑つてやれば良い結果

千代
治代
令位子

間違ひを認められないえらい人
野次の主後ろを見れば我が身内

恵子

ノックしてロックしてない使用中
雪に軍配庭の糸ヒバ押し倒し

雨奇
美穂
ゆたか

大雪がもたらす吉の助け合い

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

強運の雲追いかける揚げ雲雀
金運と女運には恵まれる

みつこ
まつお
育代

稀勢の里運鈍根の晴れ姿
幸運の女神は近いとこにいた

いさお
一歩
フジ子

感謝して生きると運も附いてくる
失敗は神様のせい僕じゃない

一文
瑠美子
勝弘

車から虹を見ました幸運だ
生まれつき愛想がワルくすんまへん

勝弘

愛想はいいが全然負けよらん
不愛想でしぶちゃんやけど好きな人

六點
光男
美代子

腰痛で帯しめているコルセット

真

スーダンが危険地帯とお氣付きか
横綱の帯を狙つた金の星
帯付きの札東誰に永田町

雄太
弥生
ちづる

一日だけの我慢成人式の帯
小原女はとても絵になる京の町

扶美代
喜代子
武人

対岸はなんて遠いの天の川
捨てがたい帯ににじんだ母の汗

絹子
雅枝

お太鼓に結んだ妻に惚れ直す

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

恵子報

一刻を争う神の手メスと針
時時は聞かせる為の独り言

重成
弘一
寿子

ぬか床でじつくり漬けてある禁句
千の風できつと恩師も飛んではる

修

口にせぬ痛みは持つて逝く痛み
軍備費が重くて沈む国もある

博泉
鈍甲
麗茜

降車まで器用なメイク見せられる
赤ちゃんは柔らかなあんなよなめている

賢子

眼が合つてその場で恋に落ちた日よ
絆という宝即席では出来ぬ

朝子
あさ子
美江

遠すぎてメール届かぬ彼岸の日
不器用な人が発明特許とる

洋

居酒屋で沈没してる父の船
少年が夢を語つた沈下橋

武彦
祥昭
薫

雑音と一緒に聴いた天の声
浮き沈み半分浮いて良しとする

博

沈んでる被災地で買う地元産
左手で叩いて右手握手する

郁夫

母さんの胸に抱かれて大欠伸
子育てはインスタントにほど遠く

秀雄
かすみ
信子

獅子になり沈めた親の子は強い
ほろ酔いの目には小さな鍵の穴

美龍

ブランドを何も纏つてない美人
国の為海の藻屑と消えた0(ゼロ)

遠野
壽峰
高鷲

器用さがわざわいをしして撤を踏む
雑音に揺れぬ男の背の角度

仁

人並みの器用さあつて欲張らず
腹八分器用に守り病なし

忠央
弘委智
高志

藪医者が何でもたべていいと言う
背なを掻く鯨尺手に母想う

恵子

わたくしの真正面に日が沈む

川柳さんだ(兵庫)

田中 章子報

春ですと香りで知らず梅の花
頑張りが無駄でなかったサクラ咲く

修平
光久
ちあき

過疎に咲くあなたの強さ我も欲し
咲く余力ありと信じている蕾

美龍
花門
好文

はかなくも一日花というさだめ
マンシヨンの雇人情薄くする

健二

千円を限度に金を貸す余裕
法服の非情人情切り捨てる

耕治
武彦
厚子

出世には遠いピエロにある情け
人情味知つて野良猫住みついた

一子
迪子
隆

信じ合う友と本音の憂さ話
人生は何とかなると信じてる

隆

私に信じることは何も無い

神様を信じる時と恨む時

性善説信じた俺が馬鹿だった

信じ合う歩幅で歩く並木道

今はただあなたの背中見えています

凄いだろうな人が野生に戻る時

最近の小学生の受け答え

咳払い一つで会に水を打つ

千年も踏まれた邪鬼の持つ野心

ギャップある阿倍さん感謝いう園児

妥協して隙間を埋める知恵しる

原発をまだ作る国やめる国

やめてくれ僕の宝は妻のゴミ

雑学は脳のすき間に詰めている

りんご便津軽なまりの母の声

スパイスをきかせ私の勝ち名乗り

甲子園輝いてみんな孫

祝辞聞く卒業生の泣き笑い

連休日長蛇の列の中にいる

正直に言えば言うたで又もめる

旅立ちの春には想う母の顔

病院の行き届いてる花の世話

大山滝句座(鳥取)

新家

完司報

曇のち晴れ時々花吹雪

仲良しの角度を知っている鏡

天上の星にいくさの跡がある

時々タヌキになつてやりすこす

千津子

加代子

雅尚

義徳

ひとみ

哲夫

清司

キヨミ

博

ひろ介

ヨシエ

正和

祐康

えい子

優子

真由

美智子

野薫

涼子

靖鬼

健彦

歳子

ボロクソにとときき言つて愛おしい

天国へ行くかママチャリを漕いで

リハサル無しの人生みな生きる

有難く天然水を買つて飲む

平凡を天の配剤受け止める

罪なこと花を筆つて好き嫌い

仲良し小良し杵から一歩踏み出せず

階段は嫌いになった老いの膝

嘘つきは嫌いだ顔に出てますよ

天国は満員娯婆に帰される

しつかりと根を張つてから天目指す

天狗にも馬鹿にもなれぬ石頭

天啓が降りて来ぬかとする散歩

仲良しは自分を捨ててすることもあり

地を這つて生きて暮らして天に着く

夫婦とも多少なりともまだらボケ

夫婦ゲンカばかりの親も今は天

無垢な子に仲良し小良し教えられ

戦争は嫌いだが鬼となる

五十年つらぬき通す納豆嫌

マイナンバー厄介なもの増えている

官僚はシルバーシートに天下る

時々で程々にして雨や雪

お彼岸とお盆しぶしぶ墓参り

豊中もくせい川柳会(大阪)初代

正彦報

ひな祭せて下戸でも白酒を

感動の芝居を語る涙声

芳山

楓花

紀の治

大鯰

美ツ千

雄大

風露

けいこ

蟹郎

麦青

石花菜

幸子

昭子

道唱

規雄

コスモス

正男

重忠

鈴野

久子

清明

希楽良

完司

求芽

肇

男性は美人ならず肩を持つ

いたわりに甘えを捨てて自立心

心の荷重いものだが降ろせない

せめてもと宅配便に道ゆずる

お迎えを願う母食む桜餅

ブランコが悠々越える春の山

ここで会いここで別れた古校舎

群れるのも燥ぐのも好き回遊魚

遅くともせめて前へと蝸牛

うらぎつて裏でつないだ手ががゆい

別れ道せめて大きく手を振ろう

真つ直ぐに生きると釈迦の手に触れる

口こころ閉ざし無色の倦怠期

肩たたきされた凝つてはいないのに

梅から桜お軸を変えて日曜日

凸凹の舗装道路と知る歩み

肩寄せてサンマを二匹買つていく

肩落した日日乗り越えた子の自信

撫で肩の阿弥陀さまにもある威厳

言い訳に肩肘を張る利己主義者

人生の幕は自分で閉められぬ

肩の荷を下ろすと風もやわらかい

さくら咲き大和民族浮遊する

午前様せめてお詫びに風呂掃除

閉めていた心にも春ノックする

肩書きが取れて尻尾も暇になる

こはれ種大樹夢見て土を割る

(留)玲子

健二

武彦

美津子

真理子

美佐子

公子

きらり

堅坊

久子

千鶴子

義昭

遠野

靖鬼

宏子

見清

耕治

葉子

正彦

則彦

満子

美籠

黒兎

歌留多

雅美

(永)玲子

美智代

句会名	日時と題	会場と投句先
豊中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時50分締切 笑顔・あきれる・やっと・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳塔 さかい	16日(火) 13時開場 するとい・痛み・折句・せかい	堺市総合福祉会館 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳 さんだ	16日(火) 13時30分締切 挑戦・戻る・フランス どんどん・自由吟	JR「三田」駅前 キッピーモール6階 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳 たちばな	17日(水) 14時締切 印象吟・葉(互選)・辛い 自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田 川柳会	20日(土) 12時30分開場 五・囁く・ふわふわ・ネオン	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	20日(土) 17時締切 薫る・ねっとり・パノラマ	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川柳 ねやがわ	21日(日) 12時開場 快感・適当・勇ましい・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	21日(日) 14時締切 雀・空港・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
南大阪 川柳会	22日(月) 18時開場 さっぱり・バトン・転がる・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 すみよし	23日(日) 13時開場 迂回・助ける・おろおろ	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸柳会	27日(土) 12時30分開場 縦(たて)・宝・拾う	和歌山商工会議所 4階第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸柳会」宛
はびきの 市民会 川柳会	28日(日) 14時締切 都合・奪う・ベット	陵南の森公民館 近鉄「高鷺」駅北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	28日(日) 13時30分開場 ドーピング・礼服・待ち切れん	開発ビル 2Fホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
京都 塔の会	29日(月) 14時締切 叩く・からっぽ・先	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(火) 14時締切 卵・ほかほか・逆らう	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三條23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城 北 川 柳 会	6 日(土) 14時締切 化ける・鶴呑み・くるくる・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	6 日(土) 14時締切 路・器・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL:0721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	6 日(土) 14時締切 とぐろ・涼しい・回る	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	6 日(土) 12時30分開場 曲がる・乱す・群れ・変化	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
西宮北口 川 柳 会	8 日(月) 14時締切 実感・泳ぐ・さばさば・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火) 13時30分締切 老・帰る・印象吟	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 あまがさき	9 日(火) 14時締切 遊ぶ・家・ばらばら・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川 柳 会	12日(金) 14時締切 響き・恋・宝石・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	13日(土) 14時締切 讀る・秘密・屋台	地下鉄・長堀鶴見緑地線「京橋」駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	13日(土) 14時締切 明るい・意地・余韻・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川 柳 塔 打 吹	13日(土) 13時30分締切 油・チェンジ・サワサワ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	14日(日) 14時締切 案外・だいなし・煙る・雑詠	八尾市淡川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	14日(日) 14時10分締切 兼 題 = 駐車・浮く・あのねのね 課題吟 = 若	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桑原道夫

柳界展望

した。
★第39回吉野ヶ里川柳大会は4月16日、佐賀県吉野ヶ里町「きらら館」で開催。出席者202名。同人天位。二言め。オレの頃はと長老の二言め。

花束の中一輪は妬心なり
析尾 奏子

★「創立88周年ふあうすと川柳大会」は、4月9日兵庫県民会館で開催。出席者250名。同人成績。神戸市市議会議長賞

両川 無限

春が生まれる時計屋も帽子屋も

★「墨作二郎を偲ぶ川柳会」は3月30日堺市総合福祉会館で開催。出席者128名。同人成績。

秀句 小谷 小雪
お呼びするまで遊んでいて下さい

★「第5回卑弥呼の里誌上川柳大会」参加者590名。同人成績。

特選 西出 楓楽
影を抱き続ける冬のウ

アイオリン

★松山芳生さん（青森県・同人）は弘前川柳社の第29回林檎大賞を受賞

★小島蘭幸主幹は「尾道文化」35号に評伝「須崎豆秋」を執筆。

▽柳界動向△

○本誌インスピレーションナビの選者・大西泰世さんの「こいびとになつてくださいますか昨」が、ビッグコミック・オリジナル「あかほし俳句帖」（有間しのぶ作・奥山直画）に取り上げられた。

▽出版△

○合同句集「ろっこうみちⅡ」六甲川柳会発行。B6判119頁。

▽お詫びして訂正△

▼四月号、P.102下段、「佳句地十選（4月号から）」↓（3月号から）。

「佳句地十選」山岡富美子選2句目、森に出てゆ

つくり森の色になる↓森にきてゆつくり森の色になる。P.109、下段20行目、オレの頃はと長老の二言め↓オレの頃はと長老の二言め。

▽新誌友紹介△

米子市 戸田真理子

紹介者 両川 洋々

吹田市 岩口のぞみ

紹介者 古今堂蕉子

河内長野市 山本 美子

紹介者 村上 直樹

枚方市 谷 英也

紹介者 初代 正彦

豊中市 木村 裕子

紹介者 前 たもつ

名古屋 山本三樹夫

紹介者 早川 遯行

大阪市 小野 雅美

紹介者 古今堂蕉子

宝塚市 奥田 勝子

岸田 万彩

中野 忠

姫路市 常任理事会

3月7日（金）

①誌友普及について②大阪川柳大会について③定例確認事項。

次回5月8日（月）AM10時

新同人紹介

上 出 修
楓楽・和夫推薦

第64回 八尾市民川柳大会

とき 8月5日（土） 正午開場

ところ 八尾文化会館5F レセプションホール
（昼食は済ませてお越しください）
（プリズムホール）

会費 2000円（作品集・鉢植え花）
（近鉄八尾駅下車 徒歩5分 西武デパート東隣）

宿題と選者 各題2句 提出・席題なし

「実」 前田 紀雄 選

「心」 小林 和之 選

「美」 辰巳 和子 選

「口」 嶋 喜八郎 選

「天」 池 澤 森子 選

「金」 田 中 新一 選

「傘」 土田 欣之 選

出句締切 午後 1時

懇親宴 4000円（希望者のみ当日受付）

お問合せ 土田 欣之（電話072-992-4934）

主催 八尾市民川柳会

第10回記念 松江市川柳大会

日 時 7月30日(日) 10時30分開場
会 場 松江テルサ4F(JR松江駅隣 TEL 0852-31-5550)

参加費 1500円

事前投句 事前投句締切 7月10日(当日消印有効)

「へらへら」 石 橋 芳 山 選

宿 題 各2句(出句締切 13時)

「角(かく)」 丸 山 進 選

「遊 ぶ」 新 家 完 司 選

「メ ガ ネ」 熱 田 熊 四 朗 選

共 選 (女性三人による共選)

「セ ン ス」 徳 田 ひろ子 選

平 井 美智子 選

樋 口 由紀子 選

欠席投句 1000円(切手不可)

締 切 7月10日(当日消印有効・厳守)

投句先 (事前投句・欠席投句)

〒690-0866 松江市下佐陀町336-1

松尾 芳恵 まで

投句方法 便箋大の用紙に各題2句・郵便番号

住所・氏名(ふりがな)記入。共選3人ですが

当方にて無記名清記しますので2句で結構です。

主 催 松江川柳会

川柳塔すみよし10周年記念川柳大会

と き 6月18日(日)

開 場 12時 閉会 17時

と ころ ホテル・アウィーナ大阪 3F 葛城の間

おはなし「川柳こぼれ話」大西 泰世 氏

兼 題 「期 待」 長島 敏子 選

「続 く」 川上 大輪 選

「 神 」 西出 楓 選

謝 選 「チャンス」 鶴田 遠野 選

事前投句「住 む」 5月20日必着

小島 蘭幸 選

*各題2句 欠席投句拝辞

(各題天位に賞呈)

*出句締切 13時30分

*御芳志は辞退させて頂きます

会 費 1500円(記念品呈)

懇親会 7000円(先着申込み50名)

(17時30分～19時30分)

第32回国民文化祭・なら2017 川柳作品募集要項(概要)

日 時

平成29年11月12日(日)

9時30分開場

場 所

かしはら万葉ホール 1階 ロマントピアホール
〒634-0075 橿原市小房町11-5

交通機関

近鉄大和八木駅から無料送迎バス10分(9時以降随時運行)

事前投句 4月中旬～7月31日(月)(当日消印有効)

「金 魚」 西 潟 賢一郎 選

「響 く」 大 内 朝 子 選

「憧 れ」 平 田 朝 子 選

当日投句 11時30分締切

「古 鐘」 安 藤 紀 楽 選

「焼 く」 鈴 植 野 美津江 選

「焼 く」 順 子 選

応募料 事前投句 1000円
応募方法 所定の用紙
問合せ先・投句先

〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-905

全日本川柳協会

TEL 06-63352-22
FAX 06-63352-2433

編集後記

★草千里私も馬になつてくる 薫風

★第五回誌上大会にご参加くださった皆さまに心よりお礼を申し上げます。珠玉の作品の数々は川柳塔の血となり肉となることを信じて疑いません。

★「英語で川柳」の連載も六五回を迎えた。筆者の吉村先生は、現在ガーナやクロアチアの俳句や川柳をご紹介下さっているが、世界中に張り巡らされた人脈の広さに感嘆する。先生から頂いたメールをご紹介したい。

★「バルカン半島は驚くほど俳句と川柳が盛んです。一月号と二月号はガーナの詩人に川柳塔を送りました。またその表紙と記事は私(吉村)のフェイスブックで世界に発信しています。川柳塔は世界中から注視されている状態です」

★お気づきかと思えますが英語で川柳欄には、英単語にちゃんと和訳がついています。学生時代に返ったつもりで自分なりの翻訳にチャレンジしてみても。意外な発見があるかも知れません。

★三月二十四日は短編『檸檬』の作家梶井基次郎の命日。基次郎は明治三四年二月一七日に大阪市西区土佐堀生まれ。昭和七年三月二十四日、大阪市阿倍野区王寺町二丁目で没した。享年三一。地下鉄谷町九丁目駅近くの常国寺に眠っている。

★今年は没後八五年。その日、俳人の坪内稔典氏と俳人十人ばかりで墓参をした。檸檬忌というところと遠く伊豆から二人、愛読者の方が来られていた。普段になく墓前には花が溢れ、レモンが五、六個供えられている。

★それにしても俳人のフットワークの軽さに驚く。「三月二十四日梶井基

初めての講師

ひとこと

地域文化発展と交流を兼ねて「書道教室」「フラダンス教室」と併せて「川柳教室」を開講したいので、協力して欲しいと友人の公民館館長に懇願されて「公民館川柳」の講師を始めてから一年六ヶ月。毎月第一火曜日の午後から二時間、ほとんど初心者ばかりの会員十人は、六十代から九十一歳の女性と高齢者ばかりなのは現代の川

柳会の宿命か。

五七五の川柳の基本を中心に始めた教室で、戸惑いながらの新米講師ではあるが、会員の皆さんは熱心に作句。日に日に上達され嬉しく思うと共に、私にとっても初心にかえって川柳そのものを「推敲」することで、教え教えられるが、会員の方々と楽しんでいる。今である。

まだ傘寿脳はますます活性化

(磯部 義雄)

次郎の命日だよ」の私の「やってられるか」と仏一言に「じゃあ皆でお参りしよう。参加出来る人・・・」と、とんとんと話がまとまったのだ。つくづく俳句は行動と観察の文芸だと痛感した。(朱夏)

●緊張と緩和の言葉は好んで使った落語家桂枝雀(面白かったなあ。緩和が過ぎるとウツウツと居眠りが出そう・・・S紙に居眠りの面白い記事を見つけた。

●立川談志が高座で●その居眠りが出て困るののは句会だろう。入選句を選者が披露するとつかさず「○○ー」とテンポよく呼名が出る句会には実に楽しい。が、呼名がない時、「どなたですか」と選者の再度の問いかけにも返事がない。会場がザワザワした頃「あ!私です」で決着。作者も舟を漕いでいた。「単調は退屈の母」とは徳川無声の警句。緊張と緩和、上手に使い分けたものである。

(まつお)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)」

地名

市都
道府
道
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- (4)

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお問い合わせいたします。

檸檬抄投句用紙

「あっさり」(5月15日締切)

7月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとらせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 一	 		☐ ☐
				年 年 月 月 から から 半年 半年 年 年 9 5 8 0 0 0 0 0 円 円 該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社（電話 06-6779-3490）

振替 00980-4-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

個人用

暑中見舞広告 原稿台紙

きりとらせん

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(ご希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

5月20日締切

川柳など掲載希望事項

電 話	住 所	姓・雅号
()	〒	
()		

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社

作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島蘭幸選
水煙抄 (8句)	西出楓楽選
愛染帖 (2句)	新家完司選
檸檬抄「あつさり」 (2句)	北野哲男共選
インスピレーション・ナビ (2句)	安土理恵選
一路集 (2句)	大西泰世選
「波」	山崎武彦選
「空気」	飛永ふりこ選
初歩教室「スポーツ」 (3句)	居谷真理子担当

8月号

檸檬抄「タオル」
一路集「裏表」「装う」
初歩教室「番号」

本社5月句会

とき 5月8日(月) 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし「これからの川柳」

兼題「珍」
 席題「ほる」
 「もれる」
 「女優」
 「植物」

会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)

小井 鈴木 榊 石 河 松 岡 恭 子 氏
 島 上 木 本 田 内 月 子 氏
 蘭 一 い さ お 彦 選
 幸 筒 選

本社6月句会

6日(火) 午後1時から
 兼題「乱」「インチキ」「久しい」
 「ふくれる」「無料」

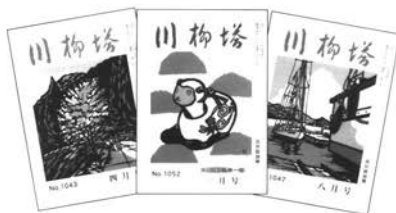
川柳塔WEB句会のご案内

課題「影」 美馬りゅうこ 共選
 片山かずお
 締切 5月20日 発表 5月25日頃
 投句料 無料
 インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
 TEL (06) 6372-1178
 FAX (06) 6372-1196
 E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料83円)
 半年分 五千円 (送料共)
 一年分 九千八百円 (同)
 二〇一七年(平成二十九年)五月一日発行
 〒543-0052 大阪市天王寺区大道一〇一四一七
 花野ビル201号室
 印刷所 美研アート
 編集人 小島和幸
 発行人 木本朱夏
 発行所 川柳塔社
 電話 (06) 6772-1178
 振替 〇〇九八〇四一 九八四七九番

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする
ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと
無く引き出した、オニザキの
自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 大阪府富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都千代田区内神田3丁目2番12号 〒101-0047

(陽光ビル 4F)

TEL 03-3254-4120 FAX 03-3254-4121

E-mail: kamotani@koki-envelope.com

URL: http://www.koki-envelope.com